第71回
全国造形教育研究大会
秋田大会

第63回東北造形教育研究大会
第42回秋田県造形教育研究大会

大会報告書

AKITA ZOKEI

あきた発　新たな美を拓く

～わたしを問い，発信する造形活動～

平成30年7月30日(月)・31日(火)

秋田県秋田市 開催

全国造形教育研究大会　秋田大会
報告書

目次

■秋田大会を終えて ---------- 1
全国造形教育連盟　委員長
全国造形教育研究大会秋田大会　大会会長

■大会を振り返って ---------- 2
奥村高明（日本体育大学児童スポーツ教育学部教授）

■授業および分科会一覧 ---------- 3

■研究説明と研究のまとめ ---------- 5

■記念講演 ---------- 9

■文部科学省講話 ---------- 13

■公開授業と分科会 ---------- 23
小学校　中学校　小学校鑑賞　中学校鑑賞　幼稚園・保育所
特別支援　高等学校　大学

■実践発表と協議会 ---------- 65

■あきたの造形教育・美術展 ---------- 70

■役員一覧 ---------- 74

第７１回秋田大会を終えて

全国造形教育連盟
委員長
大野　正人

この度、７月３０日、３１日に亘り第７１回全国造形教育研究大会を秋田県秋田市にて開催できたことは、大変、喜ばしいことです。開催に際し、秋田県造形教育研究会小林高太郎大会会長、木村伸実行委員長を中心に、秋田県、秋田市始め、第６３回東北造形教育研究大会として東北地区始め多くの皆様からご後援、ご支援いただきました。幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校、大学、美術館等、全国並びに台湾から６００人程の皆様にお越しいただき、有意義な研究大会となりました。深くお礼申し上げます。秋田県では、第２３回大会以来、４８年ぶりの全国大会となりました。

１日目、秋田大学教育文化学部附属中学校を拠点に、各種会議及び各園校種会場にて公開保育、公開授業、分科会、協議会を開催しました。２日目は、秋田キャッスルホテルにて、実践発表、記念講演、文部科学省講話・講評、全体会にて閉会となりました。大会を通して、次期、幼稚園教育要領、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校学習指導要領の実施に向け、今後益々、校種や地域の交流を図り連携していくことの大切さを改めて認識した次第です。「あきた発　新たな美を拓く～わたしを問い、発信する造形活動～」の大会テーマの下、全園校種等に亘り積極的な意見交換がなされ、盛況の中、幕を引くことができました。

結びに、ご指導いただきました日本体育大学奥村高明教授、記念講演にご協力くださいました藤本智士様、井野英隆様、青谷明日香様、指導講評いただきました文部科学省岡田京子教科調査官、東良雅人視学官、そして、秋田県、秋田市始めご協力いただきました全ての皆様に感謝申し上げ挨拶といたします。

わたしの問い　あきたの問い

第７１回全国造形教育
研究大会
秋田大会　大会会長
小林　高太郎

真夏のみちのく秋田市において、実に４８年ぶりに開催されました今大会に、全国から６００名を大きく上回る皆様にご参加を頂き、充実した二日間となりましたことに心より感謝申し上げます。また、至らぬ運営にもかかわらず、皆様のご支援により、大過なく日程を進行できましたことにも、重ねて感謝申し上げます。

さて、私どもは、今大会における子どもたちの学びの姿や展覧会を通して、大会テーマにある「～わたしを問い、発信する造形活動～」を追求する秋田県の今を皆様方に少しでも感じ取って頂きたく運営を進めて参りました。また、「くらしとびじゅつ」をテーマとした講演においては、豊かさと造形教育の関わりを提案させて頂きました。

参加された皆様方からの貴重なご意見やご指導から、私たちは、かつての造形教育から今日の造形教育へ、さらに未来を創造する造形教育へと、時代に即応し、日々進化させていくべきであることを、改めて確認できたと感じております。

今後、この度の貴重な経験を、本県造形教育研究の推進力とし、人間形成に大きく関わる「真に社会に必要とされる造形教育」の確立を目指し、より真摯に研究の充実に努めて参りたいと考えております。

結びにあたり、秋田大会開催にあたり、多くのご支援とご協力を賜りました文部科学省をはじめ、関係の皆様に、心より感謝と御礼を申し上げます。

「秋田大会を振り返って」

日本体育大学児童スポーツ教育学部
教授
奥村　高明

全国大会は日本独特の研修システムです。開催地域が設定したテーマをもとに、授業研究、作品展、講演会等を実施します。参加者はこれらを通して何を学べたのでしょう。

1. テーマの「方向性」

大会テーマは「わたしを問い、発信する造形活動」です。秋田県は平成２３年度から「問いを発する子どもの育成」を教育課題としています。秋田県造形教育研究会はその３０年前から「問いの教育」に取り組んでいます。

図画工作・美術で「問い」は聞きなれない言葉です。でも、学習活動の中で子どもたちは常に「自らを問う」ことが求められています。その結果が、私たちの目の前で展開される学習の姿や作品です。

新学習指導要領で重要な概念である「問い」を先取りし、これからの学びを考えることができたテーマの先見性に参加者は新しい視点を得たことでしょう。

2. 授業を通した「検証」

新学習指導要領が告示された今、参加者の授業参観ポイントは、「主体的で対話的で深い学び」と「資質・能力の育成」です。

公開授業では、子ども一人ひとりが主体的に「問い」を生み出し、友達や材料などとの対話を繰り返しながら「問い」を発展させる学びが展開されていました。「問い」を軸にすることで「主体的で対話的で深い学び」を実現するという明確な方法論です。また、他教科との連携、美術館との協働、地域社会や文化の見つめ直しなど、現代的な課題を踏まえる題材も設定されていました。「資質・能力の育成」については、授業者だけでなく、子ども自身が「自分の発揮した資質・能力」を自覚することが重要です。振り返りやポートフォリオなどの手立てによって、子どもたちが、自分の発揮した資質・能力や、自分自身の育ちを理解している姿が参観できました。

参加者は、学びの深化や資質・能力の成長を確実に実感したことでしょう。

3. 作品展に見える「実現度」

図画工作・美術が他教科と異なるのは「大会の成果が作品展に表れる」ことです。

美術館や学校など様々な場所に展示してある作品からは、たくさんの声が聞こえてきました。「色の組み合わせを考えたよ」「奥行きを表すために工夫したよ」という子どもの声、あるいは「ありふれた日常から美しさを見つけよう」という教師の声などです。教師が適切に題材を設定し、そこで子どもたちは主体的に主題を決め、造形的な視点で日常や世界を見直した結果が伝わってきました。

新学習指導要領のポイント「造形的な見方・考え方を働かせる」は子どもにおいて実現していることが重要です。参加者は学びの成果が表れた作品に数多く出会えたことでしょう。

4. 講演会が示す課題

秋田大会には、大会を通して参加者が持ち帰る「問い」も設定されていました。それは記念講演で明確になります。

記念講演では、日本の文化や社会をこれから構築する３０代～４０代の講演者３名が「人々の暮らしや社会を美術と結び付ける」というテーマでディスカッションしました。それは、筆者がとらえていた概念よりも深く、クリティカルに個と風土を問い、美術の豊かさを見つけ出すものでした。参加者も、図画工作・美術を通した子どもの育ちやカリキュラム・マネジメントの展望などを持ち帰ることができたのではないでしょうか。

秋田大会が決定した２０１５年、新学習指導要領の具体像は不明瞭でした。関係者は「論点整理」や「答申」などの改訂作業と並走しながら格闘してきました。結果として秋田大会は、新学習指導要領を踏まえた「これからの図画工作・美術教育」を示すことができたと思います。

７月３０日（月）　研究授業及び授業分科会一覧

◆ Ⅰ 小学校会場（秋田市立明徳小学校）　◆ Ⅱ 小学校会場（秋田大学教育文化学部附属小学校）
◆ Ⅲ 中学校会場（秋田大学教育文化学部附属中学校）　◆ Ⅳ 美術館鑑賞会場（秋田県立美術館）
◆ Ⅴ 幼稚園・保育園会場（幼保連携型認定こども園 山王幼稚園・保育園）
◆ Ⅵ 特別支援学校会場（秋田大学教育文化学部附属特別支援学校）
◆ Ⅶ 高等学校会場（秋田大学教育文化学部附属中学校）　◆ Ⅷ 大学会場

会場	選択番号	題材名・授業内容	授業者	指導助言者
Ⅰ 秋田市立明徳小学校	①　研究授業①　１３：００～１３：４５　授業分科会①　１５：００～１５：５０			
	１－Ａ	小３年「ためして遊ぼう　○＋□＝自分だけの新聞紙ワールド」	大館市立扇田小学校 小　松　由　佳	秋田市立下北手小学校 教　頭　大　野　一　紀
	１－Ｂ	小４年「もしもこんな世界に」 ～トントンつないで～	北秋田市立鷹巣東小学校 豊　田　良　香	秋田県総合教育センター 指導主事　田　森　舞
	１－Ｃ	小２年「切って，ひねって，つなげると」 ～紙コップ大変身～	井川町立井川義務教育学校 佐　藤　美奈子	秋田南高等学校中等部 教　頭　築　地　洋
	②　研究授業②　１４：００～１４：４５　授業分科会②　１６：００～１６：５０			
	２－Ａ	小３年「お気に入りの　男鹿の色と形」	男鹿市立船川第一小学校 上　田　環	秋田南高等学校中等部 教　頭　築　地　洋
	２－Ｂ	小６年「夢の街・大曲　ドリームプラン」	大仙市立内小友小学校 佐　藤　智　美	秋田県総合教育センター 指導主事　田　森　舞
	２－Ｃ	小２年「さわってわくわく　見てはっけん！！」 ～ポリポリランドで　たのしくあそぼう～	由利本荘市立鶴舞小学校 宮　田　幸　江	秋田市立下北手小学校 教　頭　大　野　一　紀
Ⅱ 秋田大学教育文化学部附属小学	①　研究授業①　１３：００～１３：４５　授業分科会①　１５：００～１５：５０			
	１－Ｅ	小５･６年「でこぼこ画面を冒険しよう」 ～思いを色にのせて～	能代市立常盤小学校 小　森　哉　子	秋田県教育庁北教育事務所 指導主事　鈴　木　正　樹
	１－Ｆ	小５年「夜空を彩れ！マイ絵どうろう」 ～故郷を絵どうろうで表そう～	湯沢市立皆瀬小学校 佐　藤　靖　子	秋田市教育委員会 指導主事　黒　沢　淳
	②　研究授業②　１４：００～１４：４５　授業分科会②　１６：００～１６：５０			
	２－Ｅ	小１年「きって つないで どんなかたち?」 かみからうまれた わたしのぼうし	秋大教育文化学部附属小学校 佐々木　恵	秋田県教育庁北教育事務所 指導主事　鈴　木　正　樹
	２－Ｆ	小３年「みんなおいでよ！わたしたちの○○しょう店がい」	秋大教育文化学部附属小学校 進　藤　亨	秋田市教育委員会 指導主事　黒　沢　淳
Ⅲ 秋田大学教育文化学部附属中学校	①　研究授業①　１３：００～１３：５０　授業分科会①　１５：００～１５：５０			
	１－Ｇ	中２年「大館名産！あめっこのパッケージデザイン」	大館市立田代中学校 菊　池　わか菜	由利本荘市立岩谷小学校 教　頭　田　村　稔
	１－Ｈ	中３年「音を感じて」～ふるさとの音を、形に、色に～	仙北市立神代中学校 新　目　麻衣子	秋田県教育庁南教育事務所仙北出張所 指導主事　熊　谷　留美子
	１－Ｉ	中３年「羽後く！」羽後中発・箸置きを町のお店へ！	羽後町立羽後中学校 佐　藤　裕理子	秋田県教育庁中央教育事務所由利出張所 指導主事　菊　地　邦　彦
	②　研究授業②　１４：００～１４：５０　授業分科会②　１６：００～１６：５０			
	２－Ｇ	中１年「私を支えてきたもの」～チョークで描く私の世界～	秋田市立城南中学校 土　門　正　佳	秋田県教育庁南教育事務所仙北出張所 指導主事　熊　谷　留美子
	２－Ｈ	中２年「自分の思いを形に」 ～空間や材料を生かした立体表現へ～	由利本荘市立西目中学校 安　保　朋　子	秋田県教育庁中央教育事務所由利出張所 指導主事　菊　地　邦　彦
Ⅳ 秋田県立美術館	選択番号	①　研究授業①　１３：００～１３：４５　授業分科会①　１５：００～１５：５０		
	Ⅳ	小４年「もしもアーティスト」～こんなタイトルつけたいな～	横手市立十文字第一小学校 藤　井　志津子	大仙市立大曲西中学校 教　頭　西　野　美　佳
		②　研究授業②　１４：００～１４：５０　授業分科会②　１６：００～１６：５０		
		中２年「AKITA・その色その形」～見て，感じたことを，伝えよう～	秋田市立御所野学院中学校 中　尾　裕　子	
Ⅴ 幼・保	選択番号	公開保育　１３：００～１４：００　協議・情報交換会　１４：２０～１６：００		
	Ⅴ	◆年少「色・いろいろ・楽しいな」 ◆年中「さんさん祭りだ！竿燈だ！」 ◆年長「どんどん広がれ　つきくみランド」	藤　木　玲　那 木　村　隼　加 櫻　庭　絵　美	淑徳大学 准教授　槇　英　子
Ⅵ 特別支援学校	選択番号	公開授業　１３：００～１３：４５　実践発表・情報交換会　１５：００～１６：００		
	Ⅵ	小学部３・４年わかば学級「プレイルームはもようでいっぱい！」	秋田大学附属特別支援学校 菊　地　雄　平・森　田　紗也子	秋田県立近代美術館 副館長　樫　尾　康　子
	実践発表内容	多様な他者との協働を通して自ら学ぶ力の育成	秋田県立栗田支援学校 北　島　珠　水	
Ⅶ 高等学校	選択番号	実践発表　１３：００～１３：５０　協議会　１５：００～１６：５０		
	Ⅶ	実践発表：高１年 デザイン 考察～掃除機ヘンリーが変えたもの～ 協議会テーマ:増加する中高一貫教育校における美術教育の現状と課題		秋田県立秋田南高等学校 深　井　裕　之
Ⅷ 大学	選択番号	情報交換		
	Ⅷ	大学・美術館部会は、１０：４０～１１：２０ 秋田大学附属中学校１Ｃ教室にて･･････情報交換テーマ：「美術科教員養成に関わる課題」		

７月３１日（火）　実践発表・協議会一覧

No.	選択番号	会場	発表内容・テーマ	実践発表者	協議会司会者	協議会記録者	協議会世話人
1	小－Ａ	３階 平安	**「みつめ、かかわり合い、つくりだす造形活動」** 自分の決意を伝える漢字に込めた思いが伝わるように、多様な表現方法を追求させる実践	岩手県花巻市立 笹間第一小学校 上田　佳穂	秋田県 秋田市立 土崎中学校 鎌田　政美	秋田県 秋田市立 岩見三内小学校 田口香奈美	秋田県 秋田市立 四ツ小屋小学校 小野　　哲
2	小－Ｄ		**「創造的な技能を育てる」** 雪の特性や場所の特徴を生かしながら、創造的な技能を育む、高学年の「雪を生かした造形遊び」の実践	青森県十和田市立 ちとせ小学校 葛西　　励			
3	小－Ｂ	４階 矢留 ②	**「鑑賞で″よさ″や″美しさ″を感じる力を高める授業実践」** 地域の画家の作品を学芸員になりきって紹介する鑑賞の学習を通して表現にも生きる「感じる力」を高める実践	秋田県大館市立 城西小学校 米田　樹史	秋田県 羽後町立 西馬音内小学校 藤原　和彦	秋田県 湯沢市立 湯沢東小学校 佐藤美紀子	秋田県 湯沢市立 須川小学校 柴田さゆり
4	小－Ｅ		**「対話を通して思いをつなげ、感性が響き合う造形活動」** 互いの良さや工夫を共有することで、感性が共鳴し合い、つくり出す喜びやまなびの深まりを実感できる造形活動の実践	秋田県湯沢市立 湯沢西小学校 古屋　佳子			
5	小－Ｃ	３階 弥生	**「感性を働かせながら自分の思いを豊かに表現することができる図画工作科の指導をめざして」** 自分の思いを表現させるために、見方や感じ方を振り返る場や材料に触れる時間、適切な言語環境などを工夫した実践	福島県白河市立 小野田小学校 角田　真弓	秋田県 横手市立 平鹿中学校 柴田　緩子	秋田県 横手市立 横手南中学校 高橋真理子	秋田県 横手市立 横手北中学校 佐藤　　稔
6	小－Ｆ		**「チョキチョキかみからつくったよ」の実践から** 小学１年生の「わくわく」を生み出し、持続させるための工夫を取り入れた授業実践	愛知県名古屋市立 東丘小学校 原　　敏史			
7	中－Ｇ	４階 矢留 ①	**「美術を通した　学び・繋がり・広がり」** これまでやってきたことや学んだことを、「学び・繋がり・広がり」の観点により整理し紹介する	山形県寒河江市立 陵南中学校 亀井　道敬	秋田県 美郷町立 美郷中学校 渡部　直子	秋田県 大仙市立 豊成中学校 田中　武晴	秋田県 大仙市立 中仙中学校 佐藤　好一
8	中－Ｉ		**「思考の流れを記す美術ノートで協働的な学びを深める」** 空間演出デザインの共同制作を通して、生徒の思考が深まり、友達との学び合いに生きる美術ノートを提案する	秋田県美郷町立 美郷中学校 菅原　久実			
9	中－Ｈ	３階 天平	**「地域の産業を身近に感じながら天神山シューズコレクション」** 自分の履いてみたい靴をデザインし、表現、プレゼンテーションなどの学習を通して、表現する喜びと地域産業への誇りを育てる実践	愛知県名古屋市立 供米田中学校 清水　翔一	秋田県 由利本荘市立 本荘東中学校 山下　奈知	秋田県 由利本荘市立 由利中学校 須田　秀二	秋田県 にかほ市立 象潟小学校 関口　琢也
10	中－Ｊ		**「美術文化の継承と創造への関心を高める題材開発の工夫」** 宮城県の伝統的な美術文化をもとに構想した３つの題材の授業実践	宮城県石巻市立 住吉中学校 澤村美和子			

研究説明と研究のまとめ

「“２１世紀を生き抜く力”の育成に、造形教育がどのように関わるのか」今回の造形教育全国大会は、この教育課題へのアプローチについて、秋田のスタイルを提案する大会であると位置付け、私たちは研究を進めてきました。

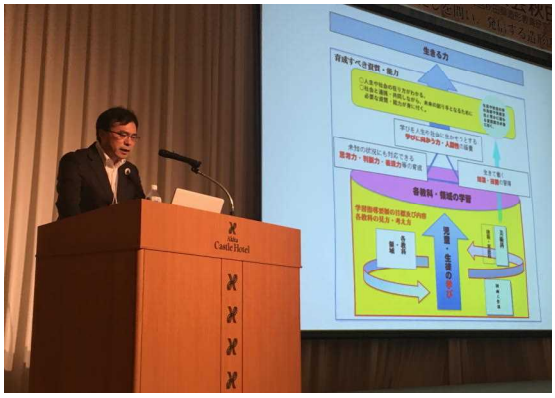
昨年３月に改訂された新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念の基、各教科等に共通する資質・能力を、三つの柱で整理するとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かう授業改善と、学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められています。

図画工作・美術科においてもこの理念を根幹に据えながら、感性や想像力を働かせ、造形的な視点を豊かにもち、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを一層重視するとともに、「芸術の意義や文化の多様性」に気付くような指導の在り方が求められているのです。

本大会の準備にあたっては、こうした学習指導要領の改訂の方向性を踏まえ、これまでの各校の実践の蓄積を生かした「秋田のスタイル」を探ってきました。

秋田県の人口減少率は全国一であり、昨年、県人口が１００万人を下回りました。出生率、就学者数も減少傾向にあり、学校統廃合は、ここ２０年の間に加速度的に進んでいます。このままでは、２２年後の２０４０年には老齢人口が４５％に達し、１５歳から６５歳までの生産年齢人口がほぼ同数の高齢者を支える状況となります。秋田県の深刻な少子高齢化は、日本が抱えている問題の一端を示しています。

このような状況の下、秋田県教育委員会では、学校教育共通実践課題として「ふるさと



教育の推進」を掲げて、「地域に根ざしたキャリア教育の推進」と「“『問い』を発する子ども”の育成を「生きる力の育成」の主軸に据え、「秋田の探究型授業」の展開によって、グローバル社会で活躍できる人材の育成を目指してきました。

ふるさと秋田にあって秋田を支え、ふるさとから離れてもなお秋田の発展を支えようとする志のある人づくり、それが秋田の教育が目指しているものです。

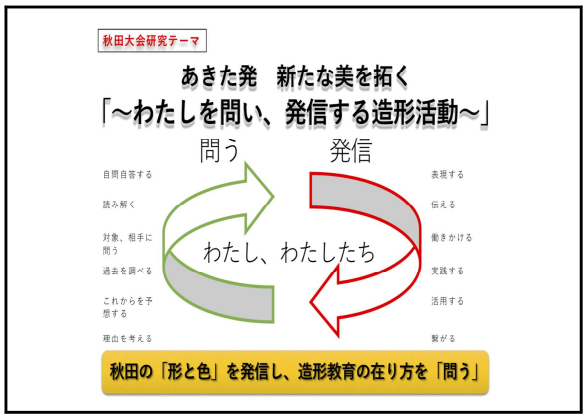
このような、本県の各学校が取り組んできた“『問い』を発する子ども”の育成や、「秋田の探究型授業」における授業改善の視点は、図画工作・美術科を含め、改訂学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた方向性と変わるものではありません。

本大会においては、この秋田のスタイルに磨きをかけ、子どもたちが「分かった」「できた」と強く実感し、さらに学びの質を高めていけるように、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に研究の焦点をあてて取り組むこととしました。

私たちは、大会テーマを「あきた発　新たな美を拓くーわたしを問い、発信する造形活動」としました。

「あきた発　新たな美を拓く」には、変化の激しい社会において、人との関わりの中で課題を解決し、社会にとって意味ある提案

をし、よりよい方向へと変化させる力を身に付けた秋田の子どもたちであってほしいという願いを込めました。



そのような子どもたちであるためには、自分を見つめ、自分としっかりと向き合うことが大切です。「わたしを問う」とは、子どもが、自問自答したり、友達と話し合ったりしながら、自分の立ち位置をしっかりもって、建設的に考えることです。この行為を通じて自身の考えが具体的に見えてくるプロセスが、子どもにとって最も面白く、教育的意義があるものと考えられます。子どもが、自身の可能性を証明し、自分で自分を実感できる授業づくり、子どもの成長を支えてあげられる授業づくりを目指しました。

また、表現することをあえて「発信」という言葉で表しました。自分の考えやイメージをまとめていくプロセスにおいて、言語活動などによって友達と相談したり、身近な人の考えを聞いたりしながら、「相手意識」をもって他者に発信することが重要だと考えたからです。自分や他者との対話を繰り返し、よりよい形や色を求めて、試行錯誤を重ね、創造する子どもたちの姿は、まさしく「美を拓き、問い続けていく子どもの姿」であると考えています。

そして、秋田で培われた授業改善の在り方やそこに見られる子どもの姿は、「秋田の形」であり、「秋田の色」であって欲しいと願っています。私たちは、この「形や色」を発信し、これからの教育課題に応える造形教育の在り方を問いたいのです。この大会テーマは、そのようなわれわれの決意表明でもあると考えています。

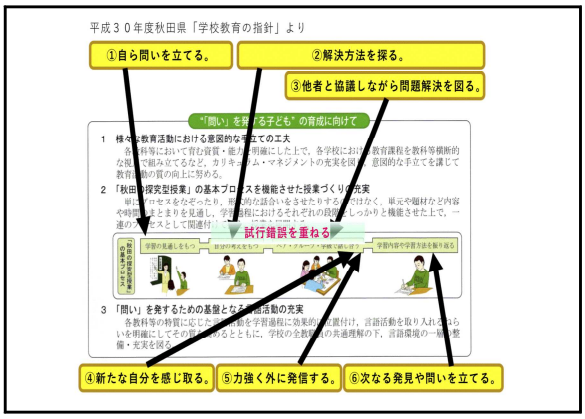
このテーマにせまるために、「研究の視点」を「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力の育成」としました。

また、「研究の重点」を次のように設定しました。

○形や色などの造形的な視点で「問い」を見いだし、表現する力を高める学習活動の充実

○地域や社会生活の中の形や色などに主体的で豊かに関わる学習過程の工夫

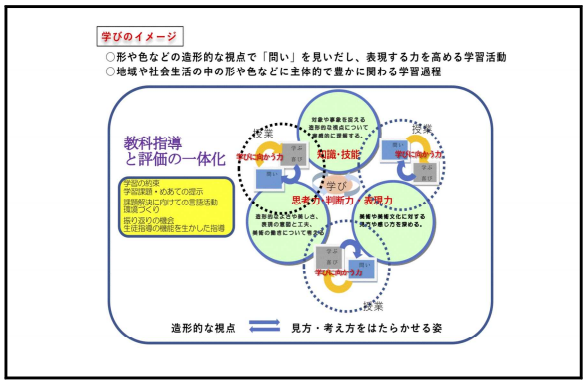
本研究における題材設定や授業づくりといった授業の構想においては、「秋田の探究型授業」のプロセスを生かしながら、他者と関わる側面を重視しました。学習活動の中で「①自ら問いを立てる。②解決方法を探る。③他者と協議しながら問題解決を図る。④新たな自分を感じ取る。⑤力強く外に発信する。⑥次なる発見や問いを立てる。」という子どもの姿を示すことによって、改訂学習指導要領に見られる授業改善の視点の一つである「主体的・対話的で深い学び」の具体を提示し、子ども自身が新たな高みに向かって、自己を問い直すことに繋げたいと考えました。



さらに、「重点の具現化のための配慮事項」として次の６点を設定し、授業づくりを行いました。

①各校の学校評価や授業アンケートなどを基に児童・生徒の現状を分析し、各校の実態に即した学習課題を設定する。
②学習指導案作成に当たっては、育成する資質・能力を改訂学習指導要領の３観点で捉え、明確な目標として学習活動の具体化を図る。
③形や色などの造形的な視点で多様な考えを考察する場面をつくるなど、学習課題を解決するにあたって必然的で協働的な活動を生かし、個々の学習が深まるように工夫する。
④地域の素材や日常生活の疑問、感動やわくわく感を教材や学習内容に生かした学習過程を工夫する。
⑤子どもの心に沿った見取りを指導に生かして、自らの成長や変化、友達との違いを自覚し、表現の喜びや充実感を味わえるようにする。
⑥子ども自身が「どんな力が身に付いたのか」「何ができるようになったのか」「何のための学びだったのか」「何を生かしていくことができるのか」ということを自覚出来るような振り返りの機会を設定する。

そして、研究授業では、全県各地の授業者及び授業チームによる１７の授業提案を行いました。信頼を基盤とする授業風土と授業で学ぶ喜びが子どもたちの「問い」を生み出し、指導と評価が一体となって学びの本質に向かっていく授業サイクルの一端をご覧いただきました。



本大会を開催するにあたっては、日本体育大学教授の奥村高明先生から学習指導要領改訂の趣旨などについてご教示いただきながら研修を深めて参りました。その研修を生かし、「オール秋田」を合い言葉に、小グループで題材や指導計画の検討、事前の授業研究などを行いながら成果と課題を情報交換し合い、協働で研究を深めてきました。

また、県市指導主事等の学校訪問で得た成果と課題を共有し、焦点化したものを秋田版「図工・美術の授業改善のポイント」としてまとめました。これは、授業の各段階で押さえておきたい授業づくりのポイントを漫画仕立てにして分かりやすく伝え、授業実践に生かすことをねらいとしています。

これらの取り組みを通して、私達があたりまえに取り組んでいる「スキル」や「考え」を共有したり、資質・能力の向上を支える様々な仕掛けを紹介し合ったりできたことは、次世代を担う若手教員や、造形教育を専門としない小学校教員にとっても授業づくりのヒントとなったものと考えています。

本大会では、授業を教科横断的な視点で捉え、言語活動の取り組みや生徒指導の機能を生かしながら、ＰＤＣＡサイクルの視点を明確にもって授業実践に当たりましたが、いかがだったでしょうか。

本研究の成果の一つは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かう授業改善の在り方

を「秋田の探究型授業の視点」から、全県規模で確認できたことです。その研究過程を通して長年の経験から得た授業実践のノウハウについて、世代を超えて共有できたことは今後の大きな財産となるものです。

もう一つは、子どもたちが全力で学ぶ姿を「美を拓き、問い続けていく子どもの姿」として授業で示すことができたことです。子どもたちの各教科での確かな学びが、やがて教科の枠を超えた問題解決への気付きにつながり、生涯にわたる学習の基礎となっていくものと考えられます。この姿を基に、さらなる指導力の向上に努めて参りたいと考えています。

各校におけるカリキュラム・マネジメントの実現、小中学校の９年間を見通した学びの構築、校種間や地域との連携など、今後検討すべき課題は多くあるものの、子ども一人一人の成長に寄り添った授業改善の不断の取り組みこそが各校のカリキュラム・マネジメントの中核に位置するものと考えています。

この度の大会開催にあたり、秋田の造形教育に携わった諸先輩の業績に学び、時代の要請に応えられるよう研究を進めてきました。私たちの発信した授業改善の在り方や子どもたちの姿が、「秋田の形」、「秋田の色」のよさとして、本県のみならず、全国の図画工作・美術の授業における学びの深まりと造形教育の充実に寄与するものとなれば幸いです。

研究のまとめ

学習指導要領の改訂を踏まえたこの度の研究は、教科横断的な視点を軸として授業改善に努め、これからの時代を担う子どもたちの一人一人の成長に寄り添う学習指導の質を高めようとするものでした。また、研究の過程を通じて教師の世代間の経験や知見の継承を行うことも目的の一つでした。

平成２９年度秋田県学習状況調査によれば、「図画工作(美術)の勉強は好きだ」の質問について小４から中２までの回答で、学年が上がるに従って肯定的な回答の割合が低くなっていますが、小学校では８８％以上、中学校では８２％以上が肯定的な回答をしており、全体的に高い数値を示しています。肯定的な回答の割合は、前年度に比べ高くなっています。回答した理由として多いものは「内容に興味があっておもしろい」「考えるのが楽しい」「得意」の順に多くなっています。このことは、本県における図画工作・美術の授業が子どもの多様性を大切にし、一人一人の成長を支えている結果であると言えます。本大会の研究授業では、こうした調査結果が子どもたちの具体的な姿として確認できたものと考えています。今後は、さらに学習の質を高め、教科特有の見方・考え方を広げたり深めたりしながら、確かな学びに結びつくよう指導の充実を図っていきます。

大会を通じて、参加者の皆様や指導者の方々から貴重なご意見やご助言をいただき感謝の念に堪えません。新学習指導要領の理解と併行して進める研究は大変でしたが、本県の教員にとって学びの多い大会となりました。

この大会での学びを生かし、本県の図画工作・美術科における学習指導の在り方を客観的に見つめ直し、さらに研究を発展させていきたいと考えています。

記念講演

演題『あきたのくらしからみえる，あしたのびじゅつのはなし』

講師　藤本　智士　氏　（編集者）
講師　井野　英隆　氏　（映像作家）
講師　青谷明日香　氏　（シンガーソングライター）

井野英隆氏の代表作『True North, Akita』の映像をバックに，青谷明日香氏のピアノ弾き語り演奏『かえっておいで』で講演会がスタートした。

【秋田との縁・・・】

藤本～兵庫県西脇市出身西宮市在住。今日の進行役。広報や雑誌の編集をしている。東京の出版社とのつきあいが多いが，最近は地方の仕事が増えている。先日は一週間沖縄，三日前は秋田にいた。秋田県発行フリーマガジン『のんびり』の仕事に2012~2016 年まで４年間，編集長として取り組んだ。編集の力で秋田のよさを兵庫県出身の僕がよそ者目線で切り取って，どう伝えるか，どう発信していくかがミッション。

井野～愛知県刈谷市出身東京在住。秋田との縁は，ＪＲ東日本「行くぜ，東北」の仕事。東日本大震災以降，北東北に人を呼ぼうという企画。八戸線，津軽線，五能線で旅をしてみたけれど，本当に人がいない，これはやばいという感じ。たまに会った人と話をすると「実は実家が秋田で･･･」と出てくる。けれど秋田の人は自分から秋田出身とは言ってくれない。何でかなぁと思っていた。

2013~2014 年頃は，県庁の移住促進の仕事。僕は経産省の地方活動の委員にもなっていたので，『True North, Akita』のシリーズを４本作った。１回目は五城目町。（映像が映し出される）

藤本～この映像を見たときは衝撃的だった。地方の人は，自分の地元を胸張って話すことが少ない。それは都会に行くことに正解があって，地方は粛々とそれを目指す時代が続いたから。けれど，僕は逆に地方から都市が学ぶべきことはたくさんあると思っている。そんな中で青谷明日香という人は，堂々と秋田出身と名乗り，秋田大好きという歌を東京に住みながら日本全国で歌う希有なミュージシャンだと思っている。

青谷～秋田県大仙市出身。私にもひた隠しにしていた時期があった。東京にあこがれて出た身，「秋田ってどんなところ？」と聞かれて「何にもないところだよ」と答えていた。転機は，秋田から一度離れてたまに帰ってきたときに，秋田での幼少時代の暮らしが貴重なものに思えたこと。これは自慢していいものじゃないかなと思えるようになって，ひた隠しにすることを少しずつやめた。

【図工や美術の先生・・・】

藤本～僕は図工・美術に救われた一人。小３の頃，学校の中庭でスケッチをする授業があった。僕は椿の花を一生懸命描いた。細かく描きすぎて授業が終わってみたら花１個だけ，もっと他にも描きたかったのに。でも先生はすごくほめてくれた。めちゃくちゃ嬉しかった。絵がどうのこうのよりも，自分みたいなタイプの人間も認めてもらえるんだという喜びがあった。図工・美術の先生は，学校の指針とは違う視点で評価してくれる存在。

井野～印鑑の石彫が中１の最初の課題だった。ハンコのつまみに人体の骸骨を彫り出したらやめられなくなった。「僕はこれがやりたい」と先生に断って僕だけ１年間ずっとこだわって彫り続けた。先生は，みんながやっている次の課題をやりなさいとも言わずにずっと見ていて，最終的には通知表に４を付けてくれた。他教科ではあり得ないのではないか。100%集中して取り組んでいた姿をしっかりと見ていて，ちゃんと評価してくれた。

【秋田の強み･･･】

藤本～僕は基本的にアポイントを取らず，自然な流れの中で取材をしてアウトプットするやり方をしていて，地元の人とよそ者のクリエーターが一緒になって仕事をする方が成功率が高いと考えている。よそ者だけで仕事をしてサーと去っていく，あるいは地元の人だけでがんばろうとするのは頭打ちになりやすい。

フリーマガジン『のんびり』３号(2012 年)で，にかほ市出身の池田修三の木版画を取り上げた。取材を通して人となりが分かっていくという編

集の仕方を取った。作品はかわいらしいけど，どこか秋田っぽい，うっすら目に影があるところから冬の厳しさにつながっているように感じる。秋田の人に「池田修三を知っている？」と聞いても「知らん」でも作品の写真を見せると「知っている」「家に飾っている」と言う。秋田相互銀行の通帳にも使われていて見覚えがあるのに作者の名前は知らない。最初，にかほ市に取材に行ったら観光パンフレットにも載っていないし，ポストカードも売っていない。けれど普通にみんなの家に作品を飾っている。結婚記念や新築祝いに絵を贈る文化が秋田県にはあった。これはすごいなと思って特集を組み，地元で展覧会を開いた。その後，池田修三の版画展を日本各地で開き，トークショーでは編集者として話をしてきた。編集の仕事は本を作ることだけじゃない。各地で池田修三を紹介する活動をしてきて，今では駅に『池田修三の町へようこそ』と掲げられるようになった。前は池田の“い”の字もなかったのに。ありがたいことに秋田県造形教育『美術 表現と鑑賞』の表紙が池田修三の作品に変わった。つくづく宝物にあふれている。

井野～秋田はコンテンツだらけ，ストーリーもいっぱいある。風景もきれい。東京にはないもの，海外から見ても，文化として高く評価される部分が残っている。人の手や気候に順応して脈々と伝わっているものがある。太平洋側には見られない，秋田の特殊な魅力なんだろうなと，全国や海外を見てきて思う。

青谷～昔はなまはげやきりたんぽの話題が多かったが，最近は私が知らないことまで知っていて結構，秋田に来てくれているんだなと感じる。

藤本～震災以降大きくチェンジして，地方の方がいけているという感じが圧倒的にある。なぜ秋田かと聞かれたときに，僕は「少子高齢化率ナンバー１の県だから」と答えている。トップランナーだから。これから日本がたどっていく最先端。右肩下がりの時代の中で，僕らはどう生きるのか。僕は今 44 歳，バブルを経験したことがなく，この 40 年余り経済が右肩上がりで上がる幻想を抱いたことがない。経済とは違う価値観で，どこに豊かさを感じて生きていくのか，美術教育の大切さがあるんじゃないかと思う。

【これからの造形教育に期待すること・・・】

藤本～最近，地方と地方がどこにつながっていくかという視点がすごく大事だと感じている。

『のんびり』14 号(2015 年)は勝平得之を特集した。秋田の人は池田修三を知らなくても勝平得之

のことはみんな知っている。勝平得之は版画家だが，もともとは木彫りの人形を彫ってお土産にして売っていた農民美術の人。長野県上田市の民衆美術運動を唱えた山本鼎が，農閑期の副業として美術を教えて回った。全国でワークショップを行い，彫刻をする人が東北に来たときに勝平得之が教わった。木彫の延長に版画があり，勝平得之は秋田の風俗を絵にして表した。

地方のことは地方にとどまらない。秋田と長野，距離はあるけれど，美術を通した交流があった。グローバルの視点で地方と世界の通じる点は？

井野～一概には言えないが，例えばヨーロッパ。世界を支配していた国々が集まっている。長い歴史の中で，日本から流出した美術品をドイツやオランダの人は実際に目にしていて，「日本のこの時代にはこういうものがあったでしょ」と教養としての知識があり，家族や親戚同士で会話している。でも体験的に分かるのは日本人。海外の知識層や美術，音楽などに関わる芸術家にインスピレーションを与えるものが秋田にはたくさんある。黒沢明の父親は秋田の人，でも秋田の人はあんまり知らない。ジブリの背景美術を担当した男鹿和雄は仙北出身の人。小さい頃に見た鳥海山や白神山地など，地形の生み出す造形は絶対に作れないものであり，影響を与えたと思う。当たり前に存在している風景をどう芸術に取り入れていくか，真剣に議論していく必要があると思う。

藤本～その点，映像は有効。僕は紙媒体を通して仕事をしてきたが，今は圧倒的にメディア，映像は総合芸術。昔ほど機材は必要でなくなった。「子供にスマホを持たせるな」などと言っている場合じゃない。「きれい」と思った瞬間をなにかのツールで表現できたらいいなと思う。

井野～講演会場の外に紹介されていた教材見本にはデジタルツールが一つも見当たらなかった。パソコンで表現できる解像度が紙とは全く違う。解像度はウェブだと 72，紙は 300~400 は軽くいく。とりあえず iPad をツールとしていい構図を切り取るという課題はあるだろうが，それだけで終わってしまう。解像度の説明をすることで，ウェブに適した色や構図・最適化などと，紙や筆の選び方など，初めて比較ができるようになる。ずっとタブレットを扱っていると手で描く感覚が

身に付かないという不可逆的なもののためか，そこまで先生が積極的に言うことはあまりないのかもしれない。

藤本～図書館司書の人に「どうしたらもっと読書をしてもらえるでしょう」と聞かれ，僕は即答でオーディオブックの話をした。きっとこの人は紙の本について聞いていると思ったから。読むのは紙だけじゃないし，僕は写真が好き。でもあらがえなかった。あらがえないものから生まれてくるものもあるんじゃないか。むげにこれは違う，昔はよかった的な視点ではなくて，しっかりとした理由が説明されて，選択肢が与えられるといいなと思っている。

自由研究は全く自由じゃない。自由研究の本を買いに行って，クラスで５人くらいかぶるだろうと思うものをあえて選ぶ娘，ドラマが好きだからドラマについてやったらいいと言っても，みんなと同じものにする。俺は絶対評価するのに。自由研究ってどうなんでしょうね。

井野～今ならコンテンツのことも脚本が誰で等，ツイッターで話せば応えてくれると思う。元素記号がマニアの発達障害の子供が，ロシアとアメリカの研究所では原子の重さが違うことをつぶやいたら，理研の人が「こっちの基準ではこうで」と全部説明してくれた。子供はものすごく納得して追加の質問が出てきて話が終わらない。

藤本～そういうものを学校の先生にちゃんと拾って評価してもらいたい。図工・美術の先生には，喫茶店のマスターや親戚のおじさんみたいな，まっすぐ上ではない，ちょっと斜め上の存在であってほしい。『異端児の城』の曲，いいよね。

青谷～かまぼこ板を集めるのが大好きな少年のお話。クラスメイトに馴染めずにいるが最終的には集めたかまぼこ板で家を建てるという歌です。

藤本～こういう人がイノベーションを起こしていく。明らかにこれから必要とされる人材。右肩下がりの中で新しいやり方を考える必要がある時代に，今までの評価では評価しきれない人たちをどうやって輩出していくかという責任，使命があると思う。

井野～『異端児の城』を聞いた時は衝撃的だった。

青谷～『異端児の城』（弾き語り演奏）♪

藤本～勇気をもらえるいい曲ですよね。

青谷～『異端児の城』の主人公みたいな子が生きやすい世の中になればいいなぁと思って音楽活動をしている。

藤本～この曲を聴いたときに池田修三のことを思い出した。池田修三は３５歳で東京に出て，作品は全て東京で作り，最後亡くなったのも東京。でもふるさとが大好きでふるさとの風景を描き，にかほ市のショップ等の企画は必ず引き受け，ギャラも交通費すらも受け取らなかった。地元を愛していた。でも当時，池田は異端児，地方では生き辛かった。だから東京に行ったのではなかろうか。今の時代はそれが逆転してきているのかもしれない。東京とか都市的な所ほどコンプライアンス的な堅苦しいところがある。編集の仕事をしていると，東京ではアポ無しの取材は怒られる。まず企画書を見せてと言われ，１時間の取材でなんぼというような世知辛い世界。秋田では「家狭いのに急に来られたら困るわ」と言いながらもアポ無しで家に入れてくれ，入ってみるとめちゃくちゃ広い。持ち家率では富山が一位だけど，一人当たりの住居の広さは秋田が日本一。田舎ならではの豊かさがある。

井野～僕は愛知県で生まれ，親の都合で東京に出てきた。三点で計測すると正確な位置が分かるけれど，川田重三という民俗学者は『文化の三角測量』という本で，文化的，精神的にも三カ所で振り返る視点を持つことが大切だと言っている。東京で一旗揚げるとか，帰って来る前提で田舎があるという二拠点より，三拠点あればどうにでもできる，好きなように生き抜けるのかなぁ。自分的にはしっくりくる。永住するという意識を捨てちゃって，秋田の人も東京に行ったり海外に行ったり，秋田の人だけじゃないけれど，地元が三角の重要な拠点になればいいのかなぁと思う。

藤本～都会での生活の根本に不安を感じている人が多い。都会で暮らしていると消費者でしかない。地方に行くと割とみんな生産者。消費者はお金がないと不安になる。どういうところで生産者になれるか，きっかけを子供たちに与えられると，強みや安心感につながるんじゃないかなと思う。

井野～小学生くらいの頃にその点を案内してくれる人や先生がいると子供もそういう前提で進路を考えられ，芸術や音楽の方面でも突破できる力になると思う。『True North,Akita』の映像は８カ国語くらいに勝手に翻訳されて紹介されている。自然に意図せず作った物でも美術や音楽に起こせることが分かったら，中学生もすごく自信になると思う。技術的には割と簡単にできてしまう環境にあるのでどんどんやらせるだけかな。そういう環境を作れたら最高だと思う。

藤本～井野君は海外にどんどん進出しているけれども，僕は日本を出たことがない。でも二人ともグローバルだと思っている。本当のグローバル

はとことん突き詰めていくことやいろんな情報をつなげること。井野君はただ海外に出るのではなく，そこと比較することで郷土を高めている。僕は日本の各地を回りながら郷土を語り，自分の真ん中を突き詰めて地球の裏側へ行くようなグローバルもあるんじゃないかと思っている。自分の住んでいるところや自分のルーツをきちんとしゃべれる何かがあるかどうかが大事。

井野～それしかない。いくら英語が流暢でも，「あなたは何者なんだ」と問われた時に，自分の主張がない，自分の生い立ちを語れないというのはクリティカルなこと。手を打つなら小学生の頃から。20 代では遅い。

藤本～これは小中で押さえたいこと。特に図工・美術で。去年２冊本を出し，全国で出版ツアーをして最後の町が岐阜県飛騨市古川町，そこでイベントを行った。「君の名は」で有名になった美しい町に酒蔵が二軒あった。両方うまいんだけど見事に酒質が全く違うお酒，イベント終了の打ち上げで，地元の人に「どっちが好き」と聞いても絶対に言わない。それを言うだけで角が立つから，客に言わせるようにする。日本の地方にはこういう面は強くあり，一概には崩せない。ある一瞬で弱みになるなぁと痛感する。

井野～選べない理由をちゃんと分かっていてしゃべれればいいけれど，そういうことは日本に多い。明治以降の教育は画一化されて統率するためにはよくできているけれど，地域性は全く排除されている。思想もない。都合がいいけれど暮らしている人の目線ではない。何で言っちゃいけないのか分かっていればいいが，そこは気をつけた方がいいと思う。

藤本～そこは痛感するところ。組織をコントロールするにはすごくよくできた仕組みでここまできたけれど，いよいよ個人個人が発信できるようになり，ＳＮＳしかり，そろそろコントロールしようとする発想を捨てた方がいい。それぞれの暮らしの中にある美しさみたいなものをちゃんと見つけて，身近なところで自分たちの地元にはこういう人がいて，ときちんと発信できる方がいい。

井野～『のんびり』は教科書になっていてもいいくらい。このまま英語に翻訳されていれば英語教育にもなる。

藤本～『のんびり』5 号の「スーパーこまちがお花見!？」（撮影場面の紹介）打ち合わせで「新幹線まで酔っぱらって真っ赤っか~」みたいなノリノリの企画を提案すると，秋田メンバーが苦虫つぶしたような表情になる。「ＪＲはアルコール無理です」とか言いながらも１０日後くらいには電話が来て，「全面協力の許可が出ました」「よっしゃ！」という時に秋田メンバーはグンと成長する。そこが僕の役割。

秋田の人は何でも寒天で固めてしまう。サラダ寒天は衝撃的。にんじん，キュウリ，ゆで卵，マヨネーズ。甘い。秋田の人は好きと言うけれど，僕は正直，二度と食べたくない。けれど美しい。これこそ美術。秋田の母さん方が粛々と作っている寒天を若い子たちは残念スイーツと呼んでいる。なぜできたのか紐解いていくと，そこには秋田の農家の嫁の辛さがあった。秋田の女性たちはその家の味を作っていかなければならなかった。それでも，農作業が終わった後に，寄り合いや親戚が集まったときに振る舞う寒天だけは自己表現ができた。制約の中から生まれた美。こういうところに美しさがあるということの方が，この人はこういう作家でというよりも大事なんじゃないかと思う。

井野～最近ミラノに行ったが，日本の桶がすごく売れている。昔は浮世絵などから影響を受けていたと思うけれど，今は日本の工芸や民芸に向いてきている。海外から見ればアートでしかない。生活の中の道具だけれど，西洋の人から見ると単純に美しい。藤本さんの編集的な視点で，食文化や生活の中から生まれた美を，先生たちが授業で取り上げて子供たちに伝えていくきっかけがあればいいと思う。

青谷～中学生の頃造形部に入っていて，マンガを描くのが大好きでずっとマンガを描いていた。でも中学校は「勉強しろ，勉強しろ」という感じで，家に帰っても「勉強しろ」と怒られる。造形部の先生はいい感じに緩かった。本当は課題があったけれど，隠れてマンガを描いていると「また青谷はマンガを描いているのか」と。けれどその後は何も言わないので，またずっとマンガが描けた。私にとってやすらぎの時間だった。こういうあぶれ者の子供たちのよりどころになっていてほしい。図工・美術の先生方よろしくお願いします。

藤本～とりとめのない話だったが何かしらのヒントになっていればうれしい。長時間ありがとう。

（～～～美しい映像と音楽，具体的な視覚情報をふんだんに活用した講演会だったので，記録文面では十分に内容を伝えきれなかったことを申し添える。：記録者）

文部科学省講話・講評

文部科学省初等中等教育局　教育課程課　教科調査官　　岡田　京子　先生

【新学習指導要領の教科の目標】
（柱書き・・・総括的なこと）
表現及び鑑賞の活動を通して，**造形的な見方・考え方**を働かせ，**生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力**を次のとおり育成する。

見方・考え方とは，
・その教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方
・教科を学ぶ本質的な意義の中核

造形的な見方・考え方とは，
「①**感性や創造力を働かせ**，対象や事象を，形や色などの造形的な視点で捉え，
②自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」
（新学習指導要領解説　図画工作編Ｐ１１）

これを分けて捉えるとしたら，①は「造形的な見方」について，②は「造形的な考え方」について書かれており，考え方の方向性のようなものを示している。「**自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと**」とは，先生が意味や価値をつくりだすのではなく，子どもが自分にとっての意味や価値をつくりだす活動にするということが大事である。また，これは，「造形的な見方・考え方」が働くような授業になっているかという授業を見直す際の視点にもなる。子どもたちが「**感性や創造力を働かせ，対象や事象を，形や色などの造形的な視点で捉え，自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだす**」活動になっているかをぜひ見直して授業をしてほしい。また，学習指導要領の中に「感性や創造力を働かせ」という言葉が明記されたり，中教審の答申や学習指導要領の総則にも「感性を豊かに働かせながら」という言葉がたくさん出てくる。つまり，子どもが感性を働かせることが大事だという立場をとっているということである。

「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」，これが図画工作科で育成する資質・能力である。図画工作科の学習活動において、児童がつくりだす形や色、作品などや，家庭、地域、社会で出会う形や色，作品，造形、美術などと豊かに関わる資質・能力を育成すること，これが図画工作科で育成する資質・能力である。

次に，教科の目標を３つの柱で整理したものが以下である。

（1）①**対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解する**とともに，②**材料や用具を使い，表し方などを工夫して，創造的につくったり表したりする**ことができるようにする。
（知識及び技能）

（2）**造形的なよさや美しさ，表したいこと，表し方などについて考え，創造的に発想や構想をしたり，作品などに対する自分見方や感じ方を深めたりする**ことができるようにする。
（思考力，判断力，表現力等）

（3）つくりだす喜びを味わうとともに，感性を育み，**楽しく豊かな生活を創造しようとする態度**を養い，豊かな情操を培う。
（学びに向かう力，人間性等）

内容では，Ａ表現とＢ鑑賞は以前と変わらない。活動の中に「造形遊び」と「絵や立体，工

作」があるのも以前と変わらない。しかし，今回は構造的に資質・能力で整理している。

1　知識及び技能について

（1）の前半部分①が知識で，内容は共通事項（1）アに対応している学習指導要領では，低・中・高学年ごとに目標や内容が整理され，知識に関しても低学年、中学年、高学年に応じて内容の取り扱いが示されている

【内容の取り扱い】
低学年「**いろいろな形や色**，触った感じなどを捉えること」
中学年「形の感じ，色の感じ，それらの組合せによる感じ，色の明るさなどを捉えること。」
高学年「**動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさなど**を捉えること。」

これは，低学年の先生たちは，いろいろな形や色，触った感じなどを捉える授業を，中学年では形の感じ，色の感じ，それらの組合せによる感じ，色の明るさなどを捉える授業を，高学年は，動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさなどを捉える授業をしてくださいということである。そうすることで，例えば中学年の子どもは、**自分の感覚や行為を通して形や色などの感じが分かる**ようになるということである。低学年に「**いろいろな形や色**」と書かれているが，一つの授業で，何色もそしていろいろな形を扱って，それに気付かせましょうという意味ではなく，例えばその題材では一色しか扱わなくてもいいし，いろんな色の中から選んでもいい。だけど，トータル的に世の中にいろいろな形や色があるということに子どもが気付いてほしいということである。また，高学年では「**動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさなど**」と書かれているが，一つの授業で全部が捉えられる授業もあるかもしれないが，この題材は「**動きとバランス**」だと思ったら，子どもが発想や構想をするときも，技能を働かせて表すときも，鑑賞するときも「動き」や「バランス」という視点をもつように授業を組み立てていくことが大事である。「知識及び技能」とあるが，技能だけに知識が関連するわけではない。知識は，発想や構想をするときも，技能を働かせて表すときも，鑑賞するときも必要となる。つまり，〔共通事項〕は表現及び鑑賞の活動において共通に必要となる資質・能力である。子どもたちが造形的な視点について理解し、活用できる身に付いた知識にすることが大事になる。

（1）の後半部分②が技能で，内容はＡ表現（2）に対応している。どのように技能を働かせているかを子どもの姿（過程）と結果としての作品の両方から見ていくことが大切である。

2　思考力，判断力，表現力等について

ここでは，主に発想や構想と鑑賞について書かれている。前半部分**「造形的なよさや美しさ，表したいこと，表し方などについて考え，創造的に発想や構想をしたり」**は，発想や構想について書かれており，内容はＡ表現（1）に対応している。後半部分**「造形的なよさや美しさ，表したいこと，表し方などについて考え，作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりする」**は，鑑賞について書かれており内容はＢ鑑賞（1）に対応している。

鑑賞は，言語活動を優先してしまうことが多いが，じっくり作品を見ることが大切である。

小学校では，〔共通事項〕（1）イ「自分のイメージをもつこと」も思考力，判断力，表現力等として位置づけている。これは中学校美術では「知識」になる。**イメージ**という言葉はいろいろな意味で使われているが何についてのイメージなのかを共有することは大切である。

3　学びに向かう力，人間性等について

「楽しく豊かな生活を創造しようとする態度」は，図画工作科の学習の中で常にこうなるようにしてほしい。例えば，紙があり，テープがあったらそれを楽しめる，絵が飾ってあったらそれを見て楽しめる，外で風景を見て楽しめる，外国へ行ったら美術館へ行って楽しめるなど，そういうことを重ねていけば楽しく豊かな生活を創造する人になれると思う。授業の中で育て，育てた資質・能力が育成され自分のものになっていくことが大切である。

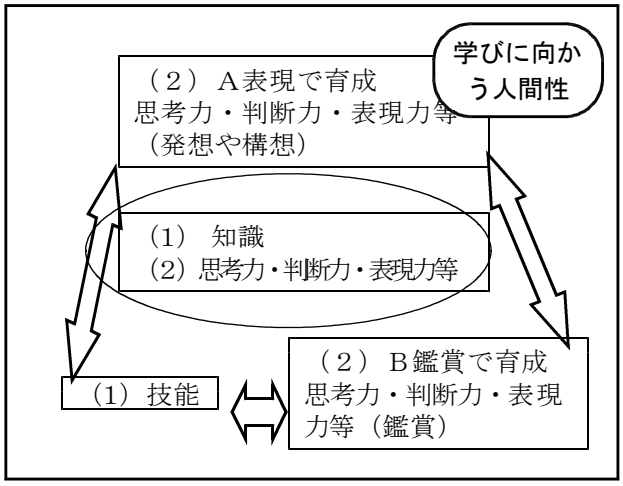
4　評価について

現在，評価についてはまだ何も決まっていない。これまでの「関心・意欲・態度」が「挙手の回数」や「忘れ物をしないといったようなものではかられていたような面があることが課題として挙がっているが，やはりそれは違うだろう。そこで「主体的に学習に取り組む態度」という観点を立て評価しようという方向で話し合われている。しかし，それをどのように評価するのかは，まだ協議中である。特に「知識」と「技能」「思考力、判断力、表現力」等の「発想や構想」と「鑑賞」をまとめて評価するという方向になるだろう。働き方改革という観点も含めて教員が評価しやすいもの，分かりやすいものとして提示していきたい。

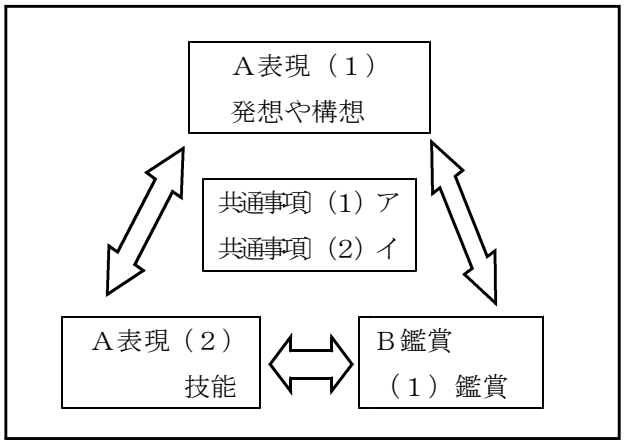
5　目標と内容について

中教審が示した図工美術の考え方の一例が下の図である。全てを関連づけながら育成していくことが大切。

【教科の目標･学年の目標の構造図】



【内容の構造図】



真ん中には〔共通事項〕がある。内容に「学びに向かう力、人間性等」が入ってないわけではなく，これらの学習をきちんと進めていくことで，「学びに向かう力、人間性等を共に育てていく」ということが大切である。

授業を考えるときには，まず全体構想で大きな流れを考える必要がある。その上で，この図のように，授業の中では学びが関連し，行ったり来たりするのがよい。子どもがつくっている途中でも，新たな発想が生まれるなど戻ることがあってもよい。Ａ表現とＢ鑑賞を関連させた授業をするときは，「発想や構想のために鑑賞をする」ということではなく，「鑑賞は鑑賞としてしっかりやる。」その上で「発想や構想をする」というように計画したほうがよい。そして，どの学びの場合も「共通事項を大事にする」という必要がある。

昨日の授業ではビニールシートを使った造形遊びの学習があった。１回透明のビニールシートを使っていろいろと試してみながら，ではカラーのビニールシートを使ったらどうかという活動になっていく。「使って→思いついて→また工夫して活動する」というように学習が進んでいくというのが，昨日の授業からもみることができた。

「絵や立体、工作」を例に説明したい。「発想や構想をする」ということには２つの内容がある。「表したいことを見つける」と「どのように表すか」ということ。

例えば題材を考えるときに，内容の構造図を基にして学習指導要領の文言を当てはめて，授業の基本形をつくると，何を指導すればよいのかがはっきりする。この題材では，子どもにどんな資質・能力を育成するのか，ということがはっきりすれば，教師は「その資質・能力を育成するために，どんな工夫をすればよいか」という授業の工夫の方に力を入れることができる。子どもの発想を広げるために，どんな工夫をすればいいかを考えて，試してみて，良ければ続けてだめならば改善をしていくという方向でよい。例えば１年生の「すきなもの　おしえて」という題材を，２つのクラスで実践してみたところ，好きなものを細かく板書していくやり方

と，カテゴリーで分類して板書するやり方では，子どもの発想や表現に大きな差は見られなかった。そういう「子どもの姿」という事実を捉えながら授業を研究していくということが大事だと言える。教師が子どもの発想を広げるために，子どもの発言した好きなものを板書したり，いろいろな色の紙を準備したりするなど、手立てを工夫し，それが有効に働いていた。教師の工夫は全て伸ばしたい資質・能力を意識して行われていた。指導の工夫は、資質・能力の育成に必ず結び付いていくものという考え方で向かってほしい。

内容の取り扱い，指導計画の作成について，いくつか新しい文言が入っている。例えば「各学年のＡ表現の指導については活動の全過程を通じて児童が実現したい思いを大切にしながら，活動できるようにし，自分のよさや可能性を見出し，楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うようにする」とあり，「子どもがどんな思いをもって活動しようとしているのか」を見ていくことが大事である。その次の，「各活動において，互いのよさや個性などを認め，尊重し合うようにすること」というのは「多様性の尊重」につながっていく。子ども同士学び合って自分の考えと友達の考えを比較しながら活動していく。前提として，教師がまず子どものよさや個性を認め，作品についても視点を変えながら見ていくというのが大事である。

6　まとめ

今回の改訂で指導計画の作成について書かれた配慮事項「主体的で対話的で深い学び」というのはどの教科にも共通する最重要事項である。これは授業改善の視点である。このような視点の授業を学習計画の中に適切に配置していったらどうか，という提案である。必ずしも１単位時間でなくてよいし，題材全体の中で適切に位置づけていくということで構わない。

「興味・関心，見通し，振り返り」が大事。

「見通し」は資質・能力で子どもが考えられるということ。見通しはおおよそでかまわない。細かく決めつけずどんどん変わっていい。授業の流れで見通すというのではなく，「今日は表したいことを思い付いて，次は表し方を工夫して表して」というように資質・能力で子どもが見通せるということが大事。　振り返りも資質・能力で振り返る。「振り返る」というのはできた作品だけで行うのではない。作品の完成に至るまでの過程が大事。「よく考えていた」「よく工夫していた」という資質・能力で子どもがふり返られればよい。そこに教師の声かけの支援が生かされる。学習の最後に「作品の鑑賞をして終わらせる」ということがあるが，「鑑賞」と「ふり返り」は違う。「鑑賞」を設定するのであれば，鑑賞の指導事項を実現することが大事。資質・能力の育成を達成できるような指導を行わなければならない。そして「ふり返り」をその後の学習につなぎ，生かしていくようにしたい。

「対話」ということを考えるとき，子ども同士，先生と，地域の人となど，対話の相手は様々だが，図画工作科の場合，「自分との対話」がまず大前提。その上で他者との対話になる。言語活動が目的化しないように気をつけたい。対話することによって図画工作科の資質・能力が高まる，育成されることが大切。

「深い学び」は見方・考え方が働き，教科の本質が考えられた授業になっているかという捉え方が大切。

今回の研究大会の全ての授業，協議会を見せてもらい，大変充実していた。子どもたちのために今後も共に学び続けていきましょう。

文部科学省講話・講評

文部科学省初等中等教育局　視学官　東良　雅人　先生

新学習指導要領が中学校は平成３３年から高等学校は３４年から施行ということで，これからの新しい学習指導要領の下，どのように美術教育や工芸教育を考えていくのか，先生方の授業改善につながるようになればと思います。

大館名産！あめっこのパッケージデザイン

各自のパッケージの説明をしている場面です。大事なことは漠然と感想を言い合うのではなく，その学習のねらいや学習の中心となるポイントを押さえながら，子どもが作品をみたり，自分の感じたことや考えたことを話すということ。言語活動は，思考力・判断力・表現力という学びに繋がっていくことが大事です。

この場面は，「パッケージの口の部分が小さくて飴が見えないからもっと大きくしたらよい」というアドバイスを友だちからもらい,悩んでいる。学習シートには『見える範囲を広げる，安心感アップ』と書いてある。この子は全体のバランスを考えているので，口の部分だけ大きくするとバランスが悪くなる，全体のイメージをこわさず，もう少し大きく見えるようにするにはどうしたらいいのかといろいろ考えている。大事なことは，こういう場面を先生がきちんと捉えておいて，後で言ってあげられるかどうかです。単に「上手にできたね」だけではなく，「口のところうまくいったよね，大きくなって見えるようになったよね」と言ってあげられるかです。子どもがどういう活動をしているかしっかりと見ていくことが大切です。

「羽後く！」羽後中発・箸置きを町のお店へ！

実際に箸が用意されていて，試しながらできるようにしています。様々な材料を使いながら表現するという活動はよくありますが，材料の特性や特質を子どもがちゃんと分かるような場面をつくっているかどうかが大事です。材料がどう曲がるか，どうなるのかを知り，自分たちの表現の意図に応じて材料と対峙しながらよりよく表現していくことが大切です。

自分の思いを形に～空間や材料に生かした立体表現へ～

様々な材料を使う場合は，材料を触っているうちに新たな構想や発想が生まれ，どんどん変わっていくことが多いです。特に絵や彫刻の活動では、変わっていくことも奨励して欲しい。その時に，最初どうなって後にどうなったのか先生自身もしっかり捉えて，その変化を子どもにも伝えて欲しいのです。小学校の図画工作における造形遊びを中心とした材料と豊かに関わっていくという学びの中で，どんな学びをしてきたのかを捉え，中学校として生かしながら新たに指導していくことが大切です。

これは発表の場面です。発表の在り方はいろいろあってよいが，自分の言葉で話す方が，子どもがきちんと聞いているのではないでしょうか。子どもは失敗したくない気持ちもあるので，手元にメモを持たせて安心させていいと思います。たとえ上手に言えなくても，身振り手振りも含めながら自分の言葉で話すことが大事です。

「私を支えてきたもの」～チョークで描く私の世界～

この生徒は，『私を支えているのがお母さん』とシートに書いてあったので，作品にあった太陽がお母さんを象徴していると思い聞いたら，「わたしは太陽幼稚園に通っていたのでそのことを描いたんです」と答えたのです。やっぱり子どもの表現は聞いてみないと分からないですね。見て勝手に判断してはいけないということです。子どもの中には自分が表したいことが強くあって，それが分かる時もあるけれどなかなか分からない時もあります。だから子どもの活動の邪魔にならないように言葉をかけたりやりとりをすることが大切なのだと学ばせてもらいました。

中学校の学習指導要領の「Ａ表現」の中に,「部分と全体を捉える」ということがあります。特に細かい作業になっていくと全体という視点を忘れてしまうことがあるので,時々離れて見てごらん，友だち同士で見てごらんなどとアドバイスしてやると全体を捉えられるようになると思います。

高等学校のほうは，実践発表が行われた後，中高一貫校の高等学校における美術・工芸教育の課題とかこれからあるべき姿とか議論されていました。この二日間してきたのは美術の話だったんだろうか工芸の話だったんだろうか，振り返ってみてください。発想とか構想とかは美術では大切な言葉ですが，必ずしも美術の教科だけで使う言葉ではないのです。ものの見方や感じ方，技能という言葉もそうです。

秋田大会のテーマは「秋田発新たな美を拓く～わたしを問い，発信する造形活動～」です。秋田の先生方は何年も前から準備されて今日の日を迎えられたわけですが，研究紀要の中に，「これからの変化の激しい時代において人との関わりの中で課題を解決していく，そして社会にとって意義ある提案をし，社会全体をよりよい方向へ変化させていくことができる子どもの姿をイメージしている」とありました。そして，「わたしを問い，発信する」は，これまでの自分，今の自分，将来の自分を見つめ考えることをイメージしているともありました。このような今回の秋田大会のテーマは，新しい学習指導要領の教科の目標，科目の目標の柱書きの「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成」と、まさに，これと軌を一にするものであって，移行措置期間に目指していく,今の学校教育を模索する期間に，的を射たテーマ設定の中で取り組みいただいたと思います。

今回の紀要の９Ｐの図について，わたし，わたしたちを問う発信，それを往還しながら自問自答したり読み解いたり，さまざまな資質・能力を働かせる活働の中，テーマに迫っていこうというものだと思います。この図に付け加えさせてもらうとすれば，「わたし，わたしたち」の周りに，子ども一人一人の自己との関係性や，他者との関係性，社会との関係性，生活との関係性，個との関係性があるということ。個の関わりはそれぞれが

違うので一律にしてしまうのではなく，子ども一人一人の個性やよさを伸ばしていくような視点をもちながら題材を設定したり学習活動を展開したりしていくことが大事です。小学校，中学校，そして高等学校と，関わる相手は変わらなくとも，関わり方が違っていく。小学校でできなかったことが中学校でできるようになる，中学校でできなかったこと，感じられなかったこと，考えられなかったことが，高校生になったら感じられたり考えられたりする。子どもは，こういった関わりの中で表現したり鑑賞したりしている。自分との生き方在り方との関わりの中で活動を展開していく教科という特質から考えると，子どもが学ぶ授業を考えることができるのは学習指導要領の解説ではなく子どものことを一番よく知っている先生方自身。しかし好き勝手やっていいというわけではなく，こういう力を付けて欲しいと学習指導要領で示していますが、こういう方法でやって欲しいということは示しておらず，方法は先生方に任されています。１００人先生がいたら，１００人授業が違います。同じねらいのものであっても扱っている題材が違ったり材料や教材が違っていたり。目の前にいる子どもたちを教えるのは自分であると自覚しながら子どもたちに向き合っていただきたい。まずは子どものことをよく知ること。やり方にはいろいろあっていいわけです。これといった型や方法があるわけでもありません。自分の授業をつくっていくために，他の先生がやっているのも見せてもらったりして，よいと思ったものは参考にしていい。しかし大切なことは，目の前の子どもが一番学べる方法を選ぶということです。今年の一年生でうまくいったと思っても来年の一年生でうまくいくとは限りません。また改めて子どもたちをよくみて，その題材を手直しをするとかして，子どもが一番学ぶ方法を選んでもらう。そのためには，大会の紀要に載っている子どもたちの関わりをイメージしながら，学習のねらいをしっかりと明確にしていくことです。題材や学習活動を子どもたちの在り方との関連の中から考えていくことが大事になります。

平成２５年度の学習指導要領の実施状況調査，これは国立教育政策研究所が行った調査です。

肯定的回答の割合（生徒）
- 美術の学習が好きだ　70.9%
- 美術を学習することで想像する力が付く　89.1%
- 美術を学習することで身の回りにあるよさや美しさを感じ取る力が付く　80%近く
- 美術の授業で作品などを鑑賞する時，作者や作品のことについて知ることで作品の見方や感じ方が付く　78.3%
- 美術の学習をするとふだんの生活や社会に出て役立つ　39.8%
  ※子ども自身は美術を学ぶとこういう力が付くということは分かっているが，それが自分の生き方とか生活とか社会とかに直接結び付いていないことが分かる。
- 普段の生活で美術作品などを進んで見ようとしたり鑑賞したりすることがある33.6%
- 美術館や博物館にある作品を見に来たりしたい　51.6%
- 美術で学んだことを家や学校での生活に生かしたい　56.1%

肯定的回答の割合（先生）
- 表現の授業において，生徒が自分の表現意図に合わせて表現を工夫できるように指導を工夫している　97.9%
- 鑑賞の授業において，生徒が鑑賞が深められるように作品などに関する基本的な知識を含めて指導している　77.8%
  ※鑑賞の活動にはやや苦労していることが数字からも伝わってくる。
- 表現や鑑賞の授業において，学習に対する生徒の興味や関心が高まるような題材の設定や指導の工夫をしている　96.6%
- 表現の授業において，発想や構想の能力を高めるために言語活動を意識してどのようなことを取り入れているか
  ～アイデアスケッチをさせるが一番高く，２番目は言葉や文章で表す，話し合い活動をするは37.7%，意外と低い，だから，ワークシートが中心になっているという傾向が結果から見えてくる。
- 鑑賞の授業において，鑑賞の能力を高めるために言語活動を意識してどのようなことを取り入れているか
  ～言葉や文章で表すが89.5%，自分の価値意識をもって批評し合うことが37.7%と低い，鑑賞というとみんな言葉でやっているのかと思うと意外とそうではない。
- 表現や鑑賞の活動において〔共通事項〕を意識した授業を行っている　79.9%
- 美術館を活用したり学芸員と連携した授業を行っている　15.3%
  ※２０年間この活動を行っているが，環境の違いもあり低い状態。

肯定的回答の割合（生徒と先生の比較）
- 作品などの鑑賞をする時，形や色彩の性質や感情の効果を意識することができた
  生徒69.5%
- 表現や鑑賞の授業において〔共通事項〕を意識した授業を行っている
  生徒69.5%　先生79.4%
  ※先生と生徒のギャップ
- 美術作品などを鑑賞したことで学んだことを自分で描いたり作ったりする表現に生かしている　生徒67.7%　先生89.4%
  ※２割ぐらいの生徒は，やっているのだけれど，それだけのできたという実感をもてていない。

生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質という能力の育成を目指していくこれからの新しい学習指導要領を実施する中で，平成２０年の学習指導要領で子どもたちがどういった実態だったのか知っておくことはとても大事なことです。

今回，学指導要領を三つの柱で整理しました。例えば中学校美術科の教科の目標の柱書には,「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して,造形的な見方,考え方を働かせ生活や社会の中の美術や美術文化に豊かに関わる資質・能力を次のように育成することを目指す」と示しました。先ほどの質問紙調査でもわかるように，子どもたちの生き方との関わりがまだまだ弱いわけです。今回の改訂では，目指す資質・能力をこういった子どもたち一人一人が生活や社会の中の形や色、美術や美術文化と豊かに関わる力を義務教育９年間，それから高等学校の美術３年間で幅広く、そして深く育成していこうと示すことにしました。ともすれば美術や工芸は，上手に絵が描けること，上手にものをつくることが目的で，それができるための教科でしょうと解釈される。子どもたちの生き方から考えたら，必ずしも絵を描くものを作るだけでなく，ものを考える，発想や構想するといった道に進む子もいるし，表現の道に進まなくても，絵を見て楽しんだり，自分の家にお気に入りの絵を飾って生活を豊かにしたりといったことも美術の豊かな関わりです。身近なコーヒーカップを選ぶ時に形や色にこだわったり，部屋が暑かったらカーテンをどんな色にしたら涼しくなるかなと考えて柄や色を選ぶことも美術や美術文化と関わることのひとつです。神社仏閣に赴いて先人の知恵や伝統的,創造的な側面に触れるということも美術や美術文化の豊かな関わりです。男鹿のなまはげ展示館に行って来ましたが，なまはげというのは戸を叩いて怖がらせるものだと思っていたのですが違うのですね。かわいいのもありますが怖いものもありました。家に来たら本当に泣いてしまうでしょうね。これらの文化だってやはり美術や美術文化との関わりのひとつだと思います。今回の学習指導要領は，生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる力を付けるのだということを，皆さんと共有しながら授業づくりが進んでいくといいなと思います。

もう一つの改訂のポイントに，社会に開かれた教育課程の実現というのがあります。学校の中だけで教育を閉じてしまうのではなく，社会と共に目標をお互いに共有しながら子どもたちを育てるということ。教育がこれから社会をつくっていく，リードしていくということです。今日の研究部の先生の提案の中にありました，「何ができるようになるか，何を学ぶか，どのように学ぶか」という観点から，社会に開かれた教育課程を実現していこうというのが今回の大きなポイントです。特に今回，教科，科目の内容を三つの柱と言われる学びに向かう人間性の涵養，生きて働く知識・技能の習得，思考力・判断力・表現力等の育成，これを目指しながらやっていこうということです。今回の改訂で大事なのは，三つの柱が三角形の形をして示されているのですけれど，どこからでも始められるのです。最初に知識をやってから考えさせてというやり方もありますし，最初まず考えることをやってみてから知識ということもあるわけです。学習のねらいに応じながら，柔軟に三つの柱を位置付けて授業展開していく。そしてその三つの柱を教科の方に戻した時には，教科の目標を三つの柱で整理をしたということですね。今回，知識については造形的な視点に関することを知識として位置付けています。技能に関しては，今までの創造的な技能と考え方は基本的には変わっていません。思考力、判断力、表現力等については，発想や構想に関すること，そして鑑賞に関すること。学びに関する人間性については中学校ですけれども，創造活動の喜びや美術を愛好する心情や豊かな感性，心豊かな生活を創造する態度，豊かな情操といったものを育てていくことに整理しました。そしてそれを（１）（２）（３）という形にして先ほど見せた教科の目標を設定しました。この三つが柱として構成されています。

この授業は「おもてなしの器」という題材です。。グループに１個ずつデジタルカメラを渡して自分たちで器をしつらえてそれを写真に撮ります。授業を見ていると子どもたちが同じ言葉を言うんですね。「インスタ映え」「インスタ映え」と言う。お互いに発表会をします。何でこんな風なしつらえ方をしたのか，それから誰におもてなしをする器なのか，どういった所を工夫したのか，このときに先ほど言ったように，発表する生徒も見る生徒も同じ視点で発表したことを見て，そして共通に感じたたことや考えたことを交流していくということが大事になってきます。このときに自分の言葉で話す方が子どもたちは子ども同士の距離も近くなり，自然な感じで手にはメモ書きをちょっと持って詰まったりしたらそれを見ながらやっていいわけです。出来上がって授業が終わった後に冬休みに家に持ち帰らせて，実際に使ってまとめさせています。下駄の形をした器なんですが，なかなかお寿司がいい具合に収まっています。ここにお醤油を入れるところもあります。ここに貼っているのは，発表しあった時に，お互いのいいところのメモ書きをもらって貼っている。友達の言葉がここに貼られています。

表現と鑑賞が題材の中に位置付けられてるときに，主体的に学習に取り組む態度を行き来しながら，表現では発想や構想したり創造的に表すという活動を行い，Ｂ鑑賞では見方や感じ方を深めるといった学習活動を展開しています。その時に大事なのは，それぞれの資質・能力がばらばらに働くのではなく，三つの柱を往復しながら学習活動が働いていくようなイメージをもつことです。特に行ったり来たりしながら表現で学んだことは鑑賞に行かされる，そして鑑賞で学んだことが表現に生かされるような学習活動を展開していくこと

です。こういうことによって子どもたちの創造活動の資質・能力が高まっていきます。そこを今回の改訂では非常に重視しています。そのときに活動を通した学びを見る事が大事。昨日，「自分の思いを形」にといった空間や材料を生かした立体表現の授業を自由に見せてもらいました。毎回写真を撮ってポートフォリオになっていました。ワークシートで先生も子どもも活動の過程が見て取れる，そして何より生徒が毎回前はどうだったかなとちゃんと振り返られるような仕組みになっていました。毎回写真に撮って貼るのはなかなかできることではないかもしれませんが，２回に１回くらいはできるのではないでしょうか。昨日の授業でこういう取り組みをされていて，生徒は時々、前はどんな形だったかなと見ている，そういう振り返りをさせていくことが重要だと思います。活動を通した学びを見るときに「活動＝作業」ではないのです。「活動＝作業」と捉える先生はこんな感じの人が多い。「うーん。」と子どもが考えていたら，「ささっとやれんかな。」「間に合わないじゃないかよ。」「あした参観日だよ。」そんな先生の方の必然性ばっかりが先になり，つい心の中で思ってしまうことがあるのかもしれません。このことは，その瞬間「活動」を「作業」として見ているのではないでしょうか。「活動」を「学び」として捉えていくということが大切です。つまり「うーん。」という生徒がいたときに，「おお。今日はえらいよう考えているな。」この違いは本当に大きいです。「活動」をしっかりと「学び」という意識を持ちながらやっていくことが大事だと思います。そして，それをきちんと子どもと共有する事です。

さっき見ていただいた題材は「おもてなしの器」という題材名です。「題材名」というのは子どもが題材に飛び込む入り口の大きな役割を果たしている。これを分析的にみると，この「おもてなし」というところに学びの部分が含まれている。つまりこの授業は，形や色彩の働きを使って相手に心を込めてもてなすことを考えるんですよと短いことばの中で言っているわけです。これは平成２０年の学習指導要領の「用途や機能，使用するものの気持ち，材料などから美しさなどを考えて表現の構想を練り，創意工夫して表現すること。」ここに当てはまります。暗にこのことが，学習のねらいだということということを伝えるひとつのキーワードになっています。「子どもに何を学ぶのか。」ということをこの題材名の中で示してやるということは，子どもの扉の入り口を大きくしてやる。扉の向こうには何があるのかと想像させる一つのきっかけになると思います。そしてこの「器」，これは活動を示しています。これは何をするかです。器を制作したり，鑑賞したりすることで今回学ぶんだよ。ここが目的ではなくって，要するに形や色彩の働きを使って，相手をもてなすというのを考えるというのが今回の授業なんですよ，この「器」というのが示しているのは，学習指導要領上でいうと目標に示されている「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」，活動が目的ではなく活動が手段になるわけです。活動を通してこういう力を付けるということです。短い文章ですが。もう１個大事なことは，先生はこういったことを考えるために二つのことが出来ないとダメなんです。一つは題材を通して育成を目指す資質・能力の明確化が出来ること。この題材でどんな力を付けるのか先生が明確にもっていなかったら，こういう題材名は考えられない。それから，もう一つは活動を「活動＝作業」でなく学びの手段として捉えるということ。この二つが出来ないとこういう題材名はできないわけです。逆に出来ている、行っている先生は，題材の目標を明確にしています。子どもが一番学ぶことのできる方法を使ってやっているということです。

今大会の題材名は，よく見ると二つのパーツに分かれています。学ぶべき事がきちんと書かれている部分と活動が書かれている部分。活動が学習の中心になっていると子どもは作品をつくることが目的なんだと思ってしまう。ここを今回秋田の大会はよく考えられているなと感心して見ました。美術科における三つの柱の資質・能力の相互の関連を図るとは、何を学ぶのかということを中心とする，さっきの題材名で言えば学ぶべきことを中心に置きながら授業を考えて行くこと。そうすることによって，発想や構想とか創造的に表す技能とか鑑賞が関連し合うことになります。今回、秋田の先生に確認してほしいのは，この題材名が先生だけの理解に終わるのではなく，これをきちんと子どもと共有するということ。こういう授業，こういう題材名を考えている先生は，最初の導入の時に題材名で子どもとやりとりをする。ちょっとおもてなしってどうなのだろうと言って，子どもたちに話し合わせたら、形や色のおもてなしってどうなんだろうねといった美術の展開になっていきます。この題材名にこういう意味が込められているよねと先に言ってしまうのはかまわないですが，子どもたちの中で，この題材名の意味は何？と自分たちでひもといていった方が，学びに繋がっていく。今日と昨日，多くのそういった授業を見ました。

今回の新しい学習指導要領で示した，生活や社会の中の美術や美術文化等と豊かに関わる資質・能力を身に付けさせるには，授業のねらいを明確にするということがあります。もう一つは，美術科の特質に応じた物事の捉える視点や考え方をきちんと働くようにしていきましょうということです。これが今回の新しい学習指導要領のポイントのひとつになっています。中学校は新しい学習指導要領の解説書に書いてあります。高等学校はまだ市販本がありませんが文部科学省のホームペー

ジに PDF で解説書があり，その中に書かれています。今回いろいろな議論の中で，じゃあ，美術科の特質に応じた物事を捉える視点に何があるんだろうと，今回の学習指導要領を作成する協力者の中で多くの時間をかけて考えました。美術でないと鍛えられない，他の教科ではできないということを挙げていく必要がありました。それが，今回挙げている三つです。一つ目は感性や創造力を働かせるということ。題材の学習活動の中できちんと働く場面がある様にしていこうということ。二つ目は対象や事象を造形的な視点で捉えられるようにするということ。三つ目が自分としての意味や価値をつくりだしていくこと。これらは１時間の授業の中で三つとも働かせないといけないものですが，題材の中でこういうことが働くようにすることを大事にしながらやっていく。今回，この「美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」だと長いので，言い方を考えて，「造形的な見方・考え方」という言い方にして，授業の中で働くような展開を意識しながらみんなでやっていきましょうということです。

主体的，対話的で深い学びの実現に向けての授業改善は大会テーマにもなっています。主体的な学びや対話的な学びは比較的にイメージしやすいですが、深い学びというのはなかなかイメージが難しい。それは、深い学びというのはなにか主体的，対話的に一つのイメージに収束するものだけではなく多岐にわたっている。このときの学びの深まりの鍵となるのがこの造形的な見方・考え方。ただ，授業づくりをするときに造形的な見方・考え方を主眼に考えるのではなく，教科の本質に迫っている授業をすることが大切です。そうしていけば自ずから造形的な見方・考え方が働く訳です。逆に見た目には絵に描いたり物をつくったり，絵を見たりしているが教科の本質に迫れていない授業というのは，造形的な見方・考え方はほとんど働かない。子どもが一生懸命ペダルをこいでますけど，行き先はもう先生が決めているっていうような授業では，子どもは感性や創造力を働かせる必要がないわけです。造形的な視点でものを見たりする必要もありません。造形的な見方・考え方にある、感性や創造力を働かせるとか，自分としての意味や価値をつくりだす，こういったことはこれまでもずっと大事にしてきました。

今回特に新しく明確化したのはこの対象や事象を造形的な視点で捉えるということですね。今日はちょとだけ説明をしておきます。中学校美術科の「造形的な視点」というのは二つの視点を示しています。一つは対象などの形や色彩，材料，光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉える視点，もう一つは，全体に着目してその造形的な特徴などからイメージを捉える視点です。解説書では「木を見る視点」,「森を見る視点」という風に説明をしています。今回中学校美術科，高等学校の芸術科美術工芸においても造形的な視点としての定義ではほぼ同じでっす。そして表現及び鑑賞の学習において「木を見る視点」,「森を見る視点」この両方を豊かにすることを重視していく。これまで感性を豊かにすることを非常に大切にしてきました。そしてこれからも大事にしていきます。でも感性というのは対象や事象からよさや美しさ価値や心情を感じとる力，まずはよさや美しさを見付けないことには，通り過ぎてしまったのでは，なかなかには感性は育たない。発見や気付くということが大切です。例えばデザインの学習をしたとき。それまで何気なく食べていた食事で，お醤油の瓶の上の方が持ちやすい、それはちゃんとへこんでつくってあるからなんだ。こういう普段気付かなかったこと、通り過ぎていたものにもっと気付いていこうとする。美術の先生方は専門教育を受けてきた経緯の中でもう造形的な視点はもっているが，われわれと同じと思ってはいけない，気付かない子もたくさんいるわけです。「影を何かに見立てて何かに似てる。」「きらきらとしたものがきれいだ。」こういう視点をしっかり育てていきましょう。

男鹿のなまはげの館の他に，もう一つ見に行った物がゴジラ岩です。はじめに見付けた人は造形的な視点が豊かな人で，形の働きに着目して見立てるというやつです。特に美術や工芸が対象としている形とか色彩とかイメージや色，光といったもの。そこにゴジラ岩がただの海の岩だで一生で終わってしまう人となんかゴジラみたいな形して面白いな，楽しいなと思ってしまう人とどこに境目，分かれ道があるのか。視点をもつことによって様々なものに気付く様々なものに美しさを感じる,自分としての価値に気付く子どもを育てたい。これは決して美術の授業だけに必要な力ではないと思います。子どもがこれからの人生に視点をもてるという事はこれから量的な豊かさだけではなく質的な豊かさのためにも必要だと思います。ですから造形的な視点を豊かにすること。そして，様々なものに気付いたり新たな発見ができる，こういう力を子どもにもたせて行けるような指導をしていこうということです。今日の記念講演のお三人の若い方のお話しの中で言うとすれば，自分の好きを見つめる，見付ける。物事を見付ける力になるのではないか。「これ大好き」「これすてき」そういうことを見付ける力にもなると思います。

今回それを豊かにするために設定したのが〔共通事項〕なのです。〔共通事項〕というのはアが「形や色彩，材料，光などの性質や，それらが感情にもたらす効果などを理解すること。」イが「造形的な特徴などを基に，全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。」アがいわゆる「木を見る視点」。それからイの方が「森を見る視点」。もう少し大きくものを捉える事を理解させてイメージがもてるようにする。今回，〔共通

事項〕は理解を通して造形的な視点を豊かにするために必要な知識ということで，中学校も高校も設定している。生きて働く知識として，それを基に子どもの視点が豊かになっていくことを目指して〔共通事項〕を指導していくということです。

そして,先ほどのこういった学習活動の展開(大会要項Ｐ９の図）の中にもうひとつ加えるとしたらここに〔共通事項〕を位置付けて、それぞれの活動のところで〔共通事項〕で学んだことが働きながら，造形的な視点を豊かにして発想や構想を豊かにする，造形的な視点を豊かにして見方や感じ方を深める，造形的な視点を豊かにして創造的な表し方を高めるということ。それから昨日の授業でもたくさんの場面でありましたが，この言語活動を発想や構想や鑑賞のところに位置付けて，子どもが自分との対話を含めて，自分の考えを整理したり，他の友だちや他のクラスの人と話し合ったり，説明しあったり批評しあったりすることによって，自分では気付かなかった事に気付かせてもらう活動を展開していく。今回の授業のイメージというのは中教審で示していますが，こういうイメージで授業をつくっていって，表現で学んだことが鑑賞に生かされ，鑑賞で学んだことが表現に生かされて創造活動の全体の資質・能力を高めていくことを目指しているわけです。そう考えていくと,「Ａ表現」で作品を何か描かせました。大人が見てものすごい上手な作品ができました。そして鑑賞の学習をしました。作品について饒舌に語ることができました。この結果だけを見てこれが深い学びかどうか，考えてみる必要がある。なぜかというと，学びというのは、結果だけでなくその過程にあるからです。その学習活動の過程の中にまず一つは教科の本質に迫りながら造形的な見方・考え方がどこかの場面で働いて。この三つの柱で整理された資質・能力が関連しながら学習活動を展開して，そのプロセスを経て子どもが自己実現していく，そういった学びが，深い学びの学びの深まりに繋がっていくのだろうと思います。そのためには教科等の本質に迫る「学び」というものが何なのかをしっかりと押さえて授業をするということ，今やっている授業が本当に教科の本質に迫れているのかどうかをもう一度学習指導要領の視点から確認をしてください。

なんとかずっと立てようと格闘している生徒がいました。最後はちゃんと立ちましたよ。どうしたらいいのかずっと考えている子どもたちがいました。一人では気付けないで二人では気付けるかもしれない，一人では解決できないけどみんなだったら解決出来るかもしれない，そしてそれがお互いの学びに繋がっている。頭の中ではできていると思ってやってみたけども，めくってみたら全然頭で思ったことと違うじゃないか，ではやり方を変えてみよう。これだよこのイメージなんだよね。この瞬間に子どもたち一人一人に学びがあるんだと思います。

今日は資質・能力の話をしました。この前提にあるのは「全ての子ども達は豊かな存在」ということです。そこからスタートです。空っぽの容器に物を入れる教育ではなく，もともと子どもは豊かな存在です。その豊かさを美術の教科の本質に迫るような学習の中で，もっと豊かにしていくということです。そして、子どもたちは常に学ぶ存在である。学びたくって学びたくって本当は仕方がない存在なのです。その学びと学びををつないでいく役割が美術や工芸の役割のひとつだと思います。これから変化の激しい社会というフレーズがいろいろなところで出てきます。このような時代を迎えるに当たって、つい我々は激しい社会に子どもを何とかして対応できるようにしなくてはと思ってしまう事が常なのですが，自分の人生に置き換えて考えてみてください。変化に対応するだけの人生は豊かで楽しいものなのでしょうか。私たちは単に社会に対応するのではなくて社会をこれからつくっていく子どもたちを育てていくことが大切だと思います。資質・能力を育成する観点からここにおられる先生方が担っている美術や工芸の教育の役割は非常に大きいと思っていますし，それから今まで以上にその責務に期待が掛かってくると思います。新しい学習指導要領が公示されると新しい展開になります。それは決して前の学習指導要領から１８０度変わるものではないのです。今までやってきた取り組みを我々自身がもう一回振り返るチャンスです。どうぞ移行措置期間中に今までやってきた実践をもう一回振り返ってみて，直すべき所は直していき，よいところはそのままずっと続けていけばいいと思います。必ずその両方があると思うのでぜひ取り組んでください。そして，子どもは教えられることで学べることがあるのですけれど，子ども自身の力で学べることもあるわけです。そこをしっかりと見極めて子どもの力で学べることは，少し言うのを我慢して子どもに任せてみたらどうでしょう。その代わり，教えなければ学べないことはしっかりと教えてください。

最後になりましたが、この二日間、本当に熱心にこれからの教育を検討していただきました。そして議論していただきました。今日の中等教育の会場の参加者全員に感謝を申し上げまして，私の指導助言にさせていただきます。二日間ありがとうございました。お疲れ様でした。

１－Ａ　小３年「ためして遊ぼう　○+□＝自分だけの新聞紙ワールド」

授業者：大館市立扇田小学校　小松　由佳
指導助言者：秋田市立下北手小学校教頭　大野　一紀
司会者：大館市立上川沿小学校　畠山　直子
記録者：大館市立扇田小学校　三浦ひかり
世話人：大館市立南小学校　木村　明美

１．授業者から

・素材は，形が変えやすく，感触を感じ取りやすい新聞紙を選んだ。新聞紙は子どもが生活の中で目にすることが多く，わくわく感を感じにくいため，使用する分量や素材の提示の仕方を工夫した。

・色にも気付かせたいと考えていたため，全面広告やチラシを新聞紙の中に入れた。色やチラシに気付いた子どもは少なかったが，積極的に取り入れている子どもも何人かいた。

・造形遊びを行っていると，作った物が残らないので評価をする難しさを感じる。
本時は思考・判断・表現を評価するのだが，子どもの考えを読み取る難しさを実感した。

・振り返りの他に，活動した後で自分が何をしたか絵で描いたり，写真にコメントを書いたりする活動を積み重ねてきた。

・活動時間の確保のために，導入や終末を短くした。

・子どもへの声かけは「どういう風にしたいの。」と始めに問い，２回目「どんな感じになった。」と問うことで子どもたちの変化を見取るようにした。

２．協議（成果：○　改善点：●）

○子どもが主体的に新聞紙に関わり，様々な方法を試していた。

○子どもたちがのびのびとダイナミックに活動を広げていたのがよかった。

○子どもが材料と関わり合いながら発想を広げていたのがよかった。

○子どもが様々な活動場所を選択できるよう準備がなされていた。

○前時で新聞紙ではどのような表現ができるか試していたため，子どもたちは前時からのつながりを意識して活動していた。

○活動時間が充分に確保されていた。

○布をめくると色ごとに並べられた新聞紙が出てくるという題材提示の方法がよかった。

○副材料として使用可能なセロハンテープを隠しておいた教師の支援がよかった。

○「ちくちく」や「ぱらぱら」など，オノマトペを使った表現が発達段階から見ると有効な手立てであった。

○一人一人の子どものことをよく把握し，励ましの声かけをしていた。子どもは自信をもって活動することができていた。

○評価をすることを考えると，カメラでの記録は，一人一人を見取ることができるのでよかった。また，子どもとの対話も評価の一部となる。たくさん声かけがなされていたのでよかった。

●教師側が色を意識させたければ，材料を提示した時にもう少し色について話をしてもよかった。例えば，「ちくちく」を作っていた子どもたちは意識して緑色の全面広告を使い，棒状の物を作っていた。全体に取り上げて紹介してもよいのではないか。

●子どもはめあての「○+□」の捉えをどこまでできていたか。技の合体なのか，物との複合なのか。めあての提示の仕方に工夫が必要であった。
●子どもは初めての場所ということもあり，その場にある物を使おうという考えがあまりなかった。あえて前面に置き，気づきを促してもよかった。
●送風機が置いてあるなど，子どもが場に関わっていけるような工夫が必要だった。
●子どもの気付きが少ない場合，導入で教師から具体的な姿を写真などで見せてもよいのではないか。
●振り返りの際，教師が指名した３人が話して終わっていたが，先生がコメントを話してもよいのではないか。また，子どもたちは作った物を見ていなかった。映像で見せて発表させる方法もある。
●扇風機に新聞紙を貼り付けていた子どもがいたので，安全面への配慮が必要であった。
●造形遊びの活動を深めるための教師の言葉掛けの難しさがある。教師の意図に子どもが縛られすぎないような言葉掛けが望ましい。

３．指導助言（成果:○　改善点:●）

○指導案に具体的な子どもの姿を示した評価規準が設定されていた。教科横断的な視点で子どもの学びを捉えようとしていることが感じられた。
○活動時間が充分に保障されており，子どもたちに対しての具体的な指導や支援方法が準備されていた。
○子どものそばに行って「工夫したことは？」と尋ねてから具体的に活動のよさを認めており，子どもが安心して活動できることに繋がっていた。また，さらなる表現の工夫を引き出すよう，造形的な視点を意識した言葉掛けがなされていた。
○記録用に写真を撮ることは，評価材料としてだけではなく，そのこと自体が，子どもへの賞揚となっている。今後も子どもの活動の記録はもちろんのこと，授業中や授業後にも活用していってほしい。評価については，写真だけではなく，ボイスレコーダーを使って子どもへのインタビューを記録していく方法もある。
●造形遊びがただの「遊び」にならないよう，導入のめあてを確認する時に造形的な視点をしっかりとおさえる必要がある。それでも足りない場合は，今回の授業のようにグループの中に介入し，造形的な要素に気付かせるような言葉掛けをしていく。
●活動が停滞しがちな時は，子どもたちの表現の工夫を撮影した画像を見せることで，造形的な活動の深まりが期待できる。
●グループに入り込みすぎてしまうと，全体が見えなくなるので，全体と部分の視点をもって授業に当たる必要がある。
●振り返りは，つくったものが見える場所で行う必要がある。途中の経過を見せたい場合は写真などを活用する。形や色が目の前にないと理解が深まらない。みんなで見て回るなどの方法を考えておくとよい。

１－Ｂ　小４年「もしもこんな世界に」～トントンつないで～

授業者：北秋田市立鷹巣東小学校　豊田　良香
指導助言者：秋田県総合教育センター指導主事　田森　舞
司会者：大館市立山瀬小学校　畠山　和子
記録者：能代市立崇徳小学校　越後谷知子
世話人：能代市立東雲中学校　渡部　悦子

１．授業者から

秋田県能代山本地区では、作品を通じて関わり合いながら造形を楽しむ、小・中・高校生によるコラボの研究をしてきた。

子ども達は高校生からのシーツシアターやパワーポイントに感動し、意欲をもった。秋田杉は、におい、柔らかさ、廃材活用、地域の木材という面で優れた素材である。子ども達は、３年生での体験を生かして様々な形に切ることができた。今回は釘を使用して、技術的には未熟だが、今後回数をこなすうちに上達すると思われる。

本題材では、グループ内で相談し助け合えるように困ったことを発表したり付箋に書き出したりする活動を設定したが、本時は緊張もあり深めることが難しかった。振り返りの場面では、学校の「ひがしっこ」という視点を使用し、次時にこうしたいという思いをもつことができた。

２．協議

○題材、材料について

・地域の高校生とのコラボ、地域素材の活用は製作への動機付けになっていた。地域との連携がよい。
・題材や様々な変化につながるバンドに発想や可能性の広がりを感じた。
・道具､豊富な材料は子どもに合っており、活動に没頭していた。
・シーツの色がきれいなので、杉にも色を入れるとイメージが広がりそうである。

○環境づくり

・シアター、アイディアスケッチ、材料、用具等、子ども達が活動しやすく、自ら考えて学び、一生懸命つくる場になっていた。
・アイデアスケッチは試行錯誤により変化するもの。手元に立てておかなくてもよい。
・製作場面では、子ども同士が関わり合り合えるように場を工夫した方がよい。
・参考作品は技術面・発想面での広がりのために提示・取り上げ方の工夫をしたい。

○関わり合いながらつくる

・友達との対話がもっとあればよかったが、本時は材料と向き合う時間だったかもしれない。
・材料が割れてしまい思うようにつくれなかった場面もあった。つまづきを予想し、対応を準備しておくとよい。

○共有（アピールタイム）

・グループではなく全体で行う手立ても考えられる。教師が支援し、引き出して拍手をし合うことで達成感が高まる。
・自分の言葉で自分を語ることが大切。話型はなくてもよいのではないか。
・動きのおもしろさに迫るためには、シアターから離れて動きについて紹介するとよい。

・動くおもしろさを１０才で言語化することは難しく、「ここに置きたい」という思いを話すのは自然である。どのような手立てをとると動きについての思いを語れたのか。
・めあてに対する振り返りの言葉でもよかったかもしれない。
・作品のよさに気付き合う、確かめ合う場として、もう少し前段に設定する方法もある。

３．指導助言

高校生が描いたシーツシアターが展示され、つくりたい気持ちが沸き上がってくるようなわくわくした場がつくられ、子ども達がシーツや材料を選んで自分の思いやイメージを膨らませることができた。

（１）題材について

地域素材の秋田杉のよい香りがする中、発想を広げながら自分の感覚や行為を通して集中して作品づくりに取り組む姿が見られた。心を惹かれるシーツシアターを選んでその前で製作する、様々な木片から選ぶ等、選択する場面が設定され、能動的な活動につながっていた。３年生の切ってボンドでつける学習から秋田杉に触れ、５年生が糸鋸で切った木片も用意している等、３、４、５年生のつながりを感じることができた。

釘が曲がったり、斜めに刺さったりしていたが、子ども達はこれまでの材料体験がよくできており、失敗を恐れず製作に向かっていた。目の前にアイデアスケッチ、その奥にシーツシアターがあり、じっくり取り組める環境であった。

中学年は、表し方が多様になる。今回は釘だったが、今後もいろいろな材料体験につなげてほしい。図画工作科の学びの深まりの鍵となる造形的な見方・考え方の形とイメージが子ども達に意識されていた。様々な形の木片を準備することで、木片の形から創造力を働かせて、表したい自分のイメージをもって材料などを生かして表そうとしている姿が見られた。

（２）教師の子ども達への関わりについて

本時では主体的な学習のために、ＩＣＴ機器を活用したパワーポイントの視聴から始まって、学習の流れの掲示があり、グループ毎に前時まで困っていることを出し合ってアドバイスする場面や、これまでの学習を振り返って子ども自身が学びを自覚できる場面を設定していた。中学年では自ら働きかけながら見付けたよさやおもしろさを子ども自身が気付くようにすることが大切である。アピールタイムでは、話型にとらわれてしまったので、あえて吹き出しだけや次時にアピールタイムがあると、もっと子ども達が自分の言葉で生き生きと話すことができた。作品を触って動きを見るというところで振り返りにするという流れでもよかった。振り返りでは、学校独自に使用している「ひがしっこ」の「ひ…１人でできた」、「し…知りたい、考えたい、やりたい」を用いていた。子ども達の次の製作意欲につなげていた。他教科と共通した振り返りがあると、子ども達が振り返りに取り組みやすい。「最後までできた。」「できなかった。」という振り返りがあったので、造形的な視点を１つ加えることによりもっと深められる。この後アンサーパワーポイントを収録して、発表することで子ども達の造形活動の意味や態度を伝えることができる。子ども達の造形活動を通して、学校と保護者、地域の連携を深める効果もある。学校外でも積極的に子ども達の作品を発表してほしい。本授業では、子ども達一人一人が自分の思いを試行錯誤しながら表現しようとする姿から豊田先生の実践の積み重ねを感じた。

１－Ｃ　小２年「切って、ひねって、つなげると」～紙コップ大変身～

授業者：井川町立井川義務教育学校　佐藤美奈子
指導助言者：秋田南高等学校中等部教頭　築地　洋
司会者：五城目町立五城目小学校　菅原　恵
記録者：男鹿市立脇本第一小学校　伊藤　晃
世話人：井川町立井川義務教育学校　梁瀬　智美

１．授業者から

・本時は２／３時間目である。夏休み一週間前くらいに紙コップを切り開いて形を変えていく活動を行った。子どもたちは紙コップは飲み物を入れて飲んだり、何かを入れる物というイメージしかなかった。しかし、切り開いたり、長い形にしたりすると、子どもたちは「紙コップってこんなに形を変えることができるんだ」という驚きや感動・思いが生まれて本時を迎えた。子どもに次の活動に何をしたいかを聞くと、「自分の作った物をつなげたい」や「友だちとつなげてみたい」という思いがあった。

・子どもたちは本当に集中して一生懸命活動していたので、ほめてあげたい。本時は「集中して活動すること」「ひねったり折り曲げたりして工夫すること」「友だちやものとかかわるという活動」をさせたいという思いのもとに授業を組み立ててきた。終末で友だちのいいところを紹介する時間を十分にとれなかった。次時につなげるために集中して活動していても敢えて早めに切り上げたらいいか、迷いがあったのでこれで適切だったかを伺いたい。

２．グループ討議および発表

○子どもたち一人一人に声かけをして子どもたちを育てている姿がとてもすばらしい。

△先生がねらっている子どもの姿がわかりづらかった。前時で紙コップを切り開く活動で、本時はつなげる活動する姿をイメージしていたのではないか、と思うがその境目がはっきりしなかった。他校での授業で制限が多かったと思うが、紙コップの数を制限するとか、つなげるためのホチキスの技能を確認するなどの場面を作れば、終末にはもっとに展示の充実ができたのではないか。

（材料について）

○材料の紙コップの数が豊富で子どもの活動が広がっていた。

△紙コップを子どもの動線のどこに置くかは、工夫の余地がある。

（表現について）

△紙コップを長く切っていくことを紹介すると子どもたちは一つの方向に向いてしまうことが良さでもあり悪さでもある。子どもたちがもっとやりたくなるような表現を紹

介したいものだ。

○集中して取り組んでいたこと、安全面を十分に配慮していたことの指導はよかった。

△飾り付けの場所について、長くつなげることが分かっていたら、それに見合う高い展示場所があればよかった。

○紙コップは子どもが集中できる素材であることが分かった。牛乳パックだと切りやすさに難があると思った。

○紙コップに素材を絞ったのがよかった。色などがない方がかえって「切る」「おる」「ひねる」「つなげる」などの技能に集中し、発想がひろがっていた。

△グループの設定を工夫すれば、自分の技術に終始する子どももももっと友だちの発想を取り入れる機会が増えたと思う。

△振り返りの時間が短かったが、グループを活用して次時にやりたいことを伝え合うことができたのではないか。

3. 指導助言

・４５分の単発授業であること、
・会場が他の小学校であること、
・夏休みに入って一週間たっていること、
・３５度を超える暑さであること、
などアウェー感の中でも子どもたちはよく頑張った。

○先生のコーディネート力がすばらしい。

・子どもを引きつける力、子どもを引き合わせる力、を子どもの自発的な活動の中で作り上げていく力が教員には必要。

・将来先生の職業がなくなることも言われているが、コーディネーターとしての仕事はなくならない。先生のコーディネート力がこれから求められていく。

・授業冒頭部分を聞けない子どもに着目すると、切って長くすることに集中していた。先生が、「これどうしたい？」というと、「壁に貼りたい」といったことから、他の子どもにつなげる意識が広がった。しかし、その子にとっては長く切る資質・能力が深まっていったといえる。

・授業構想では、２時間続きにしたかった。敢えて厳しくいえば2時間目のめあてとしては再考が必要だった。

・場の工夫についてもあり合わせの物で工夫していたが、本来であればフック・針金などのある図工室でできたのではないか。

・材料も牛乳パックにしなくてよかった。色を扱う場面で停滞が見られた子どもの実態をとらえており、どこを伸ばしてやるか、が一番大事である。

・紙コップは円柱形であるため、子どもが切るには抵抗があるが、様々な切り方があり発想も広がる。

・どんな資質能力を育てたいか、そのためにどんな材料を用意し、どんな場を設定するかが、しっかり考えられていた授業であった。

1－E　小5・6年「でこぼこ画面を冒険しよう」～思いを色にのせて～

授業者：能代市立常盤小学校　小森　哉子
指導助言者：秋田県教育庁北教育事務所指導主事　鈴木　正樹
司会者：三種町立森岳小学校　伊藤　康子
記録者：能代市立向能代小学校　梅田由美子
世話人：能代市立能代第二中学校　長浜　笑子

1　授業者から

・図画工作が少し苦手な児童でも、完成した作品に満足感を得ることができ、造形的な見方・考え方を育むことのできる題材と考えた。

・指導にあたり気を付けたことは、児童が「自分に問いかけながら」活動するということ。「こうするんだよ。」ではなく、「どうして。」「どうしたいの。」と問いかけるようにした。友達と話し合う時も同様に問いかけることで、なぜその色にしたか、イメージとつなげることができたと思う。振り返りで、友達の工夫からヒントを得たり、友達の工夫のよさに気付いたりしていたことがよかった。

・迷って活動が進まない児童にどんな言葉がけがいいか。「こうしたらいい。」と言うことは簡単だが、児童は言葉通りにやってしまう。児童からイメージや工夫を引き出すのが課題。

・話合いで、色や形に注目するように話すと、それにとらわれて自由に話すことができないようだった。本時は自由に話し合わせたかった。イメージとのつながりを話し合わせるときの手立ても迷った。

・もっと平面的、単純な作品がよかったかという反省がある。細かく工作みたいな画面に作った児童がおり、でこぼこ画面の特徴からイメージをふくらませる時に限定されてしまう。切る回数を減らすとか、もっと平面に近づけたらよかったか。

2　協議

Q最初の手立てについて。どう投げかけて板を切ったのか。イメージができていた児童もいたのではないか。

A偶然のでこぼこからイメージするということで、初めから決めないでやろうと進めた。児童は何らかの自分の思いをもっているので、それはそれでいいかと思う。白塗りしたものから、新たにもう一度自分の思いをもつという時間をもった。

○造形的な見方・考え方で、児童が自分なりのめあてをもって、自分の思いに添った製作が展開されていてよかった。

○イメージをもたせるスタートがよく、板を切って液体粘度で固めてからイメージを広げて発想する活動の流れがよかった。

○板書で今までの活動を振り返るのと同時に、見通しをもつことができていた。また、めあてをペアに語ることにより、自分の活動の見通しが明確になった。

○自分のイメージを言語化したり、友達のよさを話したりする力がついていた。表現と思いを伝える力、自分の表現を見つめ直す力というところで児童の成長が見られたのではないか。

○題材のよさ、幅広い児童のニーズと表現の仕方に合っていた。児童の表現が十人十色ですばらしかった。

○最初にイーゼルに立てかけて表現し、またイーゼルに戻した大胆さとその設定、アイディアがよかった。

○心象的な表現で中学校につながる。心象を言葉にのせて、「こんな考えだからこういう風に表現した。」というやりとりがしっかりできていて、最後の振り返りにつながり、表現の見通しから振り返りまで一貫していた。

○色を塗ることでイメージをふくらませ、そこに視点がいくような声がけがあった。

○授業者の指導が一人一人に丁寧に対応し、相談にのっていたことが創造的な技能につながった。

○表し方の資料、道具の提示がよく、児童

がイメージに合わせて「こんな道具を使おうかな。」とイメージと実際にやる活動がつながったのではないか。

○今までのワークシート、イメージマップが有効に働き、確認しながら言葉での伝え合いができていた。積み重ねから自分と他の人の感じ方を照らし合わせていた。

○指導案の全体計画の評価規準がきちんと書かれており、今日の児童の姿が表れていて納得できた。

●振り返りや発表の段階での紹介が長く、自己の中で対話をしながら、表現する時間がもう少しあればよかった。

●交流が２回あったが、前半と後半で設定の工夫があれば表現の時間を確保できた。

●つまずいている児童への支援、途中で調べ活動を入れてもよかった。

●道具の設置場所を工夫するとよかった。

●子どもの思いを伝える時間の伝え方に工夫の余地があった。

●ベースを細長い形や折れ曲がった形にしたり、着色にしても、イーゼルに立てかけて着色したりといった幅広い表現を支援してもよかった。

●テーブルの広さは作業には十分だったが、途中の児童のやりとりには広すぎた。自校であればもっと積極的にやりとりできた児童なのではないか。

●本時のゴールは「自分のイメージ通り表すことができた！」だが、何をもって自分のイメージだったか。

●先生が「どうしてこうしたの。」と話しかけていた問いかけを児童間でできると、さらに成長が見られると思う。

●言葉のイメージを追うことを求められていたので、色や形から発展できることも言葉にとらわれ考えこんでしまっていた。

●絵の具の使い方、モードが均一だったので、でこぼこのマチエール（質感）が目立たない児童がいた。絵の具の濃度の差があれば、多様な表現につながった。

３　指導助言

・児童一人一人が造形的な見方・考え方をし、試行錯誤しながら学びを深めていく姿が見られた。今日提案された授業は、参加者がこれからの授業づくりを考えていく上で大変参考になるものだった。

・児童の思いを大切にした指導だった。表現活動では、「こんなものを作りたい。こうしたい。」といった発想や構想に関する思い、「色を少しずつ変えていきたい。」「ここを盛り上げていきたい。」といった技能に関する思い、「楽しかったな。もっと作りたいな。」という様々な思いがある。そういう思いを強く児童の心の中にもたせる指導の工夫が大切である。本時では、一人一人が自分の思いを表すために、材料や用具を活用して表現を工夫する姿が見られた。強い思いがあってこそ、創造的な技能が発揮される。

・悩んでいる児童の思いに寄り添う指導者の姿があった。学習カードに表されている思いをくみとりながら問いかけ、児童が自分へ問いかける思考を促していた。向かいの児童に相談する姿も見られ、自然な言語活動が行われていた。児童は細かいヒビを入れることで解決していた。自分なりの課題解決が大切になってくる。そのためには、活動のすべての過程を通して、思いをもって活動できる指導計画の作成が大切である。

・お互いのよさを認めたり、尊重したりする指導がされていた。友達の作品や活動に目が向くようにしたり、交流の場面を設定したりすることで、自分や友達のよさや個性などに気付く場面が数多く見られた。作品を見せ合う場面では、思いを表すための工夫を、一人一人が語ることができていた。授業者が「ちゃんと訳があるのですね。」と認めて、表現の工夫を価値付けていた。振り返りの場面では、友達のよかったことや次に生かしたいところを話していた。互いのよさに気付くことのうれしさは、いわゆる学びに向かう力、人間性につながっていく。こういったことを、図画工作科に限らず学校場面のあらゆるところで授業者は大切にしてきたのだろう。

１－Ｆ　小５年「夜空を彩れ！マイ絵どうろう」　～故郷を絵どうろうで表そう～

授業者：湯沢市立皆瀬小学校　佐藤　靖子
指導助言者：秋田市教育委員会指導主事　黒沢　淳
司会者：湯沢市立須川小学校　長雄　清美
記録者：羽後町立高瀬小学校　小野　裕子
世話人：湯沢市立三梨小学校　池田　亜紀

１．授業者から

【絵どうろう作りについて】

・「湯沢」という地域を学習の中に生かし、ふるさとのよさや、ふるさとと自分との関わりを感じられるように、「絵どうろう」を題材として扱った。

・実際の絵どうろう制作に使われている染料と和紙を材料にした。

・染料では、混色で色の調整がしにくく、明るさや暗さを水の量や重ね塗りで表現しなければいけない難しさがあった。

・試しの時間は実際の表現のために有効であった。しかし、試しの作品の勢いが実際の作品では損なわれてしまった。

【鑑賞について】

・表現につながる鑑賞を意識して研究を進めてきた。これまで、相互鑑賞以外に、身近な美術作品を扱った対話型の鑑賞を行っている。本時は普段と同じ鑑賞スタイルで行った。

・付箋に自分の感じたことを書きため、それを見ながら話す形だったが、徐々に作品を見ながら直ぐに話せるようにしていきたいものである。

・相互鑑賞の場合、作品に対する製作者の意図を伝えた後、感想を交換するようにしている。

・鑑賞を行うことで、以前扱った表現や友だちの作品の工夫、身近な美術作品から得た表現方法などが作品の中に見られるようになっている。表現につながる鑑賞の形ができはじめている。

２．協議

【成果】

・鑑賞の視点を提示することで、造形的な要素（色、形のよさ）をしっかりと意識した話し合いができていた。

・鑑賞カードが工夫されていた。鑑賞する時に子ども同士で付箋に書いて渡すことで、言葉のやり取りだけではなく、付箋をもらう嬉しさもあったのではないか。

・作品の近くで話し合うことで、友だちの意

見を聞きながら見ることができた。そこから見方が広がっていく活動がすばらしかった。

・友達の意図を読み取り、共感的に話を聞く力やよさを見付け伝える力が育っていて日々の積み重ねを感じた。

・子どもの気付きを広げる教師の発問がよかった。

・これまでの鑑賞の活動により、自他の作品の「よさ」「美しさ」を見付けることができていた。

・自分の作品のよさに気付き、「また、やってみたい。」「将来絵どうろうを作りたい。」と思いをもつ子どもが増えた。

・地域の題材を取り上げたことにより、染料や和紙などに親しむことができた。また、試行錯誤しながら、表したい表現方法を探ることができていた。

・自分の作品への愛着と共に、ふるさとの行事への愛着ももつ子どもが多く見られた。

【課題】

・「形」や「色」からイメージをもち、組み合わせるよさに気付いた子どもが多かった。しかし、めあてである「光を通して」に着目して話す子どもが少なかった。

・子どもが付箋に書いたものをそのまま読み合う姿が見られた。キーワードだけを書いて、互いの顔を見ながら話す姿にしていきたいものである。

・交流を促すような視点をもう少し与えると、活発な話し合いができたのではないか。

・グループでの鑑賞に終わってしまったが、全体で一つの作品について鑑賞する場面があってもよかったのではないか。

・題材の最後の時間でもあるので、これまでの学習を時系列で振り返らせ、自己の学びの変化（見方・考え方・感じ方）を実感させたい。

・光を通して見た後で、さらに思いついたことを付け加える時間があると良いのではないか。

・「光を通して作品を見る」というめあてを大切にするために、暗い部屋を使用したり、置き方を工夫したりするのが良いのではないか。

３．指導助言

・子どもの感性を豊かにする方法は、いろいろあり、今回の授業もその一つだった。

・一つの題材で資質・能力を育むのではなく、年間を通して育んでいくものである。

・全体での話し合いの中で教師の問いに対して、子どもが視点に沿った発言ができていた。これが対話が成立していたということである。配慮が必要な子どもに寄り添って言葉を引き出そうとしていた。そんな教師の姿を子どもたちも見て学んでいる。

・光を通して得られた驚きや感動から授業を構成していた。どんなねらいで、どこに目的を置くかで鑑賞の仕方も変わってくる。

・子どもの資質・能力を伸ばしていくためには、批判的に思考する能力をもっと身に付けさせることが必要ではないかと思う。

・図工は自己決定の時間を設けていくのが大切。課題を自分で見つけ解決していく、課題解決型の学習である。

２－Ａ　小３年「お気に入りの　男鹿の色と形」

授業者：男鹿市立船川第一小学校　上田　環
指導助言者：秋田南高等学校中等部教頭　築地　洋
司会者：潟上市立天王中学校　中川　努
記録者：男鹿市立船川第一小学校　後藤　甲子
世話人：潟上市立天王南中学校　近江和佳子

１．授業者から

・図工は、児童の自由な発想や活動を認め、たくさんほめてあげられる教科だと思う。みんなが真っ白な１枚の画用紙からスタートできる。指導者はエッセンスをふりかける。そして作品ができあがっていく。
・今回の題材は、３年生にとってテーマを考えるにあたり経験や知識の不足を補う必要があると考え、総合の学習との関連を図った。校外学習をしたり調べ学習をしたりして、自分の描きたい題材の知識を増やして、作品のイメージを広げてから、図工でそのイメージを形や色や素材で表現することにした。
・３年生になって、「キラキラ光る海はセロハンで表したい」「ゴジラ岩の光はダイヤモンドみたい」「姿見の井戸は不思議さをマーブリングで」など、イメージを言葉で表現したり、それを表現するための表現技法を意識したりするようになったと感じる。
・一人の男子がゴジラ岩のゴツゴツ感を砂で表現すると、同じ表現をする児童が何人も出てきた。個々の発想という観点ではどう評価するのか､真似もＯＫとするのか迷ってしまう。
・失敗（失敗感）を防ぐため「お試しコーナー」を設置したら、児童はよく活用し、安心して取り組むことに効果的だった。
・発想が広がりにくい児童もいるので、「小さな鑑賞会」を時々開き、友達の作品を見たり発表を聞いたりして刺激やヒントを得られるようにした。タイミングについては、活動や意欲が途切れないよう配慮した。

２．協議

○　題材について
・地域のすばらしさを発信しようという動機付けと題材の構成がよい。
・この題材は、子どもたちの日々の生活と結びついているので、「自分の男鹿」という思いがあり、活動意欲にもつながっている。
児童がみんな自分の課題に没頭していた。
・イメージマップを使って、表現したいもののイメージを広げていた。物の様子まで書き留められていた。
・総合学習と関連させた展開がよかった。
・地域の展示スペースに展示するというゴールが明確で、児童の主体的な活動に効果的だ。

○　表現・技法・素材について
・これまでの学習の積み重ねが生かされた授業だった。
・長期的計画的な指導がすばらしかった。
・児童が自分の表現したいことに合わせて、いろいろな技法を自由に自己選択し、使いこなしている場面が多く見られた。
・デッサン力、線描が上手ですばらしかった。秋田の造形教育の積み上げを垣間見たように思う。
・これまで獲得してきた技法を思い出し、すぐ使えるように資料や道具や材料が環境として整えられていた。（素材コーナーや技法コーナーなど）
・砂や藁（地域素材）、毛糸、セロハン、綿など、様々な素材が準備されていたので、児童は試してみたいことがすぐできた。

○　意欲を継続させるために
・自己選択の場面がたくさんあった。地域素材を選び、表現技法を選び・・・これが意欲につながっている。
・教師が机間指導を丁寧にしていた。児童一人一人の声を丁寧に聞いて、ほめたり、アドバイスをしたりしていた。
・教師の言葉かけがとても温かかった。
・学習カードや先生のコメントは、児童が自信をもって次に進んでいく要素になった。
・見取りと価値付けがうまくできていた。たくさんほめ言葉をかけていた。教師個人の価値観を押しつけないことに留意し、児童の発表内容に価値付けをして返してあげることが大切である。
・振り返りは､ただ本時を振り返るだけでなく、次の時間につながっていくような終わり方になっていたのがよかった。

○　課題として

・豊富な素材にかえって迷ってしまう場合もあるのではないか。
・あれこれ技法を使わなくても、絵具で彩色することで線描を生かすという表現もある。
・線描が丁寧で上手にできているのに、上から段ボールを貼ることで線が消えた児童がいて、もったいないあと思った。だが、このまま認めてあげるか、方向を示してあげるか迷う。
・後始末も授業時間内に設定するのがよい。
・表現が苦手な児童へどんなアドバイスをするのがよいのか。
・教師のアドバイス（ほめる・励ます・よりよい表現へ）のタイミングをもっと工夫できないか。一人の児童にかかる時間が長くなる場面があった。
・「小さな鑑賞会」をするのは、近くの友だちより、同じ題材の友だち同士を集めた方が自分のよりよい表現のヒントになったのではないか。
・振り返り場面では、一人の発表（作品）を全員で共有できる見せ方の工夫があるとよかった。

３．指導助言

・いつもとは全く違う状況での授業でも児童が明るく生き生きとした表情で取り組んでいた。子どもの表情は授業の評価や見取りで大切な要素の一つである。その点で今日の授業は満点だった。
・既習事項がしっかり身に付いており、知識・技能がスパイラルに思考力・判断力・表現力につながっている。今日の授業で表現がうまくいかなかったら、また新たな知識・技能を身につけ、新たな意欲につながっていく。
今、授業に求められているスタンダードなものが今日の授業で展開されていた。
・男鹿のよさに気づかせたり感じ取らせたりする活動など、図工の時間だけでは不足の部分を総合的な時間の力を借り、それを色や形でどう表現するかの部分を図工で集中的に学習している。まさに今後、学校に求められるカリキュラムマネジメントが行われている。
・線描がパンフレットの模写になっているとしたら本単元のねらいから外れてしまう。授業者は気をつけて見ていく必要がある。
・振り返りのタイミングの工夫として、本時の振り返りをあえて省いて、次時の最初（めあてをもたせる場面）に設定するのもよい。
・小学校３年でこれだけ多くの表現技法を使えるようになっていることがすばらしい。表現技法を使わせるにあたっては，次の２点に留意してコーディネートすることが大切である。
①児童が選んだ技法がねらった効果と合っているか。
　例えば、セロハンを画用紙に直に貼った児童のねらいは､着色か光の効果だったか。もし、光の効果をねらうなら、クシャクシャにしたアルミホイルの上に貼る方法もある。気付かせたい技法は、児童が自分で選択するように、その手法を使ったものをさりげなく飾っておくなどしてしかけておくとよい。
②選んだ技法は効果的だが、本人の技術が追いつかなくて効果が出ないことがある。なぜその技法や素材を使うのか、妥協することなく児童にしっかり考えさせてほしい。
・クレヨンもねらいによって効果的な使い方ができる。力加減や手の動かし方などによって表現が変わってくる。
・ティーチングよりもコーディネーションが求められている。知識を伝えるだけでなく、知識と知識を出会わせて新しい知識や価値を生み出すようにすることが大切である。
・児童への言葉かけもコーディネーションの一つである。「もっとこんな風にしたら」というアドバイスは児童のやり方を変えようとしている言葉かけになる。それよりも、「あなたは、この方法でどう思う？」ともう一度問い直しをさせることが大切である。

２－Ｂ　小６年「夢の街・大曲　ドリームプラン　その１」
～片面段ボールの面白さを感じてつくろう～」

授業者：大仙市立内小友小学校　佐藤　智美
指導助言者：秋田県総合教育センター指導主事　田森　舞
司会者：大仙市立大曲小学校　三浦　典子
記録者：大仙市立高梨小学校　簗　容子
世話人：大仙市立神岡小学校　菅原　靖

１．授業者から

今回の題材は，総合的な学習の時間での学びや地域の生活の中で抱いた思いをもとに，「こんな大曲になってほしい」という未来の『夢の街・大曲』をつくるというものだ。

本題材の手立ての工夫として，①展示用の地図・実際の地図を舞台とすることで，地図記号や土地の様子からも発想を促したり膨らませたりできる。②技法の掲示・子どもたちが見つけた技法を掲示し，友達が見つけた技法を自分の表現に生かすことができる。③言語活動・特に発想，構想，鑑賞の場面で言語活動の場面を多く取り入れる。④学習形態・自然な形で交流や学び合いができるよう，座席をグループごとにする。このように大きく４つのことを考えてみた。

本時は，自分が表したいものや表し方をより具体的に思い付き，前時までのものに付け足してつくっていく時間。これまでの材料に加え，波の高さが低く，より固い材料も準備した。前回までの様子から材料が柔らか過ぎて難儀している様子が見られたことと，新たな発想・構想が促せると期待したからだ。今回の材料は「固い」という声もあり，早目に出して慣れさせてもよかったか。また，モニターに映して実際に街を歩いている目線で途中の作品を見ることができるようにした。「自分が表したい感じになっているか」という視点で自分の作品を捉え直し，自分なりの思いをもって向かわせたいと考えた。

グループ活動は自然な形での学び合いを期待したが，盛んに話し合っているグループとつくることに没頭しているグループがあった。先生方が見取ったところで，どんな学び合いがあったのか教えていただきたい。接着材としては，両面テープも準備したが，安易に両面テープに走る子どももいる。出来映えが第一ではないが，表し方の「美しさ」にも価値を見いだせるように，日々造形的な感覚を育てていくことが大切だと感じた。

今回の題材で，片面段ボールの面白さは，形や材質感にあり，その点に目を向けさせるために時間をかけたことは,今後材料を自分で選択して取り組む際に役立つのではないかと思った。ただ，自分の思いを実現させていくには，他の材料を使いたいと考えている子どももいるだろうと思い，次回は自分で準備した材料を付け足して作っていく時間にし，より思いを実現させたいと考えている。また，カラーの片面段ボールを使ったので，画一的な色になっている。逆にそれが街としての統一感になるよさもあるが，個々の思いを表現するには，自分で作り，着色し，その色に思いを乗せるというような題材も必要かと感じた。これからの題材で考えていきたい。

協議の視点に関わっては，この題材の成果は，材料としての可能性・技法を子どもたち自身で見いだすことができたこと。そして，どの子どももその子なりに，ふるさと大曲に

対する願いを形に表しているということが成果だと思う。課題としては,「色に思いを乗せる」とか「地域を豊かな色で表す」というような題材を地域の素材や自分の生活との関わりで考えていきたい。

２．協議

○成果

①**場の設定とビデオカメラの演出･･･**児童が主体的に活動するための場の設定がよい。教室中心の大きな大曲の地図に自分の作品を置きながら考え，またつくる。そしてその地図の中で街の住人の目線で作品を見る。最初と最後にカメラを使ったことによって意欲付けとふり返りがしっかりできた。全員が映像を見ながら話したり，聞いたり，自然な感じで学習が共有化されていた。

②**題材のよさと教師力･･･**自分たちのふるさとへの思いが生かされた学習。自分は「こうしたいから,こういう工夫をしたい」とはっきりとした思いをそれぞれが強く持っていた。進んで発表したり，文章でしっかりと書いたりというのは，これまでの積み重ねがあったからこそ。指導者の地域に対する愛情や子どもたちへの支援,コーディネート力,日頃の学級指導の素晴らしさが授業にあふれていた。

●課題

①**材料の吟味･･･**「夢の街･大曲」というテーマとカラー片面段ボールの材質･色が６年生に相応しいものであったか。身辺材料を次回から使うといっていたが，どのように使うのか。他の材料をアイディアスケッチの段階で考えるというのはどうだろうか。そうすると「表したいことの特徴がより表現できる」のではないか。

②**子ども同士の関わり･･･**作ることに集中していたせいか会話は少なかった。ふりかえりカードを書いた後,グループで発表し合えば新たな問いまで自覚できたのではないか。

３．指導助言

①題材について･･･「大曲にあればいいな」「こんな大曲にしたい」という子ども達一人一人の思いや願いがはっきりしていた。材料の片面段ボールの色がたくさんあることによって,夢のある街をイメージできたのではないか。子どもたちの経験や体験も発想にしっかりと結び付いていて,自分から表現したいという気持ちが伝わってきた。また新学習指導要領でも示されているとおり,高学年は学校や地域・社会の一員であると意識し始める時期でもあり,社会と関わろうとする本題材は発達段階に相応しいものであった。

②教師の関わり･･･導入の場面で色についてしっかりと考えさせていた。ビデオカメラを使って街の中を歩くことで，どのような視点で今日つくっていけばよいのかをみんなで確かめられた。ふり返りの場面において，温泉をつくった子どもが「静かさを表現した」と発言。それに対して佐藤先生が「静かさも形で表現できるんだね。」この言葉がこれからの生活にもつながっていくと思う。

③材料について･･･今回は片面段ボールという制限があって,友達と同じ材料を使うことによってこのような作品ができたと思う。他の身辺材料を使うかどうかという課題に対しては先生方が自校の実態にあわせていろいろと試され，考えてみてほしい。

これをきっかけに,地域を取り上げた題材に目を向けて教材開発に取り組んでいければよいと考える。

２－Ｃ　小２年「さわってわくわく　見てはっけん！！」
～ポリポリランドで　たのしくあそぼう～

授業者：由利本荘市立鶴舞小学校　宮田　幸江
指導助言者：秋田市立下北手小学校教頭　大野　一紀
司会者：にかほ市立象潟小学校　関口　琢也
記録者：由利本荘市立新山小学校　大場　則子
世話人：由利本荘市立由利小学校　松岡　直美

１．授業者から

本日は，ありがとうございました。去年から担任している子どもたちである。これまでに，造形遊びは，体全体を使って楽しむという授業を行ってきた。「造形」ということで，色とか形，触り心地にこだわった授業をしたいと考えて今回の題材に取り組んだ。

ポリ袋を結ぶ，切る，繋げるなどの技能面の難しさがあったが，これらのことを事前に遊びを通して練習してから臨んだ。

今日は，子どもの活動へ価値付けをする声掛けに努めた。子どもたちが，自分たちはこんなことができたんだと思えるように声掛けをした。

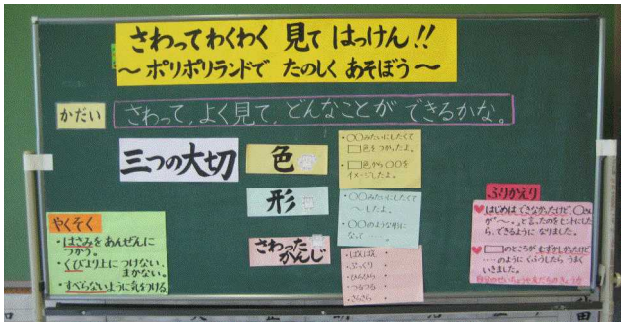
２．協議

【導入・前時との関わり】

○材料と色の関わりが良かった。前時でしっかり「技」を押さえており，迷いなく色と向き合っていた。

○色，形，触り心地の３つの視点は，「三つの大切」導入でも振り返りでも示され，何に向かうかしっかりと授業構築がなされていた。

△造形遊びは，導入でイメージを言わせるのではなく，活動の中で自由に発想させたい。



【教師の関わり】

○「ポリポリランド」。子どものワクワク感を引き出していた。教師との言葉のやりとり→イメージが湧く対話

○子どもたちへの関わりがすばらしかった。教師の細やかな見取り，子どもの声の受け止め方・取り上げ方など対話での支援があった。振り返りでは，ここがすばらしいという点を見事に突いていた。

○子どもの活動の価値付けをしている。

△教師の役割としては，もう少し子どもからの声を引き出したい。

【素材】

○子どもの遊び心を刺激する素材。扱いやすく発想が広がる材料であった。（膨らます・ねじる・重ねる・テープで繋げる・マジックで描く）。

○袋の色を絞り，活動を広げ過ぎない点が良かった。ポリ袋（透明・カラー）の特徴を理解して材料を使い分けていた。

【場の設定】

○子どもが空間に働きかけられるような場の工夫があった。

○光を通す窓側への掲示場所を設定していた（鉄棒，ロープなど）。

△場の設定だが,袋の置き場所を配慮したい。取りに行った時に，他の活動が見渡せる場所だと良かった。

【鑑賞・振り返り】

○じっくりとお互いの作品を見合えていた。自然発生的なグループで活動していたということだが，学級経営がしっかりしているということ。

○鑑賞カードの工夫。視点ごとに色分けしており，子どもは分かりやすく，教師は評価がしやすい。

○振り返りは，造形的な視点「色・形・触った感じ」が明確。

△触った感じはなかなか出てこなかった。

△アニメのキャラクターが出てきたが，どこまで許容するとよいのか。

３．指導助言

・授業の基礎基本ができている。

・子どもとのやりとりがすばらしい。姿勢を低くし，子どもの目線でものを見る。子どもが聞き取りやすい声で話す。めあてを指折りしながら全員がきちんとできるようにしていた。

・状況を見取って，子どもたちのことを考えている。緊張感があった子どもたちに，緊張をほぐしながら安全指導もしていた。子どもたちは，効率よく授業に向かう心の準備が整い，大事なことも確認できた。

・板書で，しっかり約束・振り返りなどの確認している。

・授業規律が徹底されている。音楽を使い，教師の指示がなくても動けるように，活動しやすい環境を意識していた。

・言葉のチョイスが非常によい。「ポリポリランドをおさんぽしましょう」。心を豊かにもって子どもたちに対応できている。

・教師は，ＡＩ（人工知能）では代わりができない職業。五感をフルに使って子どもの状況を見取っていく，そして授業を作り上げていくというのは高いスキルが求められる。小学校では特にその点が求められているし大事にされているのだろう。

・よい発表の後に，「自分も同じようにやっていた人」と挙手させることで一緒に活動した人達の頑張りを共有できた。気持ちに寄り添った指導の具体的な手法が様々なところに見受けられた。

・キャラクターは不可。著作権の問題がある。作ってしまった子どもの気持ちに寄り添うとすれば，「もっと他に作れそうだね」などの声掛けをして新たな取り組みを促す。一斉指導で，キャラクター不可という指導していって欲しい。

・評価が難しい。本時は技能の評価となっているが今日は色を加えての活動。「カラフル＝色」を提示することによって，やはり発想を意図したものになっている。導入で色に対する気付きを取り上げるとよい。カラフルポリ袋を見せるときに，透かして見たとき，重ねて見たときの気付きを取り上げてから発想に繋げていけば評価できる。技能については，写真を利用する。子どもが十分に活動していれば発想と技能の両方の評価は可能である。

・活動中に，鉄棒の場所できれいな色にポリ袋を重ねている子どもがいた。本人は色の重なりを考えているのではなかったが，鑑賞時は，色の重なりの美しさに気付いていた。活動の中で，子ども同士の関わりや教師の言葉掛などによって新たな気付きに繋がる。学びの深まりである。深い学びが求められているが，「関わり合うことで学び合う」ということを意識して授業を構築していって欲しい。

２－Ｅ　小１年「きって　つないで　どんなかたち？」かみからうまれた　わたしのぼうし

授業者：秋田大学教育文化学部附属小学校　佐々木　恵
指導助言者：秋田県教育庁北教育事務所指導主事　鈴木　正樹
司会者：秋田市立御所野小学校　大野由加里
記録者：秋田市立勝平小学校千秋分校　村山　祥子
世話人：秋田市立下新城小学校　岩野ひとみ

１．授業者から

本題材は、立体工作の題材だが、全体計画の５時間のうち、始めの２時間を材料体験の時間として造形遊びを位置付けた。１時間目はより形に注目させたいという思いから白い紙で活動を行った。２時間目の本時では、色も意識できるようにカラー造形紙を使い、立体造形の面白さに気付く力を身に付けさせたいと考えた。今後は、造形遊びから帽子をつくる活動にしていくが、造形遊びと工作のねらいや評価の点から活動のつながりに難しさを感じた。

接着には、主にセロテープとホチキスを用いた。接着に時間をかけずにどんどんつくっていってほしいという思いからだったが、子どもたちの手の力が弱く、ホチキスをうまく扱えない子どもがいた。この後、立体の作品として帽子にしていく時には、美しさも意識しながら、自分の満足のいく形を目指してつくっていけるようにしたいと思う。

２．協議

○分かりやすい課題提示により、子どもたちは発想を自由に広げ、様々なものをつくることができた。「もっと」というキーワードがよかった。

○これまでの材料体験によって、はさみやホチキスなど道具の使い方が身に付いていた。

○ICTの活用が効果的でよかった。デジカメで撮った写真を大型テレビで見ながら、前時の活動を想起させたり、本時の表現の過程を振り返ったりする場面で、分かりやすかった。

○たくさんの材料（紙）や鏡、グループ毎の用具など準備・場の設定が工夫されていて、子どもたちがのびのびと活動していた。

●課題提示のときに、「ひねる」をもっと強調するような提示の工夫があれば、立体表現につながったのではないか。ひねると紙の（裏の色が見えて）色が変わるなどとおさえると子どもたちに分かりやすかったと思う。

●白い紙での造形遊びと、本時の色の紙を使っての造形遊びとのねらいの違いをはっきりさせた方がよかった。

●造形遊びと帽子づくりの活動とのねらいにギャップを感じた。造形遊びであれば、帽子とつながらないようなものでも取り上げてほめるべきだったのではないか。

３．指導助言

子どもたちが夢中になって表現に浸り、つくり出す喜びを味わっていた。特に低学年においては、表現と鑑賞が一体となりながら楽しく活動することが大切である。「きって、ひねって、つないで」様々な形を思いつきつくり出す姿、自分でつくったものを先生や友達にうれしそうに見せる姿が見られ、喜びいっぱいに活動する子どもたちの感動する声が

聞かれた。豊富な材料の準備や教師の働きかけがあったからこそである。造形遊びとしての、「つくり、つくりかえ、つくる」という特有の学びが出ていた授業だったと思う。

学習指導要領が改訂され、教科の目標の柱として「学びに向かう力、人間性等」が位置づけられた。こういった授業・指導を通して、低学年の目標である「形や色などに関わり、楽しい生活を創造しようとする態度」が養われていると感じた。

ともに学び合い、高め合う姿が見られた。自分や友達の表し方や感じ方のよさに気付くことができる活動だった。今日の授業では、グループになって、お互いに刺激し合い影響し合いながら、学びを深める姿や、思いついたことを表現するために創造的な技能を発揮する姿があった。そうやって、自分と友達の違いやよさを感じたり、個性を尊重したりすることへと結びついていくことが大切である。

教師の手立てとして、それぞれが主体的に材料や場所と関わり、自分が感じ取ったことや考えたことを大切にする。そして、友達と自然につながって展開していくようにすることが大切になる。今日の授業では、材料、用具、場所を工夫することにより、子どもがそれらを共有できるようにしていた。活動中は自由に交流ができるようにし、自分や友達の表し方や感じ方のよさに気付くことができるようにしていた。

教師の子どもへの働きかけがよかった。「ひねる」ことがクローズアップされていたが、紙を細く切ることで「ひねる」行為がやりやすくなるということを全体に紹介していた。

写真を撮られることで、子どもたちは認められ、価値付けられることになるので、写真を撮ることは有効な働きかけだったと言える。子ども同士の学び合い・高め合いにつながったのではないか。

造形遊びの２時間から、絵や立体に表す活動につなげるという位置付けについては、考えなければならない。この授業は、絵や立体に表す活動として設定されている。表したいことを見付けるために、材料に親しむための時間として設定されたはずだった。実際の活動は、子どもたちに造形遊びとしてとらえられていたのではないか。教師の中に迷いがあると、指導が不十分になってしまう。２時間を造形遊びの題材として設定して、その後で絵や立体の工作の題材として設定した方が自然だと思う。ねらいがはっきりして指導がしやすくなる。または、佐々木先生が、帽子づくりの意欲を高め、つくりたい帽子のイメージをもたせるための時間としたかったなら、造形遊びという言葉を使わないで、「材料と親しむ時間を設定し」などと書き表した方が、育成すべき資質が明確になり、指導すべきことがはっきりするのではないかと思った。

今日の授業の中で、佐々木先生が行った手立てについて、感心するところがたくさんあった。帽子づくりにつなげるために、子どもの思いつきを意図的に取り上げて全体の場で紹介したり、絵本を読んだ経験を想起させてそれを帽子づくりにつなげたりしていた。振り返りの場面で、デジタルカメラを活用し、子どもたちの学びを全体で共有して振り返っていた。最後には、「どんな帽子をつくろうかな」「そのためにどんな工夫をすればいいかな」という次につながる思いをもった子どもの様子が見られた。

本研究大会の視点は、新しい学習指導要領の改定の趣旨を踏まえた授業を目指すためのものであり、今日提案された授業が、参観者の今後の授業づくりを考えていく上で大変参考になるものであったと思う。

２－Ｆ　小３年「みんなおいでよ！わたしたちの○○しょう店がい」

授業者：秋大教育文化学部附属小学校　　進藤　　亨
指導助言者：秋田市教育委員会指導主事　黒沢　　淳
司会者：秋田市立勝平小学校　渡部　英明
記録者：秋田市立旭北小学校　横山雄一郎
世話人：秋田市立旭川小学校　工藤　圭文

１．授業者から

本時案では、お店を並べることで自分のお店にもう一工夫加えて完成度を高めたいと考えていた。しかし、一人一人の作品を見ると思いの外仕上がっており、これ以上お店に手を加える余地はあまりないと感じた。そこで、悩んだ末に本時では「商店」から「商店街」へと広げる活動に変えて提示したが、子どもにとって「商店」と「商店街」の概念は違うものであったため「商店街」のイメージの共有化ができていなかった。それによって子どもたちの活動が停滞してしまったので、もう少しグループの中で共有化を図る時間を取るなりして、本時の活動に入ればよかった。イメージを持たせられなかったために活動が停滞してしまったのがよくなかった。

２．協議

○場の設定がよかった。店を並べることで全体の様子がよく分かった。動画で撮影することで、意欲を高めることができた。

○子ども一人一人を見取りながら教師が丁寧に関わっていくところがよかった。自然な対話ができていた。

○材料が豊富に用意されて材用の特性を生かしている姿に積み重ねを感じた。

○題材名や総合的な学習の時間とからめているところがよかった。

●ゴールが共有できていなかった。子どもの実態の捉えがしっかりできていればめあてやイメージを共有することができたのではないか。

●子どものアイディアを共有できれば、自己肯定感につながったのではないか。

●似た店どうしを一緒にしてタイアップさせるなど、グルーピングの工夫がもう少しあってもよかった。

３．指導助言

図画工作、美術の学びというものは創造の過程であり、小学校以前から始まって大人になってからも続くものである。

今日の子どもたちの活動の姿を見ていると、活動を通して様々な資質・能力を身に付ける場面に出会うことができたように思う。

例えば､川をつくり始めた子どもがいたが、それに対応して魚や橋をつくり始めるなど、協働的に学ぶ子どもの姿をさらにどう高めていけばよいのかを授業者が子どもから学ぶ機会も多くあったように思う。

これまでは、できあがった作品を元に語ることが多く、課題として取り上げられることも多かった。もちろん完成した作品も大切であるが、学びであるからこそそこに至るプロセスが重要であるという認識を再度確認しなければならないと考える。

本時は、各自が店を持ち寄って商店街をつくるという授業であったが、活動の中で、橋や歩道などの新たな関係性をつくっていくという場面が随所に見られた。このように、子どもが友達と学びや活動を共有する過程の中に評価すべき姿を見せてくれたと考える。

授業者の先生は、概念にとらわれない表現を目指しているということや〔共通事項〕の視点からの意識をうかがうことができた。しかし、教材の特性や材料を組み立てていく上での用具などを生かし切れていないように感じる場面も少なからず見受けられた。

試す、眺める、眺めてからまた試すといった体験を充実させていくことが〔共通事項〕の視点からの授業づくりを充実させていく上で大事であると感じさせられた。

子どもの実態に対応して本時は修正を加えたとのことであったが、そうであればなおのこと教師が子どもと共有すべき課題を丁寧に扱うべきであったかと思う。子どもがつくった課題であったのか、教師が示した条件であったのかが曖昧であったのではないだろうか。教師の指示や誘導的な発問が多いと、子どもから考える力を奪ってしまうことがある。子どもに資質・能力を育むには、課題や発問を吟味することが大切であることを確認したい。

しかしながら、子ども達の様子を見ていると、実に楽しげに自分たちの商店や商店街をつくっていた。つまり、こういった協働的に学んでいくという活動が子ども達にとって魅力的な学習であるということを踏まえ、教材にどのように生かしていくかという点で学ぶべきことが多くあった。

未来の予測が困難といわれるこれからの社会では、答えが一つではない課題に向かうばかりではなく、時には答えの無い課題に取り組んでいく機会も増えていくと考えられる。しかし、子ども達は自分で答えを見つけ出していかばければならない。図工・美術の素晴らしいところは、答えが出たら終わりではなく、その先がいくらでもあるということではないだろうか。追求のしがいのある題材や課題と出会えた時、よりよい答えを見出すことができるという気持ちを子ども達にもたせることができる授業を我々は目指していかなければならない。

今日の授業を協議し、図画工作科における学びの深まりや交流の在り方について確認できたことを共有することで造形教育がより一層発展していくことを願うところである。

１－Ｇ　中２年「ふるさとを包む　～アメッコ市のパッケージデザインで社会と繋がる～」

授業者：大館市立田代中学校　菊池わか菜
指導助言者：由利本荘市立岩谷小学校教頭　田村　稔
司会者：大館市立東中学校　佐々木亜希子
記録者：北秋田市立森吉中学校　沼田　桃子
世話人：北秋田市立鷹巣南中学校　深川　千幸

１．授業者から

パッケージデザインをすることで、社会とつながる経験をさせたいと思い、本題材を設定した。美術に関しては、苦手意識を持っている生徒も多い。アンケートの結果からは、「生活の中で役に立たない」と感じている生徒も多かったことから、その部分について考えさせたいというねらいもあった。

あめっこ市については、年々お客さんが減っているという現状がある。学校のある地域の祭りではないが、幼いころから祭りに足を運ぶなど、生徒の中ではなじみも深い。飴自体は珍しいものではないため、パッケージを通して祭りを盛り上げる気持ちを育みたいと考えた。

本題材の一時間目には、地元でデザイン事務所を立ち上げている石山さんに話をしていただいた。当初は、「ターゲット」や「商品の情報」を中心に、と思っていたが、それに「発展性」や「話題性」、「イメージ」を加えた５つのポイントを提示してもらった。しかし、そのことを、生徒が実感を伴ってすぐに活動に生かす、というのは少し難しかったため､既存のパッケージを例に鑑賞を行った。５つのポイントについて細かく見ていくことで、理解を深めることができたが、全体を見直してみると、この活動をもう少しコンパクトにできれば、その後の制作等にもう少し余裕を持たせることができた。工夫が必要だった。

本時は、他者を意識させるための時間とした。仲間の意見をもらって再考していく活動は、一年時には取り組めていなかったため、今回新しく取り入れた。一斉に見合って付箋を貼っていく方法もあると思うが、経験から必要感が感じられなかったため、今回は班ごとに行った｡具体的なアドバイスを促すため、自分のテーマを相手にしっかりと伝える時間を設けることにした。中には、すでに構想がかたまっている生徒もいたため、必ずしも手直しをするということではなく、自信にさせていく方向で進めた。

２．研究協議

＜良い点＞

・めあてになる言葉を生徒から拾いあげていたことで、本時の課題が生徒の中に残ることにつながっていた。
・地元の人の講話なども取り入れていて、社会とのつながりを感じることができた。
・地域のこれからを考える上で、とてもよい題材であった。
・生徒と先生の関係性のよさが伺えた。
・授業の雰囲気がよい。生徒の姿勢や授業のルールもきちんとされていた。
・話合いの内容が具体的で素晴らしい。
・教師が参考作品を準備したことで、生徒がどうするべきか考えやすかった。話合いの

活性化にもつながった。
・生徒の進みに合わせて様々な用紙を準備していたのがよかった。

＜改善点＞
・あめっこ市から、環境や社会、ふるさとを見つめる視点とどうつなげていくのか。
・発表の声をもう少し元気よくさせたい。
・色、形、文字を話合いの中で意識させ、もっと活用することができたのではないか。
・今後、この作品はどうなっていくのか。ゴールはどこになるのか。
・美術として、どのように伝え、どのように生かしていくのか？
・包み方や開き方にも視点を広げさせたい。
・立体的に制作するとなると時数が厳しいのではないか。もっと制約を設けてもいい。
・この後も、意欲をもたせ続けながら制作に取り組ませるために、デザインから立体へと、うまくつなげさせたい。

＜授業者から＞
・発想をどんどん広げさせたいと思う反面、そうなると現実的でない部分も出てきてしまい、使う素材など、あらかじめ何らかの基準を定めておく必要があった。
・完成後の作品は、展示する予定である。大館市では今後、市民が利用できる施設の建設も予定されているため、そういったスペースの活用も視野に入れつつ、石山さんと相談をして決めていきたい。

３．指導助言

デザインは、ゴールを示さないと広がってしまうので、範囲を決める必要がある。

デザインの題材において、最終的にどうしていけばいいのか？ということについて、今回の授業で提示してもらった。今後、各校で取り組んでいく上でのめやすとなったのではないか。教師側がやりたい、だけではなく何を学ばせたいのかが大事。

新学習指導要領の表現の目標の中には「イ（イ）～伝達の効果と美しさなどとの調和を総合的に考え、表現の構想を練ること。」とある。今回の授業はまさにその部分だった。また、学校目標にある「ふるさとの大事さ」にも合っている。大会のテーマに「私を問い、私を発信する」とあるが、ここに関してもアドバイスしあう場面で深めることができた。

秋田には、秋田犬・バターもち・樹海ドームなど、ふるさとを題材に取り入れられそうなものは色々とある。本題材は、どの地域にも当てはまるもので､参考となるものだった。

本時は、今日、生徒が何をすればよいのかが明確であった。めあてを生徒から出させたのも良かった。いろいろなテーマを与えて慣れさせていくことも必要であると思う。分科会の中でも出された通り、やはり最後にどうしていきたいのかが重要。主体的な活動になるのはよいが、どこまでやるべきなのかを教師側がコントロールしていく必要がある。

ふるさとのよさに気付き、地元に就職をしたり、県を代表したりする子どもを育てていきたい。

１－Ｈ　中３年「音を感じて」～ふるさとの音を、形に、色に～

授業者：仙北市立神代中学校　　新目麻衣子
指導助言者：秋田県教育庁南教育事務所仙北出張所
指導主事　熊谷留美子
司会者：仙北市立角館中学校　武田　淳子
記録者：大仙市立太田中学校　斉藤佳奈子
世話人：大仙市立大曲中学校　佐藤　朋子

１．授業者から

神代中学校赴任３年目。この地域は、抱返渓谷や田沢湖の湖、角館の祭りなど、自然にも文化にも注目すべき点が様々ある。劇団わらび座などとも連携し、地元のよいところを生かした学習ができると考えていた。

３年目の付き合いになる生徒たち。美術への興味関心の高い生徒が多い。一人ではもちろん、グループで賑わいながら作ることも好きなので、動きのある題材を設定するよう心がけている。毎年、年に１題材は共同制作を設けてきた。

今回は、音に焦点を当て、イメージや色などを抽象的に表現することを切り口とした。指導に当たっては「何を伝えたいか」に重きを置いている。材料は、加工のしやすさからスタートは紙にしたが、生徒の要求から、紙以外の材料も増やしていった。

グループでの作品構成のすり合わせが難しかったが、根拠をもって話し合う過程で生徒同士が納得し合い進めてこられた。グループは表現したいことをもとに編成したため、男女の偏りはあるが、生徒の同意を得ている。

本時は、話合いをもとに自分たちの作品をよりよくすることを目標としていたが、作品の大きな変容はなかなか見られなかった。制作時間２５分という短さの中で変容が現れるのを待つことで、まとめの時間が足りなくなってしまったところは反省点である。

２．協議（良かった点 ○、改善点 ●）

○生徒が生き生きと主体的に活動していた。

○題材がいい。地域の魅力を取り上げることでふるさとへの愛着が増す。

○音を形や色彩に表現していくという高度な題材だったが、共通事項を押さえて進めていることがワークシートや丁寧な学習課題の提示、壁面でのヒント、資料、そして子どもたちの活動から伝わった。それらから発想・構想段階での丁寧な支援も見て取れた。

○グループ制作で、社会で生きるコミュニケーション能力が自然と育まれている。班でイメージを伝える際、難しいところにも話し合いながら乗り越えようとしていた。

○生徒へ提示するための準備が整っており、表現の幅が広い。生徒は自分の価値観を大切にうまくまとめていた。

○生徒が交流することに慣れている。先生に耳を傾けながらも自然と隣同士で呟き出し、学び合いの素地ができている。

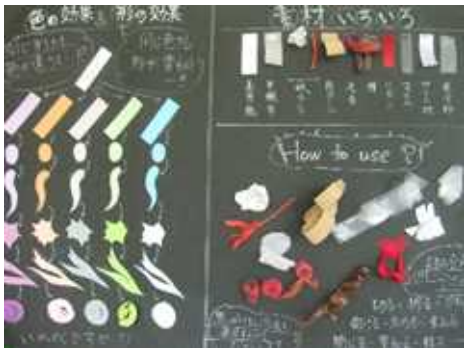
○教室に入った瞬間作品が並べてあり、圧巻。これまでのものにできたのは先生のご指導と３年間の積み重ねがあってのこと。

○この授業では音を隠喩で捉えている。ふるさとの印象的な場面の事象を「音」として捉え表現しようとしている。教師だけではなく生徒もその捉えで学習を進めており素晴らしい。祭りの凛とした感じ、雪の溶ける音などを色の強弱などで表現しており、「音」を豊かに捉えて表現していると感じた。

●一人一人の評価を的確に行えるのかが疑問。班の中での力関係、他の生徒にひっぱられてしまう生徒もいるのでは。

●技法について。子供たちで発見していく側面がもっとあっても面白かった。

●もう一度実際の音を聞いてみて、今の作品と比較しても良かったのでは。擬音語で伝え合うには限界もある。
●本時の中で、個の思考→共有すり合わせというステップがあるとよかった。
●全体と部分に分けておろしてもよかったのでは。
●普段とは違った教室環境の中であるが、最後、発表が聞こえない場面もあったので、集合して共有させるとよかった。
●生徒が使命感をもってこの題材に向かうことができると、ふるさと教育としてより意義深いと感じる。まとめる際に「地元の良さを」というところに触れるとよいのでは。これからの授業で是非。



３．指導助言

今日の授業では、生徒たちが、完成間近の自分たちの作品を、より魅力的にするために熱心にアイデアを出し合い、非常に意欲的に制作に向かっていた。

生徒たちは、これまでの経験から、一人一人が持ち味・個性を生かして、自分たちの主題を協力して表す創造活動のよさを理解している。

「ふるさとの音」から主題を生み出し、形や色に表わすという題材。ふるさとへの思いをそれぞれが見つめ直すことができる。ふるさと、材料、ともに活動する友達、地域の人々などたくさんの対象や事象、人々と関わりながら、思いを表す学習過程を通して、生徒一人一人が自らの学びの深まりを実感できる。

本時は、表現の構想を練る資質・能力を伸ばすことをねらった授業。完成間近の自分たちの作品を「より魅力的にすること」を目指し、「音が聞こえるか」と「問い」を投げかけ、鑑賞の活動と関連付けた。形や色彩など造形要素の視点から自分たちの作品や他の班の作品を見つめる活動を取り入れたことにより、学習の見通しとつくる視点をもたせていた。

考えたことや感じたことを言語化しておくシート、学習課題に沿って自分の活動を振り返る場の設定など、資質・能力を伸ばすための手立てが多様に講じられていた。

秋田県造形教育研究会では、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、図画工作科、美術科ならではの視点で、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現する実践研究を重ねてきた。今回提示された題材のように、「造形的な見方・考え方」を働かせ、表現や鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させる学習の充実や、題材のまとまりを見通した授業のデザインが授業改善の鍵となる。

新目先生の普段の美術室経営をはじめとする校内の環境づくりは素晴らしい。美術室に入った瞬間に、「美術は何を手掛かりに、どのように学ぶ教科なのか」口で説明しなくても、生徒が感じ取ることのできる工夫がある。我々美術教師こそ、「造形的な見方・考え方」を働かせて、そのような環境をつくる資質・能力を発揮したいものだ。

神代中学校は、校訓に創造・根気・協力を掲げている。生徒たちは、いつもと学ぶ場所は違っても、神代中の生徒として、創造活動に取り組んでいた。よりよい表現を目指し、粘り強く、協力して活動する生徒の姿は、よりよい自分を創造しようとする姿そのものであると感じた。

「発信」ということで、この後、学校外での展示の計画もあるとのこと。地域の人々との新たな交流から、更なる自尊感情や自己有用感の高まりが期待できる。

１－１　中３年「羽後く！」羽後中発・箸置きを町のお店へ！

授業者：　羽後町立羽後中学校　　佐藤裕理子
指導助言者：秋田県教育庁中央教育事務所由利出張所
指導主事　菊地　邦彦
司会者：湯沢市立山田中学校　　仙道真理子
記録者：湯沢市立湯沢北中学校　高橋　香理
世話人：湯沢市立稲川中学校　　佐藤　秀実

１．授業者から

公開授業は汎用性があることが望ましいと常々考えており、今回の授業についても率直な意見をいただくとともに、先生方の授業づくりの一助にしていただければありがたい。

前時までの２時間の授業で、生徒は、様々なデザインの箸置きを鑑賞して、箸置きの文化や機能に加えて、「箸置きの役割」、「形」、「素材」について構想を深めた。形や素材は、最初は生徒が考える羽後町の魅力や特産品を基に考え、その後、協力していただいた３件のお店からの要望を基に構想を深めていった。お店からの要望は、「店のロゴマークの形を取り入れ、素材は繰り返し使えるもの」、「お客さんが気軽に持ち帰れるもの、お店で提供する行事食に合う季節感のあるもの」、「特産品を表したもの」といったものがあった。中には「まとまりのあるもの」という要望があり、「まとまり」のある箸置きとはどんなものかについて、参考作品を鑑賞しながらグループで意見を出し合って考えたこともあった。

題材設定の理由は、美術と生活のつながりを意識している生徒が少ないという現状から、食に関する産業が多いという町の特徴を生かせる箸置きを選んだ。構想と形を行きつ戻りつしながら形を修正できるように、可塑性の高い油粘土を使用した。本授業では、生徒達が活動内容を明確に把握していたため、指導案の指導過程１と２の順番を変え、めあてを考えるというところを短縮した。

２．協議

○よかった点

・生徒にとって必然性のある題材であった。
・地域の生活に触れて、題材ができたのがすばらしい。
・授業の組み立てがよかった。最初は自由な発想で、その後に店の要望を踏まえてデザインするという流れがよかった。
・使用する人がお客さんとお店の人という具体的な視点が示されて、アイディアを練るために効果的だった。
・可塑性のある油粘土は、試行錯誤しながら形を考えるのに適していた。
・生徒同士、教師と生徒の関係性がよかった。
・時間の設定、情報機器の活用がよかった。
・教師の発問がわかりやすく、その発問で生徒が思考を深めていた。

○課題

・制作中に、他の素材を試したり、店の紹介をするなどといった仕掛けがあると発想がさらに広がると思う。
・一つだけでなく、複数個同じ形の箸置きをつくることで発想が広がるのではないか。
・教師の仕掛けが縛りになって、発想の広がりを制限しているのではないか。
・モデリングのための油粘土だから、この段階では一つの形にこだわらず、様々な形を

試してみることで次の時間につながる。
・一つに決めず、複数の素材に触れさせる。
・グループの人数のばらつきが話合いの支障になっていたように感じた。対話の場づくりの工夫が必要だ。
・羽後牛、羽後豚の形をそのまま表現するのではなく、その要素を取り出してデザインすることで表現は広がる。
・交流の必然性、お店の人の願いは叶えられているか、自分の課題などを考えさせてから交流するとさらによかった。

３．指導助言

本授業において、これから授業づくりの参考となることの一つは、「魅力的な題材の提示」である。題材は育成する資質、能力や子どもの実態を考え、学校の実情に応じて設定するものであり、魅力ある確かな題材は子どもの資質、能力を育てる。現在、全国的な課題として、生活を豊かにする美術の働きについての理解になかなか至っていないことがあげられるが、本授業はこの課題に正面から向き合い、その改善の具体的な事例といえる内容であった。「羽後く！羽後中発・箸置きを町のお店へ！」という題材名もよく、自分の作品がふるさとのよさを発信し、地域の活性化に一役買うという、この題材に、生徒達は俄然やる気になったであろう。指導者の題材構想が、生徒達のやる気に火を付け、生徒達の学びを支えていた。このような授業は羽後町でしかできないのではなく、他の地域・学校でも工夫次第でできるものと思われる。

二つ目は、「効果的な言語活動」である。新学習指導要領においても言語活動の益々の充実が求められている。しかし、それは教科の特質において、単元や題材の内容や時間のまとまりの中で意図的・計画的に位置付けられることが大切である。そういった意味で、グループでの話し合い、そして油粘土を用いたアイディアモデリングなど、すばらしい言語活動が取り入れられており、それぞれがねらいに迫るための有効な手だてであった。また、造形的な視点を踏まえながら技能面をしっかりと子どもたちに意識付け、さらに使用する人の視点としてお店の人の視点も意識させていた。現実的で明確なその視点が、子どもたちの話合いを充実したものにしていた。アイディアスケッチは美術ならではの大事にしたい言語活動であるが、本日は注目したいのはアイディアモデリングということであろうか。まさに美術科で大事にしたい言語活動であった。これらの言語活動が有効に機能したことにより、造形的な見方、考え方を働かせて学び合う子どもの達の姿があちこちで見られた。

ここにあげた二つのことは、生活や社会の中の美術と豊かに関わる子どもの姿であり、資質・能力の育成の具体であり、そういった意味でも、提案性の高い授業であった。美術の授業は自己実現の場である。子ども一人一人が試行錯誤しながらつくったり表したりして自分の思いを実現していく時間であり、みんなでそれを認め合える時間でもある。授業の最後に、友達と作品を見合って、わあ～と歓声をあげる瞬間があったが、まさに自己肯定感、自己有用感の醸成を目の当たりにしたようで、美術教師である我々は大きな役目を担っていると改めて感じた。

これからの時代は、用意された答えのない予想困難な時代と言われている。答えは自分でつくり出す時代であり、主題を生み出し、発想し、構想を練る力を育てる造形教育への期待が大きい。社会が求めている子どもの資質・能力を美術の力でおおいに伸ばしていこうという思いを、参加の先生方と共有できた授業であった。

２－Ｇ　中１年「私を支えてきたもの」～チョークで描く私の世界～

授業者：秋田市立城南中学校　　土門　正佳
指導助言者：秋田県教育庁南教育事務所仙北出張所
指導主事　熊谷留美子
司会者：秋田市立勝平中学校　　佐藤　廣子
記録者：秋田市立秋田西中学校　築地　亜紀
世話人：秋田市立山王中学校　　笠原眞奈美

１．授業者から

中学生になった今、自分自身と向き合い、その成長過程を振り返り、自分を形づくってきたものをテーマとする題材である。

チョークは文字を書く以外の使用法がなく、毎日目にしていながら、生徒が手に触れることはあまりない。しかし、定着液を使うと保存可能で、絵を描く素材になる。この発想の転換や驚きをねらい、チョークを描画材に選択した。パステルに比べ柔らかく、指で自在に混ぜたりぼかしたりできるため、生徒は大変興味をもって学習に取り組んでいる。

発想の段階では、家庭、地域、秋田、学校での出来事などを視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚で感じたことと共に振り返り、その中から自分を支えてきたものや、自分を形成してきたものを選んでテーマを決めさせた。

試作後、黒ボード、または小さい色画用紙に描いて貼るという方法で制作を進めている。具象と抽象のどちらも取り入れ、表現に幅をもたせた。

チョークの基本技法はいくつか紹介したが、その後は生徒たちが考え出したものを全体に紹介した。友達の技を取り入れながらよりよい作品にしようという姿が見られた。

なりたい姿をイメージして加えたり、額部分をつくり描き加えたり、テーマに関連するものを貼ったりして仕上げる予定である。

２．協議

・安価で手に入りやすくチョークという素材のおもしろさ、様々な技法を生徒自らが考えているところがよい。１年生にとっては難しいテーマだったがそのための手立てがきめ細やかだった。構図が似ていたので、奥行き、天地、余白などを工夫させるとバリエーションが増えるのではないか。また、「未来へのエール」「感謝する心」などをテーマにすると、プラス面で考えることができるのではないか。

・思い思いに制作していた。同じ条件の中で、はみ出したり、切って貼ったりと工夫していた。ハートや花火の工夫の提示は生徒が考えられるようにしてはどうか。１年生なので、「今頑張っていること」「心の中」などをテーマすると発想が広がるのではないか。黒以外の紙の選択があるとよいのではないか。

・振り返りを共有する時間をもう少し多くし、複数の生徒の発表を共有できると次時に生かせると思う。今回のようにだんだん明るい段階に表現する経験はないと思うので、前段階での練習があればよいのではないか。

・課題の把握が１年生にとって難しい。また、生徒の交流場面では、もっと言葉でやりとりさせてはどうか。導入部での先生の話は分かりやすく温かいもので、生徒は安心して制作に取り組むことができていた。

・チョークで様々な技法を生かし制作することは、すべての子どもに取り組みやすかった。参考作品や掲示物が手作りで温かく、先生の人柄や生徒との関係性のよさが感じられた。長方形のボードを変形させるなどの選択の幅があってもよかったのではないか。

・先生が自己開示したり、生徒を前に集めて話したり、学習課題を一部隠したりするな

ど、生徒のやる気を引き出す方法を参考にしたい。ワークシートの「Ｎ，Ｅ，Ｓ」の意味は？土門：「Need」もっとできそう、「Excellent」すばらしい、「Satisfaction」満足、○△×にせず、「うまくいかなかったけど、満足」「よくできたけどもっとできそう」など、自分を振り返り評価する方法をとっている。

・「聞く」「待つ」のバランスが絶妙だった。ワークシートへの書き込みのレベルが高かった。掲示物や提示の仕方のアナログ感に物づくりや手仕事のよさを感じた。
・先生の話術に生徒は引き込まれていた。意見交換の場面では、話合いのポイントを提示するとよかったのではないか。１０歳からの数年間とか、中学生になってからの数ヶ月に限定してもよいのではないか。ニョロニョロ、ゴワゴワなどの表現があり、今後の抽象作品への導入につながる。
・主題を表現するのはチョークでなくても、パステルや色鉛筆でも可能だったと思う。主題と画材のどちらがメインとなったのか。土門：チョークは、描いていく中でいろいろな気づきがあり、技を生み出していける画材だと思った。試作２枚の中で、伸ばす、消す、混ぜる、てんてんで描く、ずらすという５つの方法を提示することで、生徒自身が様々な技法やその効果に気付くなど､表現方法に幅のある素材だと感じた。その効果を生かしてテーマに迫った。
・文字をデザインに組み込む場合は、文字の意味も抽象表現させてもよかったのではないか。定着材は使用の技を生徒に伝授して数名で分担してやらせてもよい。
・ワークシートのコメントに温かさを感じた。具象も抽象もどちらも認め、子どもの思いを否定しない、教師と生徒の関係がよい。意見交換後の変化を見たいと感じた。

３．指導助言

チョークを手に、それぞれの思い描く主題を試行錯誤しながら取り組んでいた。自分を支えてきたものは何かを考えて主題を生み出すことは城南中学校のキーワードである「誇り高き城南生」を意識し、この後の生活につなげていくことができるのではないか。塗ったときの色味や線の感じなどを味わいながら、チョークが持つ独特の表現で自分の主題を表す活動を通して学びの深まりを実感できると思う。生徒が自らの主題を表すためによりよい表現を工夫するという資質能力を伸ばすことをねらった授業で、参考作品や先生のトーク、鑑賞の学習との関連づけ、学習を振り返るカードの観点の与え方等、手立てが講じられていた。一人一人が自分の創造の世界で発想と構想を繰り返し、試行錯誤しながら創造的な技能を生かし､活動に没頭していた。

しかし、参考作品の提示、鑑賞のタイミングなどが有効でない場合もある。どのようなことを学ぶのか見通す場面や思いついたことをどんな風に表すのか考える場面では、生徒が発想構想する機会を奪うこともある。主体的、対話的で深い学びにするためには単元や題材の内容のまとまりをどのようにするのか、授業デザインが必要がある。題材で何を学ぶのかをどのように生徒に伝えるか、教師が教えることと、生徒自らが考えることを題材のどこに設定するのか、友達と学び合う活動をあえて設定する必要があるのか、あるとしたらどこなのかを授業デザインしていく。また、それが目の前の生徒たちとつながっているのか常に検証していかなければいけない。この生徒たちがこの題材での学びをどのように生かしていくのか、自分の思いを表していくという学びは、他の教科にも生かされていくはずである。

２－Ｈ　中２年「自分の思いを形に」～空間や材料を生かした立体表現へ～

授業者：由利本荘市立西目中学校　　安保　朋子
指導助言者：秋田県教育庁中央教育事務所由利出張所
指導主事　菊地　邦彦
司会者：由利本荘市立矢島中学校　　赤川　祐輝
記録者：由利本荘市立大内中学校　　田所　史世
世話人：由利本荘市立本荘東中学校　山下　奈知

１．授業者から

テーマや自分の内面から発想したことを、色や形、材料の組み合わせで表現させたいと考え、この題材を選んだ。

２．協議

◆よかった点は、生徒の学習カードに制作の記録が細かく描かれており、前時からの変容が分かりやすかった。

◆評価が難しいのではないか。形や光、材料などの工夫から、評価をどのように生かしていくのか。

○評価の仕方は、学習カードにその都度、ふり返りや次時の計画を書かせ、毎時間の画像を撮影して載せている。構想は、イメージを言語化して書かせている部分もある。難しかったのは表現の部分ではなかったか。授業内では、できるだけ生徒と関わるようにしており、完成イメージと生徒の様子から、なぜその色になったのか、何を表したかったのかなどを確認し、そうしたやりとりを織り交ぜて評価している。

◆抽象化について、難しいテーマを、豊富な材料が支えていて、テーマを反映することができていた。

◆材料が多く準備されてあったが、イメージの固定化につながるのではないか。

○生徒が自分の作品に必要なものをそれぞれ持ってくることになっている。こちらが準備したもので制作を進めた場合、固定化につながるかもしれないが、それはこれから広げていきたい。

◆なぜ球体が多いのか。

○球体にこだわっていたわけではない。実は、球体からの脱却も考えており、ねじったりちぎったりして球体を変化させたものを提示し、奥行きや量感、展示方法も考えてみたが、生徒が選んだのは球体であった。前年度までの作品を美術室に展示しており、それを見た生徒達が球体に魅せられた。

◆暗室に入っている生徒が多かったが、なぜ光を使ったのか。

○光のもたらす効果を考え、提示してみたら使いたい生徒が多かった。そういった生徒には、ブラックボックスや暗い場所など展示場所も選ばせた。

◆生徒が持っていた「どうかなカード」とは何か。

○授業を考える上で、生徒同士の関わり合いや学び合いの時間を設定したかった。しか

し、制作を止めてまで話し合うのではなく、作りたい気持ちを尊重しながら、見る人がいたり、伝え合ったりしながら、自然に関わり合うことを目的とした。「どうかなカード」を使わずずっと作っているのもありだと考えている。そのカードがあることにより、聞く、作品を見てもらう、ということに少し意識が向けばいいと考えている。

３．指導助言

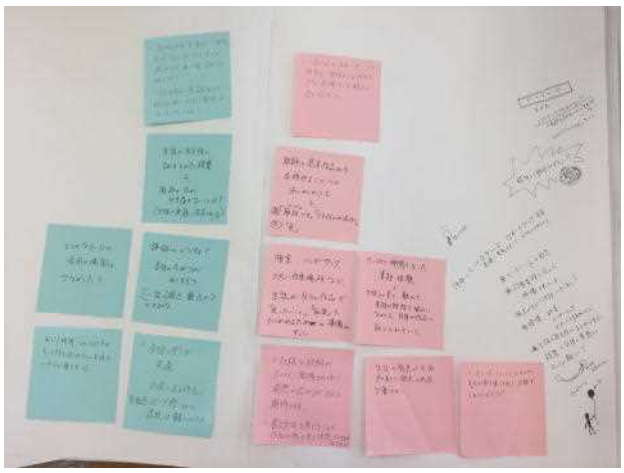
あらためて、造形教育の楽しさ、生き生きとしている生徒の姿を見た授業であった。よかった点の一つ目は、色、形、光など造形的な視点を生かした授業であったことである。導入で教師が視点を示してしっかりと意識させており、生徒もキーワードだけではなく、一人一人がその意味するところや効果を考え、試行錯誤していた。また、教師が演示をしながら造形的な視点による会話を積極的に行っており、共感的な声かけが子どもの学びを支え、そこからイメージを確かにする生徒もいた。

「球体」は、子どもが選んで作っているということが重要である。その中にどう自分を表現するかが大事である。また、「球体」を選んでいない生徒もおり、テーマや置きたい場所から、「球体」ではない形を選び、工夫しながら表現していた。

次に、制作時間が確保されていた。じっくり活動するからこそ、必要性のある話し合いや会話があった。ここに、必要感のある本来の学び合いがあり、それを中断してまで、アドバイスをし合う必要はない。言語活動をするのであれば、効果があるときに適切に行うべきである。美術は子どもが造形的な制作に没頭する姿を大切にしたい。そこから、自分の学びを実感できる時間となるように教師がコーディネートしていた。「どうかなカード」はその象徴であった。

また、暗室やぶら下げる場所など、展示方法を試して、自分の表現方法を確認しながら交流できるコーナーを設定していた。材料や用具コーナーも特設してあり、生徒の動線を工夫していた。そこで生徒は自分の制作の場とそれらのコーナーを行き来し、動きながら、互いの作品を見合い、声をかけており、ここにも自然な話し合いや学び合いの姿があった。対話や話し合いは、効果があるときに適切に行うべきであり、本時はそのタイミングではなかった。ということである。

美術は、課題解決学習であり、プロセスを大事にし、子どもの資質を育てる時間である。子ども自らが自分の課題を設定し、思いを試行錯誤しながら実現していくことができる。答えの見えない時代に、答えを自ら創り出していく子どもの姿があり、一人一人が思いを持って、思いを実現していくことができる。今日は、その美術の時間を確認できた時間であった。



美術館鑑賞　小４年「もしもアーティスト」～こんなタイトルつけたいな～

授業者：横手市立十文字第一小学校　　藤井志津子
指導助言者：大仙市立大曲西中学校教頭　西野　美佳
司会者：横手市立朝倉小学校　　高瀬　康子
記録者：横手市立植田小学校　　菅原　祐子
世話人：横手市立横手南小学校　千田　圭子

１．授業者から

○十文字第一小学校は、総合的な学習を通し、キャリア教育として秋田の再発見・再発信ということで様々な事柄に取り組んでいる。

○図工科の鑑賞の学習も、秋田の作家について年間指導計画を立てており、７月までに３名の作品鑑賞に取り組んでいる。

○今日の授業について、時間配分を間違えてしまいビフォーアフターが２名になってしまった。控え室で、授業について児童が話しかけてきた。沢山の気づきがあった。

○終末でもっと時間をかけ、児童の声を取り上げたかった。

２．協議

（成果）

○普段の積み重ねがしっかりできているため、学習の流れが身についていた。

○話を聞き取る力が付いていた。

○主体的な学びが身についていた。

○めあてとゴールが提示され、対話していくことで自分の変容に気付くことができていた。

○ビフォーアフターの発表が素晴らしい。

○よく準備されていた。

○積極的に話し合っていた。

○視点をはっきりと提示したことで、根拠をもって話し合わせていた。

○しっとりと絵を見ていた。

○発達段階に合わせていた。

○児童の見方を大切にしていた。

（めあてとゴールの提示）

（授業の話し合いの様子）

（課題）

○ビフォーアフターで、もっと話し合わせる時間を。

○美術館の都合もあるが、床に座ったままでの授業はきつかったのではないか。椅子に座るなどの手立てがあった方が良いと思う。

○絵のコピーを準備して、コピーでの話し合いであったが、せっかく実物があるのだから実物の前での発表にするべきであった。

○児童が発表していたキーワードを、もっと拾ってあげれば、広がり深まったと思う。

○同じ意見同士がグループになって、話し合わせたら良かったのではないかと思う。

○物語に捕らわれていた。色・音などもっと視点を与えると、また違った意見が出たのではないかと思う。

○「違います」ではなく、鑑賞には答えがあるわけではないので「あっいいね。」の言葉を入れた方がいいと思う。

（質問）

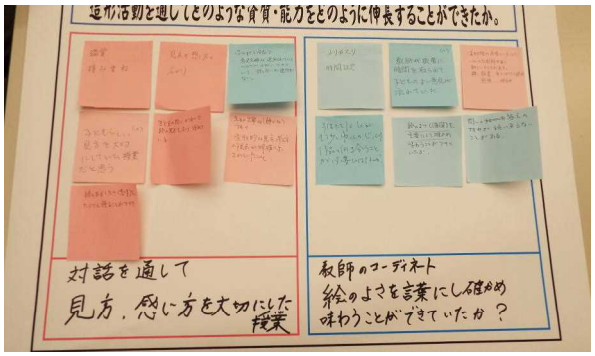
○絵のエピソードを児童に話さなくてもいいのか。知りたい児童もいるのではないか。答えを用意したりしないのか。疑問へ答えていくことも大切なのではないか。

（授業者の答え）

○タイトル・作者の意図を教えるつもりはない。

○発達段階に応じて、自由に想像していくことで、好きだというベースを作りたい。いつか大きくなっての発見になればよい。

○調べたくなったら、またそこで、新しい発見があると考える。



（話し合いから）

３．指導助言

○「六月の森」（福田豊四郎）は、作者（福田豊四郎）の幼い頃の思い出を描いた作品。４年生にぴったりの作品である。

○主人公が児童と同年齢くらいである。

○児童が好きな虫や鳥が描かれていて、絵の中に入り込んでいける題材である。

○自分のイメージをもっていた。

○友だちと話すのが大好きで、物語を作っていくことも大好きである。絵の中にあるものを具体的に見て、どこからそう思ったのか、根拠を明らかにして発表することが大切である。

○鍛えられているから児童だけで進められる。そうでなければ、教師のコーディネートで。どうしてそう思ったのかなど。

○タイトルを決める時、児童に任せるのではなく、発言を整理していくことが大切である。

○本物を目の前にしての授業であった。もっと本物に注目させたかった。コピーの色と微妙に違っていた。コピーは、深い緑だったため「怖い」に繋がったのではないか。本物は、淡い緑であった。

美術館鑑賞　中２年「ＡＫＩＴＡ・その色その形」～見て、感じたことを、伝えよう～

授業者：秋田市立御所野学院中学校　中尾　裕子
指導助言者：大仙市立大曲西中学校教頭　西野　美佳
司会者：秋田大学教育文化学部附属中学校　伊藤知佐子
記録者：秋田市立御野場中学校　齋藤　未樹
世話人：秋田市立泉中学校　今野　雅子

１．授業者から

御所野学院中では、日頃から言語活動を活用した授業をしている。生徒達は自分の感じたことや考えたことを言葉で表すのが得意な集団である。鑑賞の授業も年間指導計画の中に年に３回配置し実践してきている。また、題材の終末に振り返りとして鑑賞会を行っているので、表現についての感想を、根拠をもって話すことができる。そういった生徒の実態をふまえて、本時は出前美術館の会場を活用し、主体的に鑑賞する授業展開を試みた。

展示された作品には、デジタル画像や写真によってあらかじめ触れていたが、授業の中で、デジタル画像と本物の違いに絶句したという生徒の声も聞かれ、本物を見る機会があってよかったと思った。

今回の美術展は、秋田ゆかりの作家のものや秋田を題材とした作品展示だったため、‘秋田らしさ’に着眼して鑑賞するように投げかけた。小田野直武の絵を見て、「絵からおばあちゃん家のにおいがする」と発言した生徒がいた。授業をするにあたって、自分でも‘秋田らしさ’ってなんだろうと考えてみたが、絵からにおいを感じるんだ、と生徒の感性に驚く場面もあった。好きな絵に貼る青と秋田を感じる絵に貼る橙色の２色の付箋を準備したが、秋田らしさ一つに絞って鑑賞しても鑑賞が深まったかもしれない。また、導入が長引いて、鑑賞する時間や感想発表の時間が足りなかったことを反省している。そのあたりをご助言ご指導いただきたい。

２．質疑応答

Ｑ：展示作品から‘秋田らしさ’を感じ取らせようとした先生の意図は？

Ａ：もともとこの企画展が秋田ゆかりの作家や作品を展示したものということだったので、自分の好きな作品ということでの鑑賞だけでなく、秋田らしさを見つけるという視点で作品を見るのもおもしろいかなと考えた。美術作品における秋田らしさってなんだろうと考えることで郷土愛を育くむ契機にもしたかった。

Ｑ：作品から‘秋田らしさ’を見つけようという鑑賞の仕方は、デジタル画像を活用した事前の鑑賞時に、生徒から提案されたものか？

Ａ：教師側からの提案である。ただ、‘秋田らしさ’とはこういうものだという具体的なものや押しつけは一切していない。ホワイトボードに貼られていた‘秋田のイメージ’は生徒から出されたもの。

Ｑ：鑑賞の時間は年間でどのくらいか？

Ａ：５～６時間実施している。

Ｑ：秋田らしさのイメージを個々に持つために秋田の歴史や文化について調べてから本時に臨んだのか？また、展示作品の作家の出身や経歴、秋田との関わりについて、学習する機会はあったのか？

Ａ：総合的な学習の時間の３年間の中で、ふるさと教育を行い、郷土秋田に対する理解を深めている。作家に関しては、事前に、経歴や出身程度の基本情報は伝えていた。

３．協議

「造形活動を通してどのような資質・能力をどのように伸長することができたか」という協議テーマのもと、グループに分かれ話合いをした。

＜各グループの話合いの発表から＞

○デジタル画像と本物の違いや、実物のよさについて、もっと語らせてもよかった。みんなのいる場面で‘秋田らしさ’について取り上げ話合いをさせる授業展開でもよかった。

○生徒のコメントから、デジタル画像と本物の違いを感じ取れていることが分かった。美術館での授業は贅沢でよいひとときとなっていた。‘秋田らしさ’という問いかけが抽象的で、話合いを深めるのは難しかったのではないか？付箋を有効に活用していた。

○本物の作品の前で話し合っている生徒の姿がよかった。これまでの鑑賞学習の積み上げを感じた。描かれているものではなく、作家の作風から滲み出る‘秋田らしさ’について気づき言及していた。

○自分の好きな作品を鑑賞した後、作品を絞って‘秋田らしさ’について話合いを深める方法もあった。

○付箋や課題の提示の仕方、学習シート等、教師の仕掛けは上手く機能し、スムーズな学習の流れとなっていた。

○生徒の発表に「秋田の人の優しさが、絵の色に表れていた。」とあり、そういう発表を掘り下げ、秋田の人だからこんな色になるんだねとみんなで盛り上がることもできた。‘秋田らしさ’をキーワードにこの後いろいろな展開が考えられると思う。提案授業として興味深かった。

○鑑賞の授業ではあったが、今後、作品についてのパンフレットや紹介ポスターの作成でまとめをするのがおもしろいと思った。

○授業の終末に、２名からの発表だけでなく、意見交換をして、考えを共有したり、深めたりできたらよかった。‘秋田らしさ’に着眼して鑑賞することはよい面もあるが、見方や話合いの‘しばり’になってしまうという課題もある。同じく付箋の活用のさせ方にもう一工夫できたのではないか？

４．指導助言

まずは生徒が純粋に鑑賞することを楽しんでいた、本物を見て新たな気づき、新たなイメージが生まれることに喜びを感じていた。作品を前にして自然な対話が生まれ、作品の見方が広がっていた。質疑応答の中で‘ふるさと学習’が話題になっていたが、秋田ではふるさと学習は教育活動の中に根付いていて、ふるさとに対する理解や関心を高めるとともに郷土愛が育まれている。付箋の内容から、‘６月の森’に秋田らしさを感じている生徒が多かったので、協議中ご指摘があったように、その作品を取り上げ‘秋田らしさ’について話合いを深める展開も可能であった。生徒の活動の様子から、主体的、対話的な鑑賞の力を見ることができたが、深める支援や手立てをどうするかというのが今後の課題である。

幼稚園・保育園　自ら環境にかかわり、遊びを充実させる子どもの育成
～感じたことを自ら表現しようとする子どもに～

年少３歳児「色・いろいろ・楽しいな」　授業者：藤木　玲那
年中４歳児「さんさん祭りだ！竿燈だ！」　授業者：木村　隼加
年長５歳児「どんどん広がれ　年長ランド」　授業者：櫻庭　絵美
指導助言者：淑徳大学総合福祉学部教授　槇　英子

＜公開園の概要＞
認定こども園　山王幼稚園・保育園
所在地　秋田市山王中園町４－１５
公開クラス　年少１　年中１　年長１

＜年少３歳児　授業者：藤木玲那＞

活動名「色・いろいろ・楽しいな」

１．公開保育の様子

３歳児でもイメージしやすい夏の海・魚を題材に取り上げ、魚の形をした障子紙や画用紙に筆やたんぽを使って絵の具遊びを楽しんでいた。自分で好きな色や魚の紙を選択し、試行錯誤しながら製作する様子が見られた。出来上がると嬉しそうに保育者に見せたり、室内やテラスのシートの上に飾ったりするなど喜んで活動に取り組んでいた。

２．授業者から

絵の具と出合い、その楽しみ方を知ってほしいという願いがあり、様々な色や筆、形や材質の違う紙を用意した。展示スペースに透明のシートを準備したことで、魚になりきって潜ってみたり障子紙に描いた魚が透けるおもしろさを味わったりしていた。

３．協議

・主に、「環境」と「子どもの姿」について多くの意見が出された。
・種類や材料が豊富で、子どもたちは様々な色や形の変化を楽しんでいた。
・色を楽しむねらいは達成できていたが、絵の具の濃い薄いの発見までは難しかった。
・大事なのは子どもたちが楽しむこと、見えない部分にも楽しむためのたくさんの配慮がされていた。

＜年中４歳児　授業者：木村隼加　＞

活動名「さんさん祭りだ！竿燈だ！」

１．公開保育の様子

広いホールを有効に使いながら、自分だけのオリジナル竿燈を作った。作った傍ですぐに上げることができるため、上げては直すことを繰り返し、何度も試行錯誤する姿が見られた。子どもたちが前日までに作った衣装を身に着けて、お囃子の生演奏に合わせなが竿燈を上げて楽しむ様子が見られた。

２．授業者から

普段から製作活動を楽しんでいる。一学期に保護者と一緒に竿燈を作ったり、本物の竿燈を見たりする行事を経験したことで、自由遊びでも竿燈を作り遊んでいる姿が見られていた。様々な種類の材料を準備したことで、長く繋げて大きな竿を作ったり、提灯をたくさんぶら下げたりして、自分のオリジナル竿燈を作って楽しんでいた。

３．協議

・地元愛・文化の継承を大切にしていると感じた。竿燈祭りを身近に感じているからこそ、高さや長さや竿のしなりにこだわり工夫して作っていたのではないか。

・豊富な材料が使いやすいように準備されているとともに、スペースも十分にあり、作ったものですぐに遊んで試すことのできる環境だった。

・太鼓や笛の生演奏に合わせて子どもたちが竿燈を上げている姿が良かった。

＜年長５歳児　授業者：櫻庭絵美＞

活動名「どんどん広がれ　年長ランド」

１．公開保育の様子

前日までに必要な材料や設計図を各グループで準備し、本時では、各グループごとにお化け屋敷のお化けや看板などを製作。友だちと相談したり一緒に考えたりしながら、自分たちのイメージをうまく表現できるよう試行錯誤する様子が見られた。

２．授業者から

製作遊びを好み、作りたいもののイメージをしっかり持って楽しむ子どももいるが、自

分からは遊びを進められず、遠慮してしまいがちな子どもも多くいるクラスである。しかし、今回の活動では、夏休み前から作りたいお化けのイメージや設計図を描いたり、使いたい材料を選んだりしてクラスみんなで当日を心待ちにしていた。

３．協議

・保育者自身が楽しんでいることで、子どもたちも明るく楽しく取り組むことができている。信頼関係が築かれている。

・子どもたちがそれぞれのイメージや意見を出し合って作っていた。

・素材、教材選びなどがすばらしく、年長の子どもが夢中になって遊ぶことができるような楽しさに満ちていた。

＜指導助言　槇　英子先生＞

◇公開保育について

・年少は、環境設定がすばらしかった。学年内でしっかり話し合い、工夫されていると感じた。

・年中の竿燈づくりでは、地域性を最大限に生かし、物や人材が豊かに感じられる保育であった。

・年長では大好きなお化け屋敷に対するそれぞれの思いを表出する、形にする、共有する姿が見られた。

・どの学年も自己決定をする場を設けていた。自分で選ぶということは自分を作る事であり、造形では大事な要素である。

・幼児教育において、「導入」は意欲付けるだけではなく、出合ったものと対話し、遊ぶことも必要である。

・夢中で子どもたちが「楽しむ」「出合う」「感じる」をどの活動でも大事にしてほしい。

・体験を経験にしていくことが大切。保育者の共感が子どもを導いていく。

◇幼保部会　２０１８年　秋田大会

これまでの全国造形研究大会（２００８年大阪大会～２０１７年長野大会）の取組について、映像を用いて詳しくご紹介いただいた。

その後、幼保部会の公開保育の意義について次のようなお話があった。

・全国の造形表現を大切にしている保育現場が繋がることで、保育そのものを豊かにしていきたい。

・子どもの「安心」と「夢中」を支え、豊かな感性と創造性を育むことは大切である。そのための援助を互いに見合い、学び合うことが重要である。

・地域の特色を生かした環境や教材の工夫、質の高い保育を実現する具体的な手立てを学びながら、造形表現の意義を再確認し、互いに共有していきたい。

特別支援学校

プレイルームはもようでいっぱい！～みんなにみてもらおう，びっくりさせよう～

授業者：秋田大学教育文化学部附属特別支援学校小学部わかば学級（３・４年生　６名）
菊池　雄平（Ｔ１）・森田紗也子（Ｔ２）

支援学生（秋田大学）：菅生真由子・三浦　茉子・中田　咲紀・菅原　那美・工藤　唯花

指導助言者：秋田県立近代美術館副館長　樫尾　康子

司会者：髙橋省子　　記録者：石成舞

実践発表者：秋田県立栗田支援学校　北島　珠水

１．授業者から

小学部わかば学級３・４年生複式学級６名の授業を提示した。児童一人一人の実態と本時までの活動の様子をお話ししたい。

Ａ児は普段からこの活動が好きでだんだん表現活動が大きくなる傾向がある。これまでは緑色が主だったが、今日は青や白を使って時間いっぱい３０～４０分程度活動できた。

Ｂ児は体が小さいため、大きいキャンバスだと上まで手が届かないので、半分に切った物を使用した。姿勢が崩れることがあり、床に置いて活動したところ２枚完成させることができた。

Ｃ児は前時に絵本を見て真似し、本時ではシャワーや貯水槽など想像して描くことができた。今日は色を塗ると言って登校。自分の日焼けした肌の色を混ぜて作り、足に塗って楽しむ様子も見られた。

Ｄ児は何を描きたいかじっくり考えてから取り組んでいる。前時は３０分の活動のうち１５分程度考えていた。本時は支援学生と描きたい物を決めて描き始め、最後までじっくり取り組むことができた。

Ｅ児は一人ではなかなか取り組めないが、支援学生と話をしながら進めることで綺麗な色を使うことができるようになってきた。

Ｆ児はＡ児と同様に表現活動（塗ること）が好きである。塗る活動から創造的な活動に発展してほしいという指導者側の願いからマスキングテープを準備した。表現活動の広がりの手段の一つとして伝えたかった。

２．協議

○各校の図画工作、美術科の実践を含めて

◆ゆり支援学校（福田先生）

小学部は図画工作科、中学部高等部は美術部で道具の扱い方に気をつけたり、技術面の向上を図ったりしながら行っている。美術部は、由利高校美術部と交流しており、パソコンのアニメーションソフトを使ったプロジェクションマッピング等にも挑戦させたい。

◆能代支援学校（伊藤先生）

中学部の研究として美術を取り上げている。車椅子の生徒がいたり、発達障害の生徒がいたりと実態が多様だが、主体性や対話から学ぶと言った部分をどう授業に取り入れるのか改めて考える機会となった。

◆大曲支援学校（照井先生）

中学部で年数回、市の作品展に向けて制作している。テーマを揃えて制作することもあるが、学年で版画やドリッピング等、表現方法を変えることで、他学年からも学びがある。

◆横手支援学校（山田先生）

部活動の文化部に絵画班と写真班があり、写真班を担当している。知的に障害のある人は平面的な絵から抜け出すのが難しい言われているが、写真を教えていると構図について意識する場面がある。立体的な絵を描くことが難しい段階でも、写真を通じて構図について考えることができるのではないかと思う。

◆天王みどり学園（渋谷先生）

高等部では音楽・美術を選択授業として実施してきた。iPadを活用したポスター制作、写真展に向けた制作をしている。生徒が没頭できるような環境、仲間の表現を許容したり表現から影響を受けて自分の表現に生かしたりする場面設定などに配慮しながら行ってきた。本時の活動でも児童がお互いを影響し合う場面をもっと作っていくことでもっと楽しい活動になるのではないかと感じた。

◆きらり支援学校（会場先生）

本校でも一人一人が最大限に表現できるよう、問い掛ける場面を意識することで「～したい」という意図をくみ取った支援、表現したい気持ちを引き出す支援を心掛けている。個別での学習が多いが、時には一つのテーマで合同制作することも大事ではないかと考えている。一緒に作品を作る楽しさを感じたり、鑑賞して他者の意図を引き出したりし、他者のことを認めることができる。本時の活動は個々の表現活動に没頭し、自由に伸び伸びと実施していたが、お互いのよさを認め合うことで楽しさが増えるのではないかと感じた。

◆千葉県

２０２０年千葉大会の視察も兼ねて参観した。特別支援学級の美術を指導している。本時の授業は、子どもたちが楽しみながら集中し、一人一人が自信をもって取り組んでいると感じる授業だった。

特別支援学級の美術を担当して３年目で、これまで試行錯誤で実施してきたが、子どもの成長が早く、指導の楽しさを感じている。

３．指導助言

図工・美術が教育課程に位置付けられていることが非常に嬉しく感じられた。子どもたちが時間いっぱい、自分のために自分の時間を使っていることが特に印象に残った。生活単元学習だとみんなで一緒に作ろうという場面が多く、その場合途中で遊んでしまう児童も出てしまいがちだが、今日は３０分以上じっくりそれぞれが取り組めていて素晴らしい。ペース配分がみんな違うが、支援学生がとても上手に児童に言葉を掛けリードしていたので、あの持続に繋がっているのだろうと感じた。附属でなければできない部分もあると思うが、色々な地域の方々と授業を作ることもできるなと考えた。描いた絵を今後衝立や屏風などにして行くとのことだったが、授業としては描かせる時間を中心にしてほしい。本来の生活単元学習だと描いた絵をどうやって飾ろうという展開になるが、飾るのは先生方でよい。美術館のように格好良く展示してあげれば一つの動機付けになる。また、本物の屏風をどこかの場面で見ることで日本の文化に触れ、もっと大きな作品や掛け軸などもできて楽しい展開になるのではと感じた。作品と合わせて作家紹介などを含めた画集を作ってもおもしろい。Ｔ１がゆっくり周りながら見ている雰囲気もよかった。今後の図工も期待している。

４．実践発表（秋田県立栗田支援学校）

～多様な他者との協働を通して自ら学ぶ力の育成～「栗田の縄文プロジェクト」

高等学校

高校分科会は、本研究大会の性格や主たる参加者の校種を考慮して、異校種、特に中学校の先生が参加しやすいテーマである「中高一貫教育校」を柱に据えて実施した。今回実践発表と話題提供を行った３名はいずれも県立の中高一貫教育校に勤務し、高校生と中学生の両方の授業を兼務している高校教員である。

分科会には全国の小中高大の校種から約二十名の先生、大学生、美術関連企業の方々に参加していただき、積極的に協議、情報交換もしていただいた。この場を借りてお礼を申しあげたい。

なお、今回、高校分科会には指導助言者の設定をしなかったが、当日は、武蔵野美術大学教授の三澤一実先生が参加してくださり、協議の中で貴重なご意見と多くのご助言をいただくことができた。先生には『全高美工研2014秋田大会』の際にも指導助言を仰ぐなど、秋田の高校美術発展のために大変お世話になっている。三澤先生にも深く感謝申しあげたい。

Ⅰ　実践発表

題材名　「デザイン考察　～掃除機ヘンリーが変えたもの～」（高校美術Ⅰ）

発表者　秋田県立秋田南高等学校・中等部　教諭　深井裕之

司　会　秋田県立秋田明徳館高等学校　教諭　高久恵美

記　録　秋田県立秋田高等学校　教諭　深井富美子

１．授業者から

見た目にとどまらないデザインの本質の部分を生徒が深く考える機会としたい。そのために「デザインがもつ力」と「デザインがもたらす変化」を切り口に本題材を設定した。

これは高校美術Ⅰで取り扱った内容だが、当初の分科会計画では、これを中学３年生に発展題材として授業公開し、中高双方の先生方から協議してもらう予定だった。諸事情により授業公開の形でお見せできなかったが、中高両方の授業を動画で紹介するので、比較しながら協議していただきたい。

２．協議（参加者の発言より）

・美術には、正解はないが多様性があり、他者と違う自分に気付けるよさがある。それを引き出す生徒同士の活動には、教師の適切な声かけや助言が重要だと感じた。

・自分も中高一貫校。地域の中学校とデザインへのアプローチのしかたや考え方に差を感じることがあった。デザインは役に立つ、身近なものとしてとらえれるようにすることが大事になると思う。

・美術の中で、デザインは実社会につながる要素がある。デザインを専門とする先生が少ないからこそしっかりと進めたい。

三沢先生より

・デザインの考え方を生徒にわかりやすく指導できる先生が少ないので、形だけのポスターなどに走る授業がよくある。今回の提示はデザインの意味をきちんと考える場を設けてから制作に入るという点で意味のある授業になっている。単発の題材にせず、学んだことを生徒が自分のこととして実感し、自分で気付けるように、あと１時間でいいので、この続きの授業を行って欲しい。

Ⅱ　協議会

協 議 題　　「増加する中高一貫教育校における美術教育の現状と課題」

話題提供	秋田県立大館国際情報学院中学校・高等学校　教諭　小笠原祐子
	秋田県立横手清陵学院中学校　高等学校　教諭　田口　康成
	秋田県立秋田南高等学校・中等部　教諭　深井　裕之
司　　会	秋田県立秋田明徳館高等学校　教諭　高久　恵美
記　　録	秋田県立秋田高等学校　教諭　深井富美子

１．話題提供者から

話題提供した３校に共通の課題は、業務量で、指導する学年数、生徒数、授業時数の多さで、高校単独の時より３倍以上に増えるケースもあった。それに付随して増加する年間計画の作成や教材研究、成績処理等の負担、教材の保管場所の不足、設備の不備なども挙げられた。

また、幅広い年齢層の生徒への言葉遣いの切り替えの難しさや、高校で美術を選択しないと決めこんでいる生徒への対応の難しさなども挙げられ、中学校の先生の苦労が身にしみたという声も聞かれた。中学での物理的なすし詰め状態の授業を解消するため、１クラスを２分割して指導している学校もあった。

多くの課題が出される中で、３名が共通して挙げた中高一貫校の良さは、中高で継続的且つ発展的な指導計画を立てられる点や、１人の生徒の成長に寄り添った指導ができるという点であった。過重な業務を支える大きなモチベーションになっていると感じられた。

２．協議

中高一貫校の過酷な一面への驚きとともに、他県の先生からも同様な実態が紹介された。研究授業や部活動、作品展等のへの関わり方など、細かな質問も多く出された。

三沢先生より

・中高一貫校の大変さがよく伝わってきた。中には美術が嫌いな子や描けない子もいるが、見るのは好きだという生徒もいる。多様な見方を保障してあげることが大事。

・中学初期の題材開発が大切。そこで基礎を行って中２、中３で大作を。時間が足りない部分は、色を塗っていた部分を色紙で貼る等の手法を変えることで工夫できるのでは。

・せっかくの中高一貫校なので、生徒がずっと自分の作品を記録・保管するとポートフォリオとして、本人の成長を生徒自身が確認できる。

・中学では定期テストを実施するところもあるが、大切なのは実感的な理解。自分の体験を通して何が変わったのか、その理由は何かということ。今回から知識・技能が入った。実感的な理解は知識理解に入る。

３．まとめ

近年増加する中高一貫教育校だが、美術教育は中高の研究団体が分かれているため、その実態について、これまできちんと協議されることはなかったのではないだろうか。

小さな分科会とはいえ、ここでの協議が、中高一貫教育校を支える教員と、中高美術教育研究の連携に光をともす小さな一歩になることを祈念するものである。

大学・美術館部会　今日の大学教員養成の現状と、美術館教育の動向

大学部会は、日本教育大学協会全国美術部門(国立教員養成大学で構成。呼称「教大協」)と全国大学造形美術教育教員養成協議会(私立及び教大協に所属しない国公立大学で構成。呼称「全美協」)とで大学造形教育連絡協議会を設置し、全造連等の全国規模の研究団体の窓口となり、全造連においては大学部会を構成している。また、美術館部会と合同で会議を行っている。

本年度の議題は以下の通りであった。

１. 大学部会の役割について

懸案である「全造連での助言者など大学部会で積極的に支援していく体制をどのようにつくるか」に関しては大学と小中学校などの現場との連携が重要であり、全造連大会においても大学のできる役割を果たしたい。

次回愛知大会に向けて大会事務局に指導助言等で関われるよう申し入れをする事が確認された。

２. 教員養成系大学の課題について

今日の国立教員養成大学で起きている現状を報告し情報交換をした。

・人事凍結による退職教員の後任不補充が全国的に起きている。このことにより専門科目の偏りによる十分な内容教育が出来ない。

・教員養成系大学、学部の統合化の動きにより、鳥取大と島根大の統合で鳥取の教員不足が深刻化している（群馬大と宇都宮大との兼任問題も）。都道府県単位での地域に根ざした教員養成の重要性を教大協でアピールすべき。この件については、現在大学部会で担当している「中学校美術科教員実態調査」を継続し、必要に応じ新たな調査内容や方法を検討して行く必要がある。

・運営費交付金の傾斜配当による配当率の低下の影響で国立大学の教員養成学部の予算減が顕著になり十分な教員養成に繋がっていかない。特に美術科教員養成に関しては、教育学部内での学生数の少なさも影響している。また、大学が小学校教員養成中心にシフトし始め、中高の教員養成については私学などの専門大学に任せる動きも出てきた。このことは小中高などの連続性を考えて上で学生の不利になるとともに、教科専門の教員を置かなくてもよい口実になりかねない。

・大学の教員審査である再課程認定が現在進められており、それに伴い、高校の工芸免許取得の課程を返上する大学が出てきた。

３. 美術教育関連 8 団体の話し合い

昨年度行われた美術教育関連 8 団体(全造連も所属)の話し合い継続について担当学会を確認し、企画運営をするように依頼することとした。

４. 美術館教育の現状

2017 年 5 月に全国美術館会議が「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」を採択したことを踏まえ、美術館の動向を注視しながら美術館との連携・協力を深める動きを作り出していく必要があり、そのためにも美術館部会の強化が望まれる。

（記録：大橋功　岡山大学）

【小－Ａ】「みつめる」
～学び合い、高め合う造形教育～

岩手県花巻市立笹間第一小学校　上田　佳穂

１　実践発表から

上田先生から、教科書題材の「まぼろしの花」の導入を工夫することで、子どもが表したいことを表しながら、次々と思いを更新していく実践が紹介された。

導入で、「地域の笹間八景に住む仙人が笹間の人々が幸せになるように花に魔法をかけます。どんな魔法をかけたいですか？」と投げかけ、アイディアスケッチをさせ、絵や言葉でイメージをふくらませていく。花の種を紙粘土でつくる。互いの活動を見合いながら、どんなイメージか、形や色などの感じといった造形的な視点での対話が生まれる。対話を通して、自己の表し方をみつめ、もっともっと幸せになる魔法をかけたいと、次々と思いを更新していったというお話であった。

２　協議

「教科書題材に工夫を加え、自分の学校やクラスの実態に合わせた実践にしたことがよかった。」「まぼろしの花に魔法をかけるという設定にして子どもの思いを広げているところがよかった。」「時系列で振り返ることで深い学びにつながっている。」「地元の行事と関連付けた授業をすることで、地元に愛着をもったり地域の人と交流したりすることができる。」などの感想が聞かれた。

【小－Ｄ】「スノーファンタジーの世界で」
～雪を生かした造形遊び～

青森県十和田市立ちとせ小学校　葛西　　励

司会者：秋田市立土崎中学校　　鎌田　政美
記録者：秋田市立岩見三内小学校　田口香奈美
世話人：秋田市立四ツ小屋小学校　小野　　哲

１　実践発表から

葛西先生から、雪の特性や場所の特徴を生かしながら創造的な技能を育む、高学年の「雪を生かした造形遊び」の実践が紹介された。

「雪でできることを体験した中から、つくる物を考える」発想や構想をできる子どもを育てたい、自分と友達の考えを交流させながら、協力、協働して活動させたいという教師の願いから、１・２時間目は「雪を丸める・長く並べる・高く積み上げる」活動、３・４時間目は、妖精の暮らす世界をイメージしてつくったり、それぞれのグループがつながる工夫をしたりした。友達と交流する中で、表したいことを見付けたり、見方や考え方が豊かになっていったことが感じられたというお話であった。

２　協議

「５年生であれば、丸めて並べるは、普段やるようなことなので、そこから入ったのはなぜか。」という質問が出たが、「造形的な視点を入れるには必要な行為。」という意見も聞かれた。「場所は、どう生かしたのか。」「後半、妖精の世界に変わったのは、子どもの願いからか。」などの質問には「雪が集めやすく教師が見取れる場所。」「妖精は共通で思い描けるもの。」という説明があった。

【小－Ｂ】「鑑賞で〝よさ〟や〝美しさ〟を感じる力を高める授業実践」

秋田県大館市立城西小学校　米田　樹史

１　実践発表から

米田先生から，地域の画家の作品を学芸員になりきって紹介する鑑賞の学習を通して，表現にも生きる「感じる力」を高めるための実践が紹介された。

「わたしは城西美術館学芸員！」の題材を２時間扱いで実施。以下の流れで学習活動を展開した。①根田さんの意図や作品の特徴を考え，タイトルを決める。②おすすめ１枚を学芸員になりきって紹介する。③根田さんを招き，代表者が学芸員になって紹介する。④根田さんから作品に込めた思いを聞く。

成果としては，「鑑賞への意欲向上と必然性をもたせ主体的な活動につながった」「よさや美しさを感じる力が高まり，A表現に生かすことにもつながった」等の意見が出された一方，「低学年からの鑑賞の積み重ねや環境整備の必要性」という課題が残った。

２　協議

会場からは「地域人材に目を向けたすばらしい実践」「色・形・動きを視点に捉えていて参考になった」等の感想が出された。

【小－Ｅ】「対話を通して思いをつなげ，感性が響き合う造形活動」

秋田県湯沢市立湯沢西小学校　古屋　佳子

司会者：羽後町立西馬音内小学校　原　　和彦
記録者：湯沢市立湯沢東小学校　　佐藤美紀子
世話人：湯沢市立須川小学校　　柴田さゆり

１　実践発表から

古屋先生から，互いのよさや工夫を共有することで，感性が共鳴し合い，つくり出す喜びや学びの深まりを実感できる造形活動の実践が紹介された。

題材名「曲線に包まれて」を６時間扱いで実施。厚紙，アルミ線，銀線と素材を変えながら，特性を生かした表し方を工夫することができることをねらいとした。活動中に「なるほど発見会」「ミニ見合う会」を設定，感性の交流を図った。鑑賞の場は教室にとどまらず，作品が似合う場所を探すなど展示の工夫をした。成果としては，「素材の違いや曲線の美しさへの気付きにつながった」「意欲・自己肯定感が高まった」「郷土の伝統工芸を身近に感じ技や見方を培うことができた」等。課題は「道具に慣れる時間の確保」「児童の対話等学習の様子の見取りの工夫」であった。

２　協議

会場からは「曲線をテーマにした点や沢山の手立てが効果的」「３段階で深める進め方を参考にしたい」等の声が上がった。

【小－Ｃ】「つくり出す喜びを味わう造形活動を通して，感性を働かせながら，自分の思いを豊かに表現することができる図画工作科の指導をめざして」

福島県白河市立小野田小学校　角田　真弓

司会者：横手市立平鹿中学校　　柴田　緩子
記録者：横手市立横手南中学校　高橋真理子
世話人：横手市立横手北中学校　佐藤　　稔

１．実践発表から

「個」の活動を充実させるためには，「全体」で児童同士が互いに関わり合いながら，学び合う活動を充実させていく必要があるという考えから実践した小学４年の授業が紹介された。

研究内容の重点として２つの視点を設けて授業を行った。

〈視点１〉発想や構想や表現の工夫などについて自分の見方や感じ方を振り返る場を設定する。

〈視点２〉発想や構想の能力を育成するために材料に触れる場や時間を確保したり，適切な言語環境を位置づけたりする。

２．協議

友達との対話を授業の中に位置づけ，自由に聞きに行くことができる環境が子どもの発想や構想の力を高めているという感想が聞かれた。また，ポートフォリオによって既習の技法を選んで作品に生かしている子どももいて，ポートフォリオが学習に生かされているという意見が出された。

【小－Ｆ】「チョキチョキかみから　つくったよ」

愛知県名古屋市立東丘小学校　原　　敏史

１．実践発表から

小学校第１学年を対象にして，いろいろな形の紙から見立てたことを表現する題材である。紙を切り，絵を描き加えることで，ただの紙から作品へと変化させていく。その中で，新たな価値を生み出す力を身に付けることができると考える。

はじめに，画用紙をいろいろな形に切る「わくわくタイム」という活動を行い，造形活動に対する意欲を高めた。また，わくわく感を持続させるために，はじめから全てを見せないで，徐々に小出しにしていくことが有効であった。切った紙で使わない画用紙を友達と交換しあうことで，自分の思いに合う形を見つけることができた。

２．協議

幼稚園の先生から，幼小の接続に関連して，年長児では，発達段階よりも高度な表現が期待できることや，授業での言葉遣いについての話題が出された。小学校の先生からは，学習の中での的確な褒め方が子どもの意欲を持続させているという意見が出された。

【中－Ｇ】「美術を通した学び・繋がり・広がり」

山形県寒河江市立陵南中学校　亀井　道敬

【中－Ｉ】「思考の流れを記す美術ノートで協働的な学びを深める」

秋田県美郷町立美郷中学校　菅原　久実

司会者：美郷町立美郷中学校　渡部　直子

記録者：大仙市立豊成中学校　田中　武晴

世話人：大仙市立中仙中学校　佐藤　好一

１．実践発表から

亀井先生から，これまでの授業実践やさまざまな活動,そしてそこから学んだことを「学び・繋がり・広がり」の観点から構造化を図り，より具体的な実践が紹介された。

①秋田発「美術の授業展」から学んだ作品展を山形でも黒川紀章氏や岡本太郎氏が建築に携わった美術的価値の高い寒河江市役所を会場に開催した。次回できれば生徒企画で実施したい。②社会と繋がった「総合」の取り組みとしては，地元の道の駅オープンに合わせて行政とコラボして「りんごの森」プロジェクトを展開した。商品開発等々，一連の活動を通して教科を越えた横断的な力が活かされ，明らかな生徒の変容がみられた。③特別支援「美術」からの広がりとしては，階段アートとビデオレターの授業実践が紹介された。制作を通して願いや思いを発信し，生徒たちは友達や社会との繋がりを実感できた。

２．協議

会場からは，亀井先生が異動された後の活動の行方等についての質問が挙げられた。「亀井先生の教室を飛び出したダイナミックな実践は，とても素晴らしく，とても参考になった。」等々，絶賛の声が数多く聞かれた。

１．実践発表から

菅原先生から，空間演出デザインの共同制作を通して，生徒の思考が深まり，友達との学び合いに生きる美術ノートの活用が提案された。「思考の流れを記す美術ノートで協働的な学びを深める」実践が紹介された。

美術ノートの具体的な効果として次のような事柄が述べられた。①自分の意見をもち，思考を整理して話し合う学習活動ができた。②自分の考えと相手の考えの流れを視覚的に理解することにより，考えた内容を比較し，お互いの思考の流れを客観的に読み取りながら話し合い，構想できた。③図や文章に表しながら話し合うことで，お互い伝えたいニュアンスまで感じ取り,話し合うことができた。④形や色など共通事項を生徒が常に意識しながら話し合うことができた。⑤前時の学習を思いおこしたり，発想当初の思いを確認したりすることができた。

２．協議

会場からは，共同制作グループの方向性の引き出し方や評価等についての質問が挙げられた。「菅原先生の美術ノートの活用は，とても参考になる実践で大変勉強になった。」等の前向きな感想が多く，高評価を得た。

【中－Ｈ】「地域の産業を身近に感じながら天神山シューズコレクション」

愛知県名古屋市立供米田中学校　清水　翔一

１．実践発表から

清水先生から、思いを大切に表現し、自分の作品について語ることができる生徒の育成を目指し、地域産業を生かした実践が紹介された。

天神山中学校の学区はシューズショップやくつ工房が数多くあり、靴に関する産業が盛んである。そのような地域性に着目して題材を設定した。導入で、制作テーマを決めた後，各自パンフレットを作成してプレゼンテーションを行うなど学習意欲を高める工夫をした。制作では生徒一人一人に対応する手立てにより、作品のイメージを完成につなげられた。作品の一つは靴職人が実際に履ける靴として皮革で仕上げ、地元新聞でも記事に取り上げられた。

２．協議

会場からは、制作の過程や発想を導く工夫について質問された。構想２時間，制作８時間を要し、殆どの生徒は片足の靴を制作したが，中には一足分の靴を制作した生徒もいた。また、アイディアコーナーには様々な材料を置き、使ってみたくなるよう工夫した。キャッチボールカードには，認めるコメントを書き，教師が答えを出さないことで，生徒自身で考えたという達成感をもたせられた。

【中－Ｊ】「美術文化の継承と創造への関心を高める題材開発の工夫」

宮城県石巻市立住吉中学校　澤村美和子

司会者：由利本荘市立本荘東中学校　山下奈知美
記録者：由利本荘市立由利中学校　須田　秀二
世話人：にかほ市立象潟小学校　関口　琢也

１．実践発表から

澤村先生から、宮城県の伝統的な美術文化をもとに構想した３つの題材の授業実践が紹介された。

（１）①「釜神様（鑑賞）」（１年）…写真や実物を見て、どの釜神様をいいと思うか、根拠を示して鑑賞する。

②「釜神様をつくろう」（２年）…「○○の釜神様」に、どのような思いを込めて作るか考えて制作する。

（２）「受け継がれる形～家紋～」…家紋を鑑賞し、それに込められた思いを感じ取り、自分の考えた家紋をペーパーウェイトとして表現する。

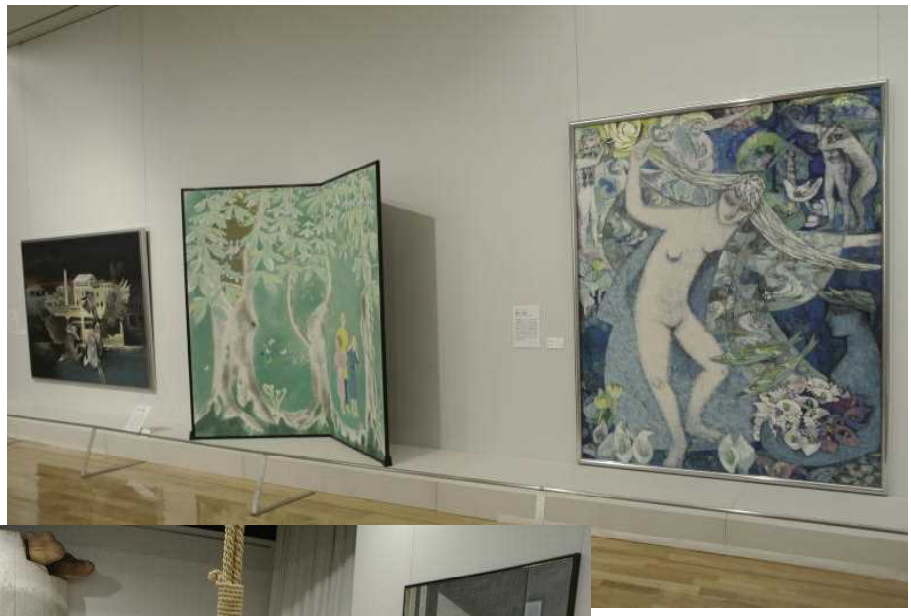
（３）「祈りのかたち～きりこ」…きりこに込められた祈りの気持ちを感じながら、グループで考えた祈りの形をつくる。

２．協議

会場からは「家紋を、立体であるペーパーウェイトで表現させることに教師のどのような思いがあったか」という質問があった。澤村先生は、高麗石を彫り、心を込めて磨いて形として置くことは、家紋を大切にすることに通じ、「先祖から受け継いだ形を大切に考え、その保存や継承にとする心情」を育てることになるという考えで実践された。

秋田県児童生徒美術展　話題作＆推賞作の作品展示

秋田県立近代美術館「出前美術館」～あきたの色と形～



稲田 豊四郎

平成３０年度　全国造形教育研究大会秋田大会　拡大プロジェクト委員会

大会会長	大会会長	小林高太郎	仙北市立神代中学校
実行委員	実行委員長 副実行委員長	木村　　伸 鎌田　　悟	大館市立比内中学校 秋田市立秋田北中学校
総 務 部	事務局 会計担当 広報担当 来賓・講師担当	鎌田　政美 松田由紀子 田中真二朗 永井　孝久	秋田市立土崎中学校 秋田市立御所野小学校 大仙市立西仙北中学校 大館市立有浦小学校
研 究 部	研究推進 授業づくりチーム統括 実践発表分科会運営 指導助言統括	菊地　　篤 大野　一紀 (北)嘉藤　貴子 (中央)大野　一紀 (南)門脇　伸子 築地　　洋 田森　　舞 黒沢　　淳	秋田市立雄和中学校 秋田市立下北手小学校 北秋田市立鷹巣南中学校 秋田市立下北手小学校 仙北市立桧木内小学校 秋田県立秋田南高等学校中等部 秋田県教育センター 秋田市教育研究所
編 集 部	大会要項・学習指導案集 大会報告書	門脇　伸子 嘉藤　貴子	仙北市立桧木内小学校 北秋田市立鷹巣南中学校
運 営 部	運営全般 会場担当 研究説明・講演会担当 文科講話・全体会担当 レセプション担当	加賀谷政広 榎　実和子 松田　清悦 加藤　久夫 嘉藤　貴子 中村　公俊 三浦　直樹	秋田市立岩見三内中学校 秋田市立外旭川小学校 秋田市立桜中学校 東成瀬村立東成瀬小学校 北秋田市立鷹巣南中学校 秋田市立外旭川中学校 にかほ市立平沢小学校
連 携 部	連携統括・高校担当 幼・保担当 特別支援担当 美術展・美術館連携担当	田村　　稔 石川　未加 林　栄美子 西野　美佳 中村　紀幸 小野　　哲	由利本荘市立岩谷小学校 秋田市立八橋小学校 秋田県立視覚支援学校 大仙市立大曲西中学校 秋田市立日新小学校 秋田市立四ツ小屋小学校

平成３０年度　秋田県造形教育研究会役員

会　長	永井　孝久	大館市立有浦小学校
副会長	鎌田　　悟 門脇　伸子 加藤　久夫	秋田市立秋田北中学校 仙北市立桧木内小学校 東成瀬村立東成瀬小学校
監　事 （会計監査）	三浦　直樹 小野　　哲	にかほ市立平沢小学校 秋田市立四ツ小屋小学校
幹事長	木内　　衛	由利本荘市立本荘北中学校
研究部長	菊地　　篤	秋田市立雄和中学校
副幹事長	鎌田　政美 佐々木亜希子	秋田市立土崎中学校 大館市立東中学校
幹事（会計） （造形秋田）	松田由紀子 田中真二朗	秋田市立御所野小学校 大仙市立西仙北中学校

地　区	会　長	事　務　局	研　究　部
鹿角	北林　孝男 鹿角市立大湯小学校	髙杉　雅子 鹿角市立大湯小学校	関　　清志 鹿角市立花輪第一中学校
大館 北秋	永井　孝久 大館市立有浦小学校	佐々木亜希子 大館市立東中学校	工藤　明美 北秋田市立鷹巣中学校
能代 山本	伊藤　　亙 能代市立東雲中学校	渡部　悦子 能代市立東雲中学校	田中絵里奈 能代市立能代第一中学校
男鹿 潟上南秋	三浦　真澄 男鹿市立美里小学校	中川　　努 潟上市立天王中学校	都留賀津人 男鹿市立男鹿東中学校
秋田市	鎌田　　悟 秋田市立秋田北中学校	菊地由希子 秋田市立大住小学校	
本荘 由利	木谷　玲子 由利本荘市立西目小学校	木内　　衛 由利本荘市立本荘北中学校	関口　琢也 にかほ市立象潟小学校
大曲 仙北	門脇　伸子 仙北市立桧木内小学校	田中真二朗 大仙市立西仙北中学校	菅原　久実 美郷町立美郷中学校
横手	佐藤　　稔 横手市立横手北中学校	高橋真理子 横手市立横手南中学校	柴田　緩子 横手市立平鹿中学校
湯沢 雄勝	加藤　久夫 東成瀬村立東成瀬小学校	三浦　秀巳 羽後町立羽後明成小学校	仙道真理子 湯沢市立山田中学校

AKITA ZOKEI

秋田県造形教育研究会　発行